佐賀県文化財調査報告書第98集

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 8

1990年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県農業基盤整備事業に係る

文化財調査報告書　8

１９９０年3月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

はじめに

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の実施に先立ち、埋蔵文化財の確認調査を行った結果についてまとめたものです。

県教育委員会では、文化財の保護と農業生産基盤の整備事業との調整を図るため、事業実施に先立って確認調査を実施し、その結果に基づいて文化財の保護行政を進めております。

昭和63年度につきましても関係各位のご協力のもとに、事業計画予定地内における埋蔵文化財の存否について確認調査を行ったところ、旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が確認されました。この調査結果を踏まえ、県及び関係市町村の農林担当部局との間で文化財の保護と農業基盤整備事業との調和について協議し、関係各位のご努力によって多くの遺跡を後世に伝えることができるようになりました。

また、同時掲載しております発掘調査（本調査）の記述については、昭和62年度に実施した確認調査によってその所在を確認した遺跡のうち、基盤整備の設計変更等による文化財の保護措置を尽くした結果、最終的に発掘調査に至ったものの概要報告であり、その調査成果の一端を紹介するものです。

調査にあたって、文化庁・県農林部・関係市町村の教育委員会・土地改良担当課並びに地元の皆様から深いご理解とご協力を賜り、お陰をもちまして埋蔵文化財の保護について所期の使命を果すことができました。関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

平成２年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　志　岐　常　文

例　　言

1．本書は国庫補助を受け、昭和63年度及び翌平成元年度に施工計画の佐賀県農業基盤整備事業に先行して、昭和63年度に実施した確認調査並びに本調査の成果をまとめたものである。

2．確認調査は関係市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が実施した。

3．遺構の実測及び写真撮影は調査員が行った。

4．遺物の整理・実測・製図・報告書作成作業は佐賀県文化課で行った。

・遺物整理……中島美須三・田中ハルミ

・遺物実測……古賀安子・梅野角子・上瀧光子・神田浩子・宮地正子

・製　　図……三好文子・鳥谷智子

5．本書の執筆は下記の分担で行った。また、執筆に当たっては各調査担当者より提出された「確認調査結果報告書」並びに「発掘調査実績報告書」を参考にした。なお各調査担当者には必要に応じてご教示を戴いた。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ……樋口秀信・徳永貞紹

Ⅳ－1……山田　正　　Ⅳ－2～4……太田　睦　　Ⅳ－5……中尾修二

Ⅳ－6……原田大介　　Ⅳ－7……前田達男　　Ⅳ－8……久保伸洋

Ⅳ－9……草野誠司　　Ⅳ－10、11……八尋　実　　Ⅳ－12……緒方祐次郎

Ⅳ－13……堤　安信　　Ⅳ－14……福田義彦　　Ⅳ－15……木島慎治

Ⅳ－16、17……田中稿二　　Ⅳ－18～20……種浦　修　　Ⅳ－21……古庄秀樹

Ⅳ－22……原田保則　　Ⅳ－23……坂井義哉　　Ⅳ－24……加田隆志

Ⅳ－25～27……渡部俊哉　　Ⅳ－28……田島龍太　　Ⅳ－29……中園成生

Ⅳ－30……有光宏之

6．本書の編集は樋口秀信が担当した。

凡　　例

1．　遺構番号に用いた分類記号は、

ＳＢ：住居跡・建物跡、　ＳＨ：竪穴住居跡、　ＳＥ：井戸跡、　ＳＤ：溝跡、

ＳＧ：集石遺構、　ＳＪ：甕棺・壺棺、　ＳＫ：土壙、　ＳＸ：自然谷・性格不明の遺構・その他、　Ｐ：柱穴・小穴　を示す。

2．用いた方位は地図が座標北、遺構図は磁北である。

3．挿図中の記号で、

■は遺構・遺物包含層が検出された試掘溝

□は遺構・遺物包含層が検出されなかった試掘溝　を示す。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過……1

1．平成元年度施行予定の農業基盤整備事業計画に伴う文化財確認調査……1

(1)　農業基盤整備事業施行計画に係る協議……1

(2)　文化財確認調査……1

(3)　農業基盤整備事業と文化財保護に係る協議……2

Ⅱ．調査組織……11

Ⅲ．昭和63年度文化財確認調査の内容……13

1．佐賀東部地区の調査……13

(1)　鳥栖市……14

(2)　基山町……16

(3)　中原町……19

(4)　北茂安町……21

(5)　上峰村……23

(6)　三根町……24

(7)　三瀬村……25

(8)　神埼町……25

(9)　千代田町……30

2．佐賀西部地区の調査……31

(1)　佐賀市……32

(2)　多久市……39

(3)　川副町……42

3．佐賀南部地区の調査……44

(1)　武雄市……45

(2)　鹿島市……46

(3)　北方町……50

(4)　白石町……50

(5)　太良町……53

4．佐賀北部地区の調査……54
(1) 伊万里市……55
(2) 西有田町……58
(3) 七山村……59
(4) 厳木町……59
(5) 相知町……60
5．佐賀上場地区の調査……63
(1) 唐津市……64
(2) 鎮西町……65
(3) 玄海町……65
(4) 肥前町……67
6．筑後川下流用水事業に係る調査……70

Ⅳ．昭和63年度発掘調査の概要……71

《佐賀東部地区における調査》
1．東福寺遺跡（基山町）……72
2．原古賀三本谷遺跡（中原町）……74
3．原古賀四本谷遺跡（中原町）……76
4．原古賀五本谷遺跡（中原町）……78
5．中野城跡（北茂安町）……80
6．船石遺跡（上峰村）……82
7．西島二本杉遺跡（三根町）……84
8．大曲二ノ坪遺跡・大曲鶴ノ森遺跡（東脊振村）……86
9．田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡（三田川町）……88
10．志波屋一ノ坪遺跡（神埼町）……90
11．上志波屋七ノ坪遺跡（神埼町）……92
12．横武城跡（神埼町）……94
13．下西八本松遺跡（千代田町）……96
《佐賀西部地区における調査》
14．村徳永遺跡（佐賀市）……98
15．立野遺跡（佐賀市）……100
16．於保三本松遺跡（大和町）……102
17．本村籠遺跡（大和町）……104

18. 三重本村遺跡（諸富町）…… 106
19. 三重櫟ノ木遺跡（諸富町）…… 108
20. 石塚古墳群２号墳（諸富町）…… 110
21. 寺浦廃寺（小城町）…… 112
《佐賀南部地区における調査》
22. 市場遺跡（武雄市）…… 114
23. 井手橋遺跡（武雄市）…… 116
24. 吹野遺跡（鹿島市）…… 118
25. 湯崎東遺跡（白石町）…… 120
26. 久治遺跡（白石町）…… 122
27. 多田遺跡（白石町）…… 124
《佐賀上場地区における調査》
28. 唐ノ川遺跡群（唐津市）…… 126
29. 来島通之陣跡（呼子町）…… 128
30. 牟形遺跡群（玄海町）…… 130

V. 総　括…… 132

挿　図　目　次

図１　昭和63年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図……３～４
図２　佐賀東部地区周辺地形図……13
図３　鳥栖市・鳥栖北部地区（山浦新町地区）試掘溝設定図……15
図４　鳥栖市・鳥栖西部地区（立石吉原地区）試掘溝設定図……16
図５　鳥栖市・鳥栖西部地区（立石柳ノ元地区）試掘溝設定図……17
図６　基山町・園部地区Ⅰ工区（鈴町地区）試掘溝設定図……18
図７　中原町・中原北部地区試掘溝設定図(1)……19
図８　中原町・中原北部地区試掘溝設定図(2)……20
図９　北茂安町・北茂安西部工区試掘溝設定図……22
図10　神埼町・神埼工区（祇園原地区）試掘溝設定図……26
図11　神埼町・神埼工区（姉川地区）試掘溝設定図……28
図12　神埼町・神埼工区（茜地区）試掘溝設定図……29
図13　佐賀西部地区周辺地形図……31
図14　佐賀市・北川副地区試掘溝設定図……33
図15　佐賀市・久保泉西部地区試掘溝設定図(1)……34
図16　佐賀市・久保泉西部地区試掘溝設定図(2)……35
図17　佐賀市・久保泉東部地区試掘溝設定図(1)……36
図18　佐賀市・久保泉東部地区試掘溝設定図(2)……37～38
図19　佐賀市・兵庫南部地区試掘溝設定図……40
図20　多久市・四下地区試掘溝設定図……41
図21　佐賀南部地区周辺地形図……44
図22　武雄市・川登地区試掘溝設定図……46
図23　鹿島市・鹿島西部地区（筒口地区）試掘溝設定図……48
図24　白石町・白石西３－１工区試掘溝設定図……51
図25　佐賀北部地区周辺地形図……54
図26　伊万里市・平山地区試掘溝設定図……57
図27　西有田町・柳谷地区試掘溝設定図……58
図28　西有田町・柳谷地区NO.5試掘溝出土遺物実測図……59
図29　相知町・大野地区試掘溝設定図……61
図30　佐賀上場地区周辺地形図……63
図31　玄海町・牟形地区試掘溝設定図……66

図32　東福寺遺跡周辺地形図……72
図33　東福寺遺跡遺構配置図……73
図34　原古賀三本谷遺跡周辺地形図……74
図35　①原古賀三本谷遺跡全景　②ＳＤ001 土器出土状況 ③ＳＤ107 器台出土状況 ……75
図36　原古賀四本谷遺跡周辺地形図……76
図37　①原古賀四本谷遺跡全景……77
図38　原古賀五本谷遺跡周辺地形図……78
図39　①原古賀五本谷遺跡全景　②全景　③ＳＨ032　④ＳＫ072　⑤ＳＢ018
⑥ＳＢ069 ……79
図40　中野城跡周辺地形図……80
図41　①中野城跡調査区全景　②ＳＤ－５　③ＳＫ－１　④ＳＫ－２……81
図42　船石遺跡周辺地形図……82
図43　①船石遺跡８区全景　②９・10区全景　③８区（弥生）住居跡
④９区（弥生）住居跡群　⑤10区（縄文後期）住居跡　⑥作業風景……83
図44　西島二本杉遺跡周辺地形図……84
図45　①西島二本杉遺跡調査区全景　②ＳＥ125敷居板出土状況　③ＳＰ207土壙墓
④ＳＡ213柵列 ……85
図46　大曲二ノ坪遺跡・大曲鶴ノ森遺跡周辺地形図……86
図47　①大曲二ノ坪遺跡調査区全景　②土層堆積状況　③畝状遺構上面検出状況……87
図48　田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡周辺地形図……88
図49　①田手一本杉遺跡　②田手二本杉遺跡遠景　③田手一本杉遺跡南壁土層
④田手二本杉遺跡ＳＤ07遺物出土状況……89
図50　志波屋一ノ坪遺跡周辺地形図……90
図51　①志波屋一ノ坪遺跡調査区全景　②弥生時代溝跡　③奈良時代建物跡
④弥生時代後期竪穴住居跡　⑤奈良時代土壙　⑥弥生前期甕棺墓……91
図52　上志波屋七ノ坪遺跡周辺地形図……92
図53　①上志波屋七ノ坪遺跡調査区全景　②１区全景　③竪穴住居跡
④縄文早期集石遺構　⑤江戸時代建物跡　⑥掘立柱建物跡……93
図54　横武城跡周辺地形図……94
図55　①横武城跡９区全景　②５区全景　③９区ＳＤ904 溝遺物出土状況
④10区ＳＤ1001・ＳＤ1004溝　⑤11区掘立柱建物跡　⑥11区祭祀遺構遺物出土状況…95
図56　下西八本松遺跡周辺地形図……96
図57　①下西八本松遺跡Ａ地区全景　②Ｂ地区全景　③土器集中部近景　④溝跡検出状況…97

図58　村徳永遺跡周辺地形図……98
図59　①村徳永遺跡全景　②C地区全景　③B地区SE034井戸枠出土状況
　　④B地区SB020全景　⑤B地区SK025遺物出土状況……99
図60　立野遺跡周辺地形図……100
図61　①立野遺跡全景　②SX001周溝状遺構　③SX001周溝状遺構遺物出土状況……101
図62　於保三本松遺跡周辺地形図……102
図63　①於保三本松遺跡調査区全景　②北側調査区　③南西調査区　④南東調査区
　　⑤SI106竪穴住居跡　⑥SB95掘立柱建物跡……103
図64　本村籠遺跡周辺地形図……104
図65　①本村籠遺跡北側調査区全景　②南側調査区全景　③SP310土壙墓
　　④SP310土壙墓遺物出土状況　⑤SB46掘立柱建物跡……105
図66　三重本村遺跡周辺地形図……106
図67　①三重本村遺跡遠景　②同　③3区土壙……107
図68　三重樔ノ木遺跡周辺地形図……108
図69　①三重樔ノ木遺跡1区全景　②1区東側全景　③1区中央全景　④1区西側全景
　　⑤2区全景……109
図70　石塚古墳群2号墳周辺地形図……110
図71　①石塚古墳群2号墳　②石塚古墳群1号墳……111
図72　寺浦廃寺周辺地形図……112
図73　①寺浦廃寺調査区東側　②調査区中央部　③調査区東側　④調査区西側　⑤土壙
　　⑥SD01……113
図74　市場遺跡周辺地形図……114
図75　①市場遺跡11地区全景　②8地区全景　③SK044　④SH050　⑤SK068
　　⑥SH076……115
図76　井手橋遺跡周辺地形図……116
図77　①井手橋遺跡62地区全景　②62地区東半部……117
図78　吹野遺跡周辺地形図……118
図79　①吹野遺跡遠景　②第1調査区全景　③第2調査区全景
　　④C・D－2・3区遺物出土状況……119
図80　湯崎東遺跡周辺地形図……120
図81　①湯崎東遺跡全景　②SB201・SD202　③木製品出土状況　④SB203柱穴……121
図82　久治遺跡周辺地形図……122
図83　①久治遺跡北区全景　②SK081墨書土器出土状況　③SK090木製鋤出土状況……123

図84　多田遺跡周辺地形図…… 124
図85　①多田遺跡Ｅ地区全景　②ＳＫ086 ③ＳＤ016 …… 125
図86　唐ノ川遺跡群周辺地形図…… 126
図87　①唐ノ川高峰遺跡全景　②唐ノ川高峰遺跡遠景　③唐ノ川高峰遺跡包含層遺物出土状況　４Ｅ９～16区　④唐ノ川境遺跡Ａ・Ｂ－１区全景…… 127
図88　来島通之陣跡周辺地形図…… 128
図89　①来島通之陣跡中央部全景　②集石遺構　③近世陶片出土状況　④扁平打製石斧出土状況…… 129
図90　牟形遺跡群周辺地形図…… 130
図91　①牧ノ地Ⅰ遺跡（遺物出土状況）　②牧ノ地Ⅱ遺跡（遺物出土状況）　③牧ノ地Ⅱ遺跡（遺物出土状況）　④稗田Ⅰ遺跡（遺物出土状況）　⑤稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）　⑥稗田Ⅱ遺跡　５区全景　⑦稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）　⑧稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）…… 131

表　目　次

表１　農業基盤整備事業施工予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和63年度実施）……５～８
表２　農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査一覧表（昭和63年度実施）……９～10

Ⅰ．　調査に至る経過

1．平成元年度施行予定の農業基盤整備事業計画に伴う文化財確認調査

(1)　農業基盤整備事業施行計画に係る協議

本県においては、県農林部所管、及び市町村所管の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護については、県農林部と県教育委員会との間で確認した『農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項』（昭和53年締結、昭和59年改正）に基づき、協議調整を行っている。平成元年度農業基盤整備事業施行計画については、昭和63年９月下旬に農地整備課・農業振興課・建設鉱害課から施行予定地の図面を添え、文化課に協議があった。

この施行計画に係る埋蔵文化財確認調査の対象面積は合計1449.4haに達した。地区別で見ると、佐賀東部地区（鳥栖市・基山町・中原町・北茂安町・上峰村・三根町・三瀬村・神埼町・千代田町）460.3ha、佐賀西部地区（佐賀市・多久市・川副町）588.5ha、佐賀南部地区（武雄市・鹿島市・北方町・白石町・太良町）262.4ha、佐賀北部地区（伊万里市・西有田町・七山村・厳木町・相知町）105.8ha、佐賀上場地区（唐津市・鎮西町・玄海町・肥前町）32.4haである。関係する農業基盤整備事業として、県営圃場整備事業・干拓地等農地整備事業・県営土地改良総合整備事業・団体営圃場整備事業・団体営土地改良総合整備事業をはじめ、農業構造改善事業・山村振興農林漁業対策事業・農道整備事業・農地等鉱害復旧事業など多岐にわたっている。

また九州農政局所管の国営上場農業水利事業に伴う文化財の取り扱いに関する協議（唐津市・鎮西町・玄海町・肥前町）、水資源開発公団所管の筑後川下流用水事業に伴う文化財協議（北茂安町・神埼町）もなされた。

(2)　文化財確認調査

協議を受けた事業計画地区（工区）の設計図に関して、まず工区内に周知の文化財が所在しているかどうかを遺跡地図等によって確認するとともに、関係市町村の文化財担当専門職員から埋蔵文化財に関する情報の収集を行うほか、遺跡が立地し得る自然条件にあるかどうかといった点も含めて、まず事前の検討作業を行った。

そして、各事業計画地区について、関係市町村教育委員会の文化財担当職員とともに現地踏査を実施して検討を重ね、その資料を基に遺跡の存在が予測され、確認調査が必要な地区・地点（表１）を決定した。

確認調査の実施にあたり、関係市町村の教育委員会・土地改良担当課、県農林部の関係諸課・各農林事務所との『昭和64年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会』（第１回）を、県教育委員会が主催して10月18日に開催した。協議会においては全体協議の後、市町村毎に関係者による個別協議の場を設け、事業計画の概要説明、現地踏査等の検討結果の報告、

確認調査の円滑な実施にあたっての打ち合わせを行った。

文化財確認調査は、上場地方及び西松浦郡等の稲刈りが早く終了する市町村では10月下旬から開始し、その他の市町村でも麦の種蒔き時期との関係で、11月中旬までには実施した。確認調査には、原則として２ｍ×２ｍの試掘溝（トレンチ）を20m間隔に碁盤目状に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、分布範囲を調査する方法を採用した。

(3) 農業基盤整備事業と文化財保護に係る協議

調査によって事業計画地（工区）内で確認された遺跡は、佐賀東部地区129,500㎡、佐賀西部地区31,800㎡、佐賀南部地区14,000㎡、佐賀北部地区12,800㎡、佐賀上場地区13,300㎡の合計201,400㎡である。

この確認調査の結果をもとに、関係市町村教育委員会が主体となって個別協議を実施し、工法上遺跡に影響を及ぼす地点については、水路位置の変更・盛土による田面高の嵩上げ・圃場の区画変更等の設計変更を中心に、技術的・経済的に可能な保存方法を検討し、事業計画と文化財保護に関する調整を図った。この間、農林側には数度にわたる設計変更に関して積極的に対処していただいた。

このような個別協議を経て、12月20日に第２回目の『農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会』を開催し、昭和64年度（平成元年度）の事業計画と文化財保護との最終的な調整がなされた。この結果、盛土工法等の採用によって遺跡の現状保存を図り、96,600㎡については昭和64年度（平成元年度）に発掘調査を実施して記録保存を行うことになった。

また昭和63年度に関係各市町村教育委員会が実施した発掘調査（表２）は、昭和62年度に確認調査を実施し、農業基盤整備事業担当部局との協議を経た結果、記録保存で対応することになったものである。

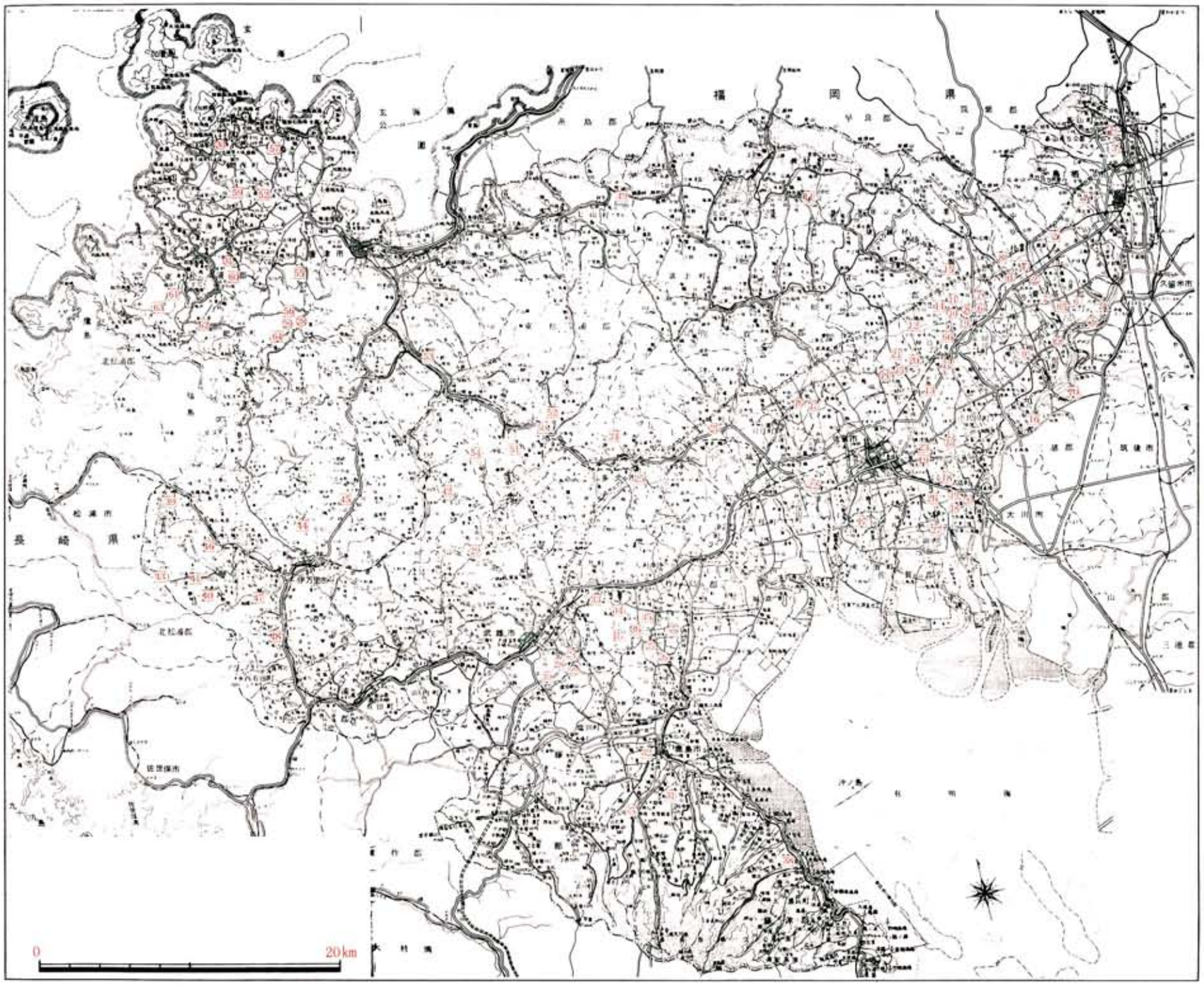


図1　昭和63年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図

		確認調査地区		発掘調査遺跡	
I 佐賀東部地区	1	鳥栖北部	(鳥栖市)	① 東福寺遺跡	(基山町)
	2	鳥栖西部	(〃)	② 原古賀遺跡群	(中原町)
	3	園部	(基山町)	③ 中野城跡	(北茂安町)
	4	中原北部	(中原町)	④ 船石遺跡	(上峰村)
	5	北茂安東部	(北茂安町)	⑤ 西島二本杉遺跡	(三根町)
	6	北茂安中部	(〃)	⑥ 大曲二ノ坪遺跡	(東脊振村)
	7	北茂安西部	(〃)	⑦ 大曲鶴ノ森遺跡	(〃)
	8	上峰北部	(上峰村)	⑧ 田手一本杉遺跡	(三田川町)
	9	三根西一期	(三根町)	⑨ 田手二本杉遺跡	(〃)
	10	大善寺北部	(〃)	⑩ 志波屋一ノ坪遺跡	(神埼町)
	11	小竹	(三瀬村)	⑪ 上志波屋七ノ坪遺跡	(〃)
	12	神埼(祇園原)	(神埼町)	⑫ 横武城跡	(〃)
	13	神埼(姉川)	(〃)	⑬ 下西八本松遺跡	(千代田町)
	14	神埼(黄)	(〃)		
	15	志波屋(農免道路)	(〃)		
	16	千代田(迎島)	(千代田町)		
II 佐賀西部地区	17	城西第1・第2	(佐賀市)	⑭ 村徳永遺跡	(佐賀市)
	18	北川副	(〃)	⑮ 立野遺跡	(〃)
	19	巨勢	(〃)	⑯ 於保三本松遺跡	(大和町)
	20	久保泉西部	(〃)	⑰ 本村籠遺跡	(〃)
	21	久保泉東部	(〃)	⑱ 三重本村遺跡	(諸富町)
	22	嘉瀬	(〃)	⑲ 三重樫ノ木遺跡	(〃)
	23	兵庫南部	(〃)	⑳ 石塚古墳群2号墳	(〃)
	24	四下	(多久市)	㉑ 寺浦廃寺	(小城町)
	25	多久東部	(〃)		
	26	川副北部	(川副町)		
	27	川副中部	(〃)		
III 佐賀南部地区	28	橘	(武雄市)	㉒ 市場遺跡	(武雄市)
	29	本部	(〃)	㉓ 井手横遺跡	(〃)
	30	川登	(〃)	㉔ 吹野遺跡	(鹿島市)
	31	鹿島西部	(鹿島市)	㉕ 湯崎東遺跡	(白石町)
	32	中村	(〃)	㉖ 久治遺跡	(〃)
	33	橋下	(北方町)	㉗ 多田遺跡	(〃)
	34	白石西1－3	(白石町)		
	35	白石西3－1	(〃)		
	36	白石西4－2	(〃)		
	37	白石西4－3	(〃)		
	38	片峰	(太良町)		
IV 佐賀北部地区	39	立岩	(伊万里市)		
	40	古場	(〃)		
	41	滝川内	(〃)		
	42	山倉(農免道路)	(〃)		
	43	川内野	(〃)		
	44	平山	(〃)		
	45	大野岳(農免道路)	(〃)		
	46	伊万里西部	(〃)		
	47	伊万里・大里団地	(〃)		
	48	柳谷	(西有田町)		
	49	荒川－天川線(林道)	(七山村)		
	50	厳木	(厳木町)		
	51	厳木北部	(〃)		
	52	浦川内	(〃)		
	53	大野	(相知町)		
	54	尾部田	(〃)		
V 佐賀上場地区	55	後川内	(唐津市)	㉘ 唐ノ川高峰遺跡	(唐津市)
	56	唐ノ川	(〃)	㉙ 唐ノ川境遺跡	(〃)
	57	中里	(〃)	㉚ 米島通之陣跡	(呼子町)
	58	早田	(鎮西町)	㉛ 牟形遺跡群	(玄海町)
	59	早ケ田	(〃)		
	60	牟形	(玄海町)		
	61	鶴牧・八寺路・万賀里川	(肥前町)		
	62	新木場	(〃)		
	63	入野	(〃)		
	64	赤坂	(〃)		
筑後川下流用水	65	北茂安西部	(北茂安町)		
	66	鶴	(神埼町)		

表1　農業基盤整備事業施工予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和63年度実施）

地区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査対象面積	調査結果	担当	備考
佐賀東部地区	鳥栖市	鳥栖北部（山浦新町）	鳥栖市山浦町字新町	8.2（ha）	古墳時代及び中世の集落跡・墳墓群、縄文～近世の遺物包含層	石橋	山浦新町遺跡
	〃	鳥栖北部（原古賀）	鳥栖市原古賀町字二本松	6.4	弥生～中世の遺物包含層	石橋	
	〃	鳥栖西部（立石吉原）	鳥栖市立石町字吉原	4.3	古墳16基及び古墳時代の遺物包含層	石橋	山田遺跡
	〃	鳥栖西部（立石柳ノ元）	鳥栖市立石町字柳ノ元	7.0	奈良・平安時代の集落跡	石橋	
	基山町	園部（金丸・本竿）	三養基郡基山町大字園部字金丸、字本竿	6.4	遺跡は確認されなかった	山田	
	〃	園部（鈴町）	三養基郡基山町大字園部字鈴町	5.5	弥生～中世の集落跡	山田・田中	鈴町遺跡
	中原町	中原北部	三養基郡中原町大字原古賀字拾徳外	31.0	弥生～平安時代の集落跡	太田	
	北茂安町	北茂安東部	三養基郡北茂安町大字江口字一本黒木外	27.0	遺跡は確認されなかった	中尾	
	〃	北茂安中部	三養基郡北茂安町大字東尾字一本杉外	60.0	遺跡は確認されなかった	中尾	
	〃	北茂安西部	三養基郡北茂安町大字中津隈字一本黒木	28.4	奈良・平安時代の集落跡	中尾	
	上峰村	上峰北部	三養基郡上峰村大字堤字八藤外	15.5	弥生～奈良時代の集落跡	鶴田・原田	
	三根町	三根西一期	三養基郡三根町大字西島	50.0	遺跡は確認されなかった	東中川	
	〃	大善寺北部	三養基郡三根町大字坂口	41.0	遺跡は確認されなかった	藤口	
	三瀬村	小竹	神埼郡三瀬村大字藤原字小竹	1.9	遺跡は確認されなかった	徳永	
	神埼町	神埼（祇園原）	神埼郡神埼町大字尾崎	13.7	古墳時代～中世の集落跡	八尋	
	〃	神埼（姉川）	神埼郡神埼町大字姉川字二本松、三本松、五本松外	56.5	中世・近世の集落跡	緒方	姉川十三本松遺跡、姉川十二本松遺跡
	〃	神埼（茜）	神埼郡神埼町大字鶴、大字城原	41.9	古墳時代の集落跡	八尋	
	〃	志波屋（農免道路）	神埼郡神埼町大字志波屋字三谷	0.2	遺跡は確認されなかった	八尋	
	千代田町	千代田（迎島）	神埼郡千代田町大字迎島	55.0	遺跡は確認されなかった	堤	
佐賀西部地区	佐賀市	城西第1・第2	佐賀市西与賀町大字高太郎、本庄町大字本庄、大字末次	58.0	遺跡は確認されなかった	木島	
	〃	北川副	佐賀市北川副町大字光法字山津、字阿高	35.2	弥生及び中世の集落跡	木島	阿高遺跡
	〃	巨勢	佐賀市巨勢町大字高尾字高尾小路外	42.0	弥生時代の遺物包含層	福田	
	〃	久保泉西部	佐賀市久保泉町大字上和泉字村徳永、字古村	31.0	弥生～中世の集落跡	福田	村徳永遺跡、古村遺跡
	〃	久保泉東部	佐賀市久保泉町大字上和泉字新村、大字下和泉字永屋	60.0	弥生～近世の集落跡	福田	南宿遺跡、本村遺跡
	〃	嘉瀬	佐賀市嘉瀬町大字荻野字二本松籠、字二本杉籠	74.4	遺跡は確認されなかった	藤口・東中川・福田	
	〃	兵庫南部	佐賀市兵庫町大字瓦町字牟田寄	15.0	弥生～中世の集落跡、弥生時代の貝塚	福田・木島	牟田寄遺跡、牟田寄貝塚
	多久市	四下	多久市北多久町大字多久原字四下	4.0	弥生～近世の遺物包含層（集落跡の可能性あり）	平嶋	四下大丹遺跡
	〃	多久東部（大工田）	多久市北多久町大字多久原字大工田	5.4	弥生時代の遺物包含層	平嶋	大工田遺跡
	〃	多久東部（西ノ谷）	多久市南多久町大字下多久字西ノ谷	10.6	遺跡は確認されなかった	平嶋	
	〃	多久東部（四半田）	多久市東多久町大字別府字四反田	2.0	中世の遺物包含層	平嶋	
	川副町	川副北部	佐賀郡川副町大字福富	38.9	遺跡は確認されなかった	天本	
	〃	川副中部	佐賀郡川副町大字西古賀	45.0	中世・近世の集落跡	天本	鯖江南遺跡
佐賀南部地区	武雄市	橘	武雄市橘町大字永島字上野外	22.0	遺跡は確認されなかった	原田	
	〃	本部	武雄市若木町大字本部字山中	15.5	遺跡は確認されなかった	坂井	
	〃	川登	武雄市東川登町大字永野字天神裏木、馬場外	30.0	中世の集落跡	坂井	南永野遺跡、天神裏遺跡
	鹿島市	鹿島西部（中尾）	鹿島市大字古枝字中尾、門守	8.5	遺跡は確認されなかった	加田	
	〃	鹿島西部（筒口）	鹿島市大字山浦字筒口	7.8	中世の集落跡	加田	飯田遺跡、不動遺跡、立馬場遺跡
	〃	鹿島西部（久保山）	鹿島市大字古枝字久保山	12.0	遺跡は確認されなかった	加田	
	〃	鹿島西部（上古枝）	鹿島市大字古枝字上古枝	10.0	遺跡は確認されなかった	加田	

地区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査対象面積	調査結果	担当	備考
佐賀南部地区	鹿島市	鹿島西部(東三川内)	鹿島市大字三河内字東三河内	8.7 (ha)	遺跡は確認されなかった	東中川	
	〃	鹿島西部(水梨)	鹿島市大字山浦字水梨	3.0	遺跡は確認されなかった	東中川	
	〃	中村	鹿島市中村字横沢、字本町	30.0	近世の宅地（造成地?）跡	加田	横造城跡、本町遺跡
	北方町	橋下	杵島郡北方町大字芦原字一本松、字三本松	24.4	弥生・古墳時代の遺物包含層	森田	久治浦遺跡
	白石町	白石西1－3	杵島郡白石町大字大渡字喜佐木	58.0	時期不明の土壙	渡部	
	〃	白石西3－1	杵島郡白石町大字多田、大字江越	30.0	近世の集落跡	渡部	多田遺跡
	〃	白石西4－2	杵島郡白石町大字湯崎字湯崎	3.5	遺跡は確認されなかった	渡部	
	〃	白石西4－2	杵島郡白石町大字湯崎字久治	0.3	遺跡は確認されなかった	渡部	
	〃	白石西4－3	杵島郡白石町大字堤字船野、嘉瀬川	20.0	古墳～中世の遺物包含層	渡部	
	太良町	片峰	藤津郡太良町大字太良字片峰	6.1	遺跡は確認されなかった	徳永	
佐賀北部地区	伊万里市	立岩	伊万里市山代町立岩	6.6	中世の集落跡及び縄文時代の遺物包含層	盛	
	〃	古場	伊万里市東山代町古場	3.0	遺跡は確認されなかった	盛	
	〃	滝川内	伊万里市東山代町滝川内	19.4	遺跡は確認されなかった	盛	
	〃	山倉(農免道路)	伊万里市大川町山口字山倉	4.5	遺跡は確認されなかった	盛	
	〃	川内野	伊万里市東山代町川内野	9.4	中世・近世の集落跡、縄文～近世の遺物包含層	盛	川内野遺跡
	〃	平山	伊万里市脇田町平山	6.1	近世の集落跡	船井	平山遺跡
	〃	大野岳(農免道路)	伊万里市南波多町原屋敷	1.0	遺跡は確認されなかった	船井	
	〃	伊万里市西部	伊万里市山代町峰	1.3	遺跡は確認されなかった	船井	
	〃	伊万里(大里団地)	伊万里市二里町大字大里字西尾	8.6	遺跡は確認されなかった	船井	
	西有田町	柳谷	西松浦郡西有田町大字山谷(乙)字柳谷、字谷平	5.5	縄文時代の遺物包含層	徳永	鎌ノ首遺跡
	七山村	荒川－天川線(林道)	東松浦郡七山村大字荒川字細川	0.1	遺跡は確認されなかった	東中川	
	厳木町	厳木	東松浦郡厳木町厳木	12.0	遺跡は確認されなかった	東中川	
	〃	厳木北部	東松浦郡厳木町浪瀬	3.7	遺跡は確認されなかった	東中川	
	〃	浦川内	東松浦郡厳木町浦河内	1.0	弥生時代の遺物包含層	東中川	河内遺跡
	相知町	大野	東松浦郡相知町大野	17.2	弥生及び中世の遺物包含層	東中川	大野遺跡
	〃	尾部田	東松浦郡相知町大字平山上字尾部田	6.4	遺跡は確認されなかった	東中川	
佐賀上場地区	唐津市	後川内	唐津市大字後川内	0.6	遺跡は確認されなかった	徳永・山口	
	〃	唐ノ内	唐津市大字唐ノ川字殿切	0.2	遺跡は確認されなかった	徳永・山口	
	〃	唐ノ内	唐津市大字唐ノ川字鏡	0.6	旧石器・縄文時代の遺物包含層（集落跡の可能性あり）	徳永・山口	唐ノ川境遺跡
	〃	中里	唐津市湊町中里	9.3	遺跡は確認されなかった	中島	
	鎮西町	早田	東松浦郡鎮西町大字打上字渕頭外	3.5	遺跡は確認されなかった	明瀬	
	〃	旱ケ田	東松浦郡鎮西町大字石室字旱ケ田	0.3	縄文時代の遺物包含層	明瀬	旱ケ田遺跡
	玄海町	牟形	東松浦郡玄海町大字牟形字稗田	12.0	旧石器・縄文時代の遺物包含層	東中川・徳永	牟形遺跡群
	肥前町	鶴牧・八斗苅・万賀里川	東松浦郡肥前町大字鶴牧、大字新木場、大字万賀里川	0.3	遺跡は確認されなかった	東中川・徳永・前田	
	〃	新木場	東松浦郡肥前町大字新木場字東、字放四郎川	5.0	旧石器・縄文時代の遺物包含層	東中川・徳永・前田	新木場東遺跡
	〃	入野	東松浦郡肥前町大字入野字殿木場、字尾山、字田の峰	5.0	旧石器・縄文時代の遺物包含層	東中川・徳永・前田	殿木場遺跡
	〃	赤坂	東松浦郡肥前町大字赤坂	0.1	遺跡は確認されなかった	徳永・山口	
筑後川下流水用	北茂安町	北茂安西部	三養基郡北茂安町大字中津隈	1.4	遺跡は確認されなかった	徳永	
	神埼町	鶴	神埼郡神埼町大字鶴	0.3	遺跡は確認されなかった	徳永	

表2　農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査一覧表（昭和63年度実施）

地区	市町村名	遺跡名	遺跡の所在地	調査面積	調査主体者	調査担当者	遺跡の内容	略号
佐賀東部地区	基山町	東福寺遺跡	三養基郡基山町大字園部字東福寺	450㎡	基山町教委	山田	古墳～平安時代の集落跡	TOF
	中原町	原古賀三本谷遺跡	三養基郡中原町大字原古賀字三本谷	8,500	中原町教委	太田	弥生～古墳時代の集落跡	HSD
	〃	原古賀四本谷遺跡	三養基郡中原町大字原古賀字四本谷	350	中原町教委	前田	弥生時代の集落跡	HYD
	〃	原古賀五本谷遺跡	三養基郡中原町大字原古賀字五本谷	5,600	中原町教委	前田・太田	弥生～奈良時代の集落跡、弥生時代の墳墓	HGD
	北茂安町	中野城跡	三養基郡北茂安町大字江口字中野	600	北茂安町教委	中尾	中世の城跡	NKN
	上峰村	船石遺跡	三養基郡上峰村大字堤字二本谷	5,000	上峰村教委	原田	縄文後期・弥生時代の集落跡	FNI
	三根町	西島二本杉遺跡	三養基郡三根町大字西島字二本杉	600	三根町教委	前田	中世の集落跡、近世の墓地	NJN
	東脊振村	大曲二ノ坪遺跡	神埼郡東脊振村大字大曲字二ノ坪	800	東脊振村教委	久保	中世・近世の生産遺跡（水田遺構等）	OMN
	〃	大曲鶴ノ森遺跡	神埼郡東脊振村大字大曲字鶴ノ森	2,400	東脊振村教委	久保	中世・近世の生産遺跡（水田遺構等）	OMT
	三田川町	田手一本杉遺跡	神埼郡三田川町大字田手字一本杉	600	三田川町教委	草野	弥生～近世の遺物包含層	TDS
	〃	田手二本杉遺跡	神埼郡三田川町大字田手字二本杉	1,800	三田川町教委	草野	古墳～鎌倉時代の集落跡	TNS
	神埼町	志波屋一ノ坪遺跡	神埼郡神埼町大字志波屋	3,000	神埼町教委	八尋・寺田	弥生～平安時代の集落跡、墳墓	SIT
	〃	上志波屋七ノ坪遺跡	神埼郡神埼町大字上志波屋	11,000	神埼町教委	八尋・寺田	縄文～近世の集落跡	KSN
	〃	横武城跡	神埼郡神埼町大字横武	10,000	神埼町教委	緒方	中世の城館跡及び条里制関連遺構	YTJ
	千代田町	下西八本松遺跡	神埼郡千代田町大字下西字八本松	2,000	千代田町教委	堤	中世・近世の遺物包含層	SHM
佐賀西部地区	佐賀市	村徳永遺跡	佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永	2,300	佐賀市教委	福田・木島	平安・中世の集落跡	MTN
	〃	立野遺跡	佐賀市久保泉町大字下和泉字六反田	4,500	佐賀市教委	木島	弥生～中世の集落跡	TAT
	大和町	於保三本松遺跡	佐賀郡大和町大字池上字上於保	3,850	大和町教委	田中	古墳～平安時代の集落跡	OSM
	〃	本村籠遺跡	佐賀郡大和町大字池上字本村籠	1,250	大和町教委	田中	弥生～中世の集落跡、墳墓群	HSG
	諸富町	三重本村遺跡	佐賀郡諸富町大字大堂字三重	900	諸富町教委	種浦	奈良～近世の集落跡	MHM
	〃	三重樔ノ木遺跡	佐賀郡諸富町大字為重字三重	3,400	諸富町教委	種浦	弥生～中世の集落跡	MUK
	〃	石塚古墳群2号墳	佐賀郡諸富町大字為重字石塚	800	諸富町教委	種浦	古墳	ISZ－2
	小城町	寺浦廃寺	小城郡小城町大字晴気字寺浦	500	小城町教委	古庄	奈良時代の寺院跡	TRU
佐賀南部地区	武雄市	市場遺跡	武雄市橘町大字永島	5,250	武雄市教委	原田・坂井	古墳～近世の集落跡	ICB
	〃	井手橋遺跡	武雄市橘町大字大日	750	武雄市教委	原田・坂井	中世・近世の集落跡	IDB
	鹿島市	吹野遺跡	鹿島市大字三河内字吹野	1,150	鹿島市教委	加田	縄文晩期の集落跡	FKN
	白石町	湯崎東遺跡	杵島郡白石町大字湯崎字湯崎	2,100	白石町教委	渡部	弥生～奈良時代の集落跡	YSH
	〃	久治遺跡	杵島郡白石町大字湯崎字久治	4,500	白石町教委	渡部	古墳・奈良時代の集落跡	KUJ
	〃	多田遺跡	杵島郡白石町大字今泉字多田	600	白石町教委	渡部	古墳・奈良時代の集落跡	TAD
佐賀上場地区	唐津市	唐ノ川高峰遺跡	唐津市唐ノ川字高峰	3,500	唐津市教委	田島	縄文晩期の集落跡	TOT
	〃	唐ノ川境遺跡	唐津市唐ノ川字境	1,000	唐津市教委	田島	縄文時代の遺物包含層	TOS
	呼子町	来島通之陣跡	東松浦郡呼子町大字殿ノ浦字ワタリ	1,000	呼子町教委	中園	文禄・慶長の役に係る陣跡、縄文時代の集落跡	KMJ
	玄海町	牟形遺跡群	東松浦郡玄海町大字牟形字稗田・牧ノ地	6,100	玄海町教委	有光	旧石器・縄文時代の集落跡	MKC,HID

Ⅱ．調査組織

1．調査主体

佐賀県教育委員会　（事務局；文化課）

2．総　　括

事務局長；武藤佐久二（県文化課長）

〃 次長；高島忠平　（県文化課参事）・大坪英樹（県文化課長補佐）

3．庶　　務

稲富安徳（県文化課庶務係長）　　鶴田明美（県文化課庶務係）

直塚清純（県文化課庶務係）　　本山恵悟（県文化課庶務係）

4．調　　査

調査主任；藤口健二（県文化課文化財調査第２係長）

調 査 員；天本洋一・東中川忠美・森田孝志・山口久範・徳永貞紹・前田達男・中園成生

（以上、県文化課文化財調査第２係）

福田　義彦（佐賀市教育委員会）	木島　慎治（佐賀市教育委員会）
田島　龍太（唐津市教育委員会）	石橋　新次（鳥栖市教育委員会）
平嶋　文博（多久市教育委員会）	盛　　峰雄（伊万里市教育委員会）
船井　向洋（伊万里市教育委員会）	原田　保則（武雄市教育委員会）
坂井　義哉（武雄市教育委員会）	加田　隆志（鹿島市教育委員会）
八尋　　実（神埼町教育委員会）	緒方祐次郎（神埼町教育委員会）
堤　　安信（千代田町教育委員会）	山田　　正（基山町教育委員会）
田中　正弘（基山町教育委員会）	太田　　睦（中原町教育委員会）
中尾　修二（北茂安町教育委員会）	原田　大介（上峰村教育委員会）
明瀬　慎吾（鎮西町教育委員会）	渡部　俊哉（白石町教育委員会）

5．調査協力

佐賀市教育委員会	唐津市教育委員会	鳥栖市教育委員会
多久市教育委員会	伊万里市教育委員会	武雄市教育委員会
鹿島市教育委員会	川副町教育委員会	神埼町教育委員会
千代田町教育委員会	三瀬村教育委員会	基山町教育委員会
中原町教育委員会	北茂安町教育委員会	三根町教育委員会
上峰村教育委員会	七山村教育委員会	厳木町教育委員会
相知町教育委員会	肥前町教育委員会	玄海町教育委員会
鎮西町教育委員会	西有田町教育委員会	北方町教育委員会
白石町教育委員会	太良町教育委員会	

九州農政局上場農業水利事業所

水資源開発公団筑後川下流用水建設所

佐賀県農林部（土地改良課・農地整備課・建設鉱害課・農業振興課）

佐賀中部農林事務所	唐津農林事務所	鳥栖農林事務所
伊万里農林事務所	武雄農林事務所	鹿島農林事務所
各市町村土地改良担当課	各市町村土地改良区	地元各位

Ⅲ．昭和63年度文化財確認調査の内容

1．　佐賀東部地区の調査

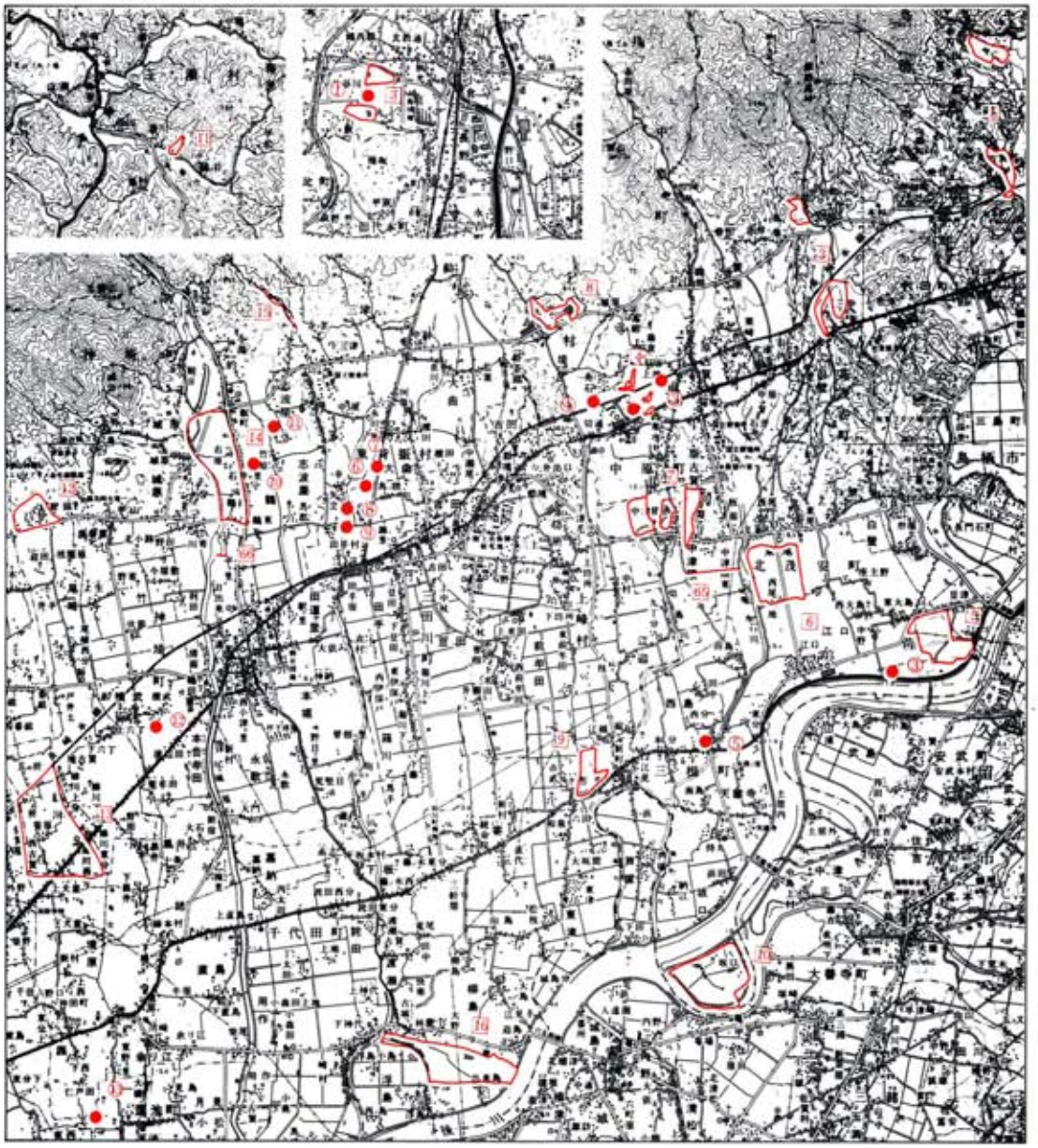


図２　佐賀東部地区周辺地形図（１：100,000）

1 鳥栖北部（鳥栖市）	12 祇園原（神埼町）	④船石遺跡
2 鳥栖西部（鳥栖市）	13 姉川（神埼町）	⑤西島二本杉遺跡
3 園部（基山町）	14 酒（神埼町）	⑥大曲二ノ坪遺跡
4 中原北部（中原町）	15 志波屋（神埼町）	⑦大曲鶴ノ森遺跡
5 北茂安東部（北茂安町）	16 迎島（千代田町）	⑧田手一本杉遺跡
6 北茂安中部（北茂安町）	65 北茂安西部（北茂安町）	⑨田手二本杉遺跡
7 北茂安西部（北茂安町）	66 鶴（神埼町）	⑩志波屋一ノ坪遺跡
8 上峰北部（上峰村）	①東福寺遺跡	⑪上志波屋七ノ坪遺跡
9 三根西一期（三根町）	②原古賀遺跡群	⑫横武城跡
10 大善寺北部（三根町）	③中野城跡	⑬下西八本松遺跡
11 小竹（三瀬村）		

(1) 鳥栖市（鳥栖北部地区　図3、鳥栖西部地区　図4・図5）

鳥栖北部地区に関しては山浦新町地区（鳥栖市山浦町字新町：確認調査対象面積8.2ha）、及び原古賀地区（鳥栖市原古賀町字二本松：確認調査対象面積6.4ha）の2箇所について確認調査を実施した。

山浦新町地区はその対象地のほとんどが安良川の西岸にそって南北に舌状を呈しながら延びる標高70m程の台地上にあたり、現況は水田である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である山浦新町遺跡（古墳時代～中世の集落跡）にあたり、東側に隣接して牛原前田遺跡（縄文時代～中世の集落跡）、北側には割石古墳群、西側には葛籠城跡（中世城館跡）などが点在している。また調査予定地区の南方、山浦団地周辺には、佐賀県住宅供給公社の住宅建設に関連して調査された山浦古墳群が所在している（木下之治他　1973　『鳥栖市山浦古墳群』　佐賀県文化財調査報告書第21集 佐賀県教育委員会）。

調査は36箇所の試掘溝（トレンチ）を設定して行った。その結果、8箇所の試掘溝で黄褐色ローム層を掘削して設けられた柱穴を発見したほか、2箇所で埋没した古墳の残骸、5箇所で土壙を検出し、4箇所からサヌカイト、黒曜石片等の石器の原材、縄文土器片、中世陶磁器片等の遺物を確認した。これにより古墳時代、及び中世の集落跡、墳墓群、そして縄文時代から近世に至るまでの遺物包含層の所在が想定される。

個別協議を行った結果、工法上の変更が困難なため、遺跡を確認した6,000㎡について全面調査を実施することとなった。

原古賀地区は山浦新町地区から約1.5km南の、南北方向に細長く延びる丘陵に挟まれている部分（朝日山の北側一帯）が調査対象地区（標高34m）であり、現況は狭隘な水田である。

22箇所の試掘溝調査の結果、1箇所から時期・性格とも不明の土壙、柱穴を検出したのみで、遺物に関しても弥生土器片、土師器片を含む包含層（褐色土層・暗褐色土層）を4箇所の試掘溝で確認したに止まった。包含層の下層は河川の氾濫に因る再堆積層と思われる砂礫層であり、この地区での遺構の残存は考えにくい。

鳥栖西部地区に関しては立石吉原地区及び立石柳ノ元地区（鳥栖市立石町字吉原、字柳ノ元：確認調査対象面積11.3ha）について調査を行った。立石吉原地区は石谷山（標高754m）から南下する山麓が低地へ移行する一帯の、九州横断自動車道に南接する部分（標高約70m）の4.3ha、立石柳ノ元地区では鳥栖市の西部に独立丘陵を形成する所熊山の西側から、国営宝満導水路の東側に接して南北に延びる低地部分（標高約40m）の7haがそれぞれ調査対象地区となった。

立石吉原地区については、その大部分が水田と竹林で占められており、山田遺跡の分布範囲に含まれる。周辺一帯には古墳時代を中心に多くの埋蔵文化財が点在しており、立石遺跡、立石古墳群、立石開拓古墳群として周知化されている。

図3　鳥栖市・鳥栖北部地区（山浦新町地区）試掘溝設定図

試掘溝を12箇所に設定して行った確認調査の結果、３箇所から古墳の石室、及び残欠を検出した。また土師器片、須恵器片等の包含層の存在も併せて確認できたことから、古墳時代の集落跡と墳墓群の両方の存在が想定される。

当該地区は平成２年度に工事実施予定だが、踏査結果も加えると全体で少なくとも16基の古墳の存在が推定されるため、保存工法に関する協議が別途必要である。

立石柳ノ元地区の現況は水田であり、周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれないが、近接している所熊山の北斜面に野副遺跡（縄文時代・弥生時代の遺物散布地）が立地する。この地区では従来遺跡の存在は余り知られていなかったが、22箇所の試掘溝調査の結果、２箇所から奈良時代の住居跡を検出し、６箇所で同時代のものと思われる柱穴、溝跡を確認した。また奈良・平安時代の土師器片、須恵器片の包含層（黄褐色土層）の存在も認められた。

個別協議の結果、発掘調査必要面積10,000㎡のうち、4,000㎡については工法の変更により盛土保存が可能となったが、残りの6,000㎡に関しては発掘調査を実施することに決定した。

(2) **基山町（園部地区Ｉ工区　図６）**

園部地区Ｉ工区のうち、調査対象地区となったのは金丸・本竿地区（三養基郡基山町大字園部字金丸、字本竿：確認調査対象面積6.4ha）と、鈴町地区（基山町大字園部字鈴町：確認調査対象面積5.5ha）の合計11.9haである。

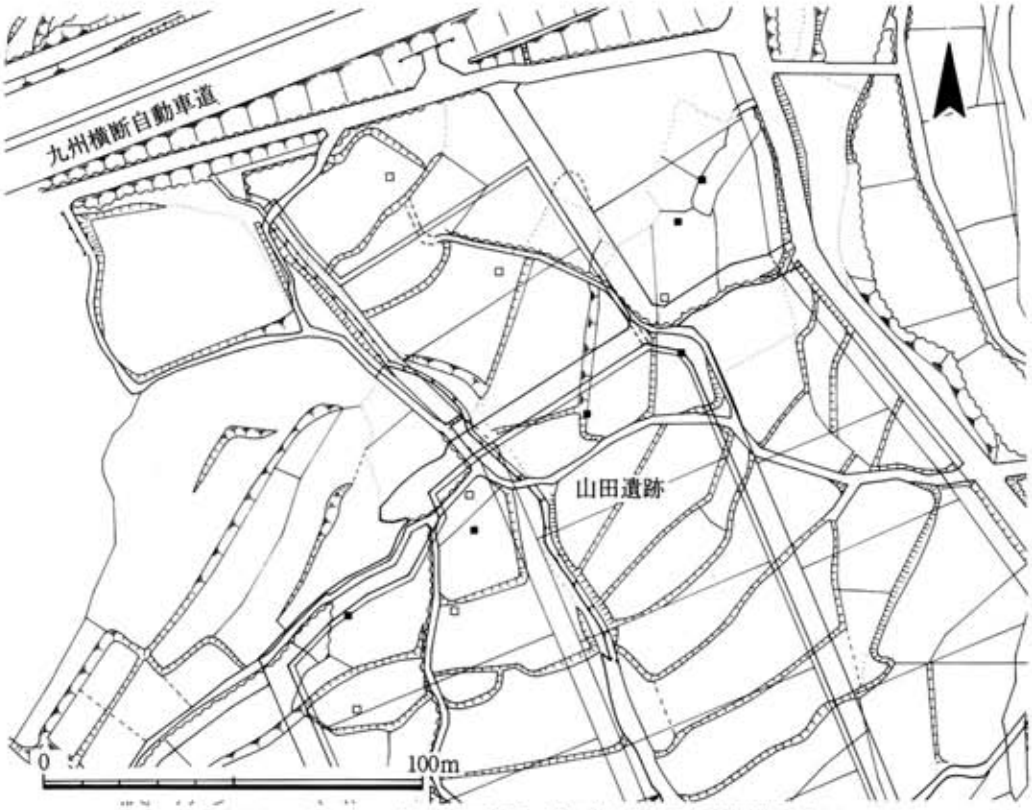


図4　鳥栖市・鳥栖西部地区（立石吉原地区）試掘溝設定図

図５　鳥栖市・鳥栖西部地区（立石柳ノ元地区）試掘溝設定図

金丸・本竿地区は通称園部谷より東へ流れる山下川の南側に接して広がる平坦地（標高38～39m）であり、現況は水田となっている。調査対象地区の南側の丘陵には三ケ敷遺跡（弥生時代・古墳時代の集落跡、墳墓群）、金丸遺跡（弥生時代の集落跡）、金丸古墳群、北西側には立花遺跡（縄文時代の遺物散布地、奈良・平安時代の集落跡）、東福寺遺跡（古墳時代～平安時代の集落跡）等が点在する。

13箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

鈴町地区は園部谷より秋光川、山下川に沿って東側に開けた平野部のほぼ中央部（標高34～38m）に位置し、現況は水田である。

当該地の南西側には弥生時代・古墳時代の墳墓群である中隈山遺跡が、そして北東側には弥生時代から奈良・平安時代に至る集落跡である玉の井遺跡（山田正　1984　『玉の井Ｂ遺跡』基山町文化財調査報告書第５集　基山町教育委員会）が近接し、更に北西方向には国庫補助事業として遺跡群詳細分布調査が実施され、12基の古墳の存在が確認された黒谷古墳群・水呑古墳群（山田正　1986　『黒谷・水呑古墳群』　基山町文化財調査報告書第８集　基山町教育委員会）が立地しているなど、遺跡の密度の高い地域であるため、調査前から遺跡の存在が想定されていた。

確認調査の結果、50箇所の試掘溝のうち12箇所から地山土（黄褐色粘質土層）を掘削して設けられた住居跡、土壙、溝跡、柱穴等の遺構を検出し、石鏃、弥生時代中期の土器片、古墳時代の土師器片、須恵器片等の遺物も併せて確認した。この地区に弥生時代から中世に至る集落跡が存在することが明らかとなったので、“鈴町遺跡”として周知化を行った。

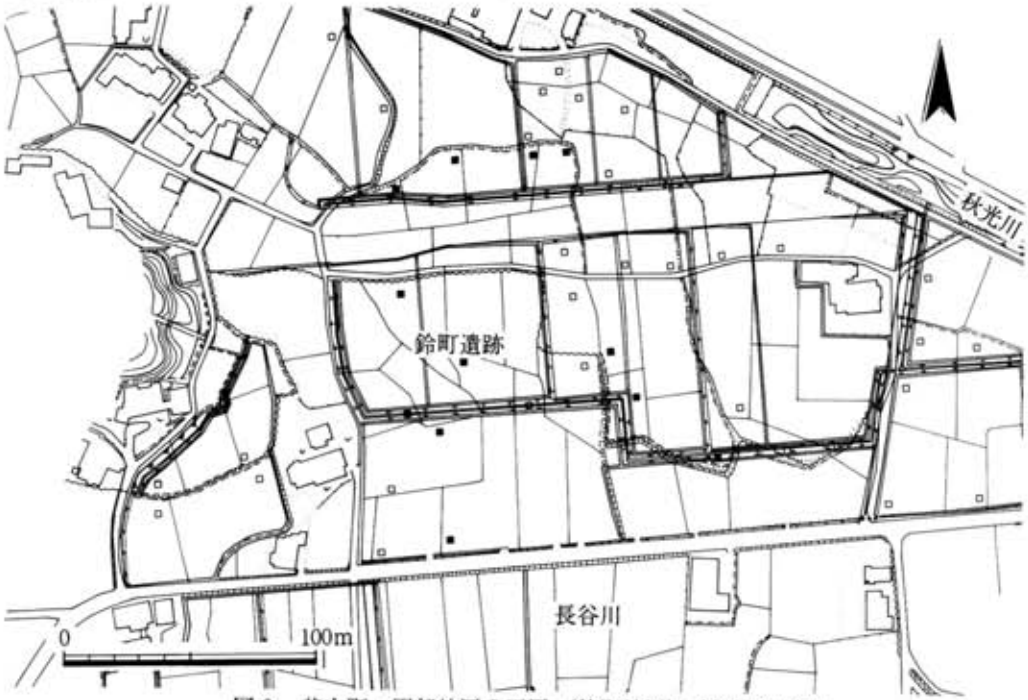


図６　基山町・園部地区Ｉ工区（鈴町地区）試掘溝設定図

個別協議の結果、当該地における土地改良総合整備事業そのものを先送りとし、その間に本調査必要面積を設計変更によって14,000㎡から10,000㎡まで絞り込み、同時に調査体制の整備を図ることとなった。

(3) **中原町　（中原北部地区　図７・図８）**

中原町市街地の北側から西側に接する形で展開する平野部のうち、県道・佐賀～川久保～鳥栖線から国道34号線に至る辺りまでが、今回の中原北部地区の事業実施予定範囲（三養基郡中原町大字原古賀字拾徳、字岩崎、字八本谷外：確認調査対象面積31.1ha）である。調査地区は寒水川によって形成された氾濫原（標高18～40m）にあたり、岩崎遺跡（縄文時代～中世の集落跡）、原古賀遺跡群（弥生時代の集落跡）、拾徳遺跡（縄文時代～中世の集落跡）、どんどん落遺跡（弥生時代の墳墓群）等が隣接している。

確認調査は全体で386箇所の試掘溝を設定して実施したが、この内24箇所で弥生時代のものと思われる住居跡、土壙、柱穴等の存在を確認し、３箇所で弥生時代から中世に至るまでの各時代の遺物が混在する包含層を検出した。遺跡の性格は弥生時代から奈良・平安時代まで続く集落跡と思われ、その広がりは同地区において昨年の確認調査で検出した45,000㎡を更に上回る52,000㎡程度と推定される。

遺跡の保護と事業との調整に関して個別協議を実施した結果、事業の先送り、及び田面高の計画変更という農林側の努力により、次年度本調査分の面積を3,800㎡まで絞り込むことができた。

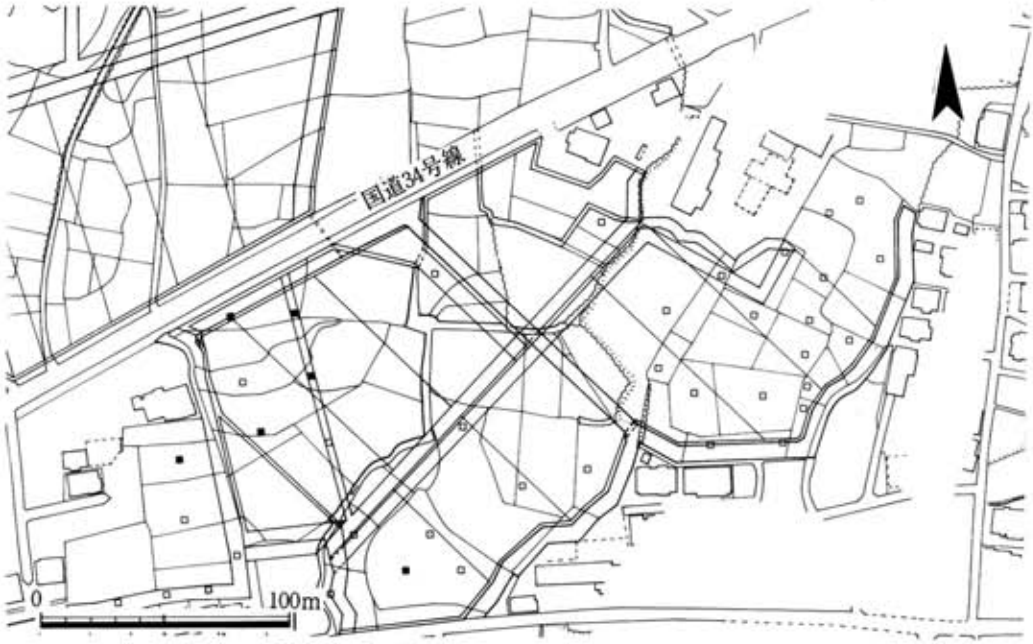


図７　　中原町・中原北部地区試掘溝設定図(1)

図8　中原町・中原北部地区試掘溝設定図(2)

(4) 北茂安町（北茂安東部工区、北茂安中部工区、北茂安西部工区　図９）

北茂安東部工区（三養基郡北茂安町大字江口字一本黒木、字二本黒木外：確認調査対象面積27.0ha）は筑後川の北側に隣接する低地一帯で、国道264号線と中野、東大島、豆津、小路の各集落に囲まれた範囲（標高４～５ｍ）が今回の確認調査の対象地区であり、現況は水田である。

当該地については従来遺跡の存在は確認されていないが、近接している集落には中野城跡、豆津遺跡、小路遺跡等の中世の集落跡が点在している。

水路予定地を中心に21箇所の試掘溝を設定して確認調査を行ったが、遺構の存在を確認することはできなかった。遺物については時期不明の土器片数点を検出したが、いずれも摩滅が著しいことから流れ込みによる再堆積と思われる。

北茂安中部工区（北茂安町大字東尾字一本杉、字二本松、字三本杉：確認調査対象面積60.0ha）は、東側を道瀬川、西側を寒水川によってそれぞれ区画されている平野の、北側は主要地方道・小城～北茂安線、南側は市原～中津隈線に至る低平な地域（標高３～５ｍ）であり、現在は水田として利用されている。

当該地についても東部工区と同じく周知外だが、周辺には小原遺跡、東尾遺跡、西尾遺跡といった弥生時代から古墳時代にかけての集落跡、墳墓群が点在する。

確認調査は水路掘削の予定地部分を中心に64箇所の試掘溝を設定しておこなったが、遺構は確認できず、遺物についても時期不明の土器片数点を検出したのみである。

北茂安西部工区（北茂安町大字中津隈字一本黒木、字原西、字宝満谷外：確認調査対象面積24.4ha）は、中原町との町境から中津隈、干飯の集落に至るまでの、切通川によって造成されている低位段丘上の平地（標高７～11m）であり、そのほとんどが水田として利用されている。

確認調査予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡、三浦遺跡、更に宅地造成に関係して調査が実施されている宝満谷遺跡（東中川忠美　1980　『宝満谷遺跡』　北茂安町教育委員会）の範囲であり、いずれも弥生時代から奈良・平安時代に至る集落跡、及び墳墓群として知られている。また周辺の微高地上にも同様の性格を有する板部遺跡、そして農業基盤整備事業関連で調査例がある干飯遺跡（天本洋一　1988　『中津隈干飯遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第３集　北茂安町教育委員会）が立地しており、広い範囲で遺跡の密集が見られる地域である。

確認調査は面工事で掘削を受ける部分と水路予定地を中心に103箇所の試掘溝を設定して行った。その結果８箇所で奈良・平安時代の住居跡、土壙、柱穴等を確認し、７箇所で弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺物包含層を検出した。

個別協議により、遺跡の存在を確認した7,800㎡の内、水路部分等4,000㎡については本調査を行い、残りの3,800㎡については田面高の嵩上げ等によって保護されることになった。

図9　北茂安町・北茂安西部工区試掘溝設定図

(5) 上峰村　(上峰北部A～E地区)

上峰北部についてはその施工予定地区が広域にわたるため、AからEまでの5地区に分けて調査を行った。なお調査対象面積は合計15.5haである。

A地区（三養基郡上峰村大字堤字三本松外）は屋形原の集落の南側に広がる水田部分が佐賀東部中核工業団地に至るまでの小丘陵上（標高21～27m）に位置する。

この地区の北側には宅地造成に関連して調査が実施され、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡、墳墓群が集中的に検出された屋形原遺跡（杠一義　1979　『屋形原遺跡』　上峰村文化財調査報告書第2集　上峰村教育委員会）が隣接し、西側の二塚山丘陵上にも二塚山遺跡（七田忠昭他　1979　『二塚山遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会）をはじめとして堤遺跡、松葉遺跡等の弥生時代から古墳時代にかけての集落跡、墳墓群が密集している。

確認調査の結果、10箇所の試掘溝のうちの2箇所から弥生時代の住居跡、1箇所から柱穴をそれぞれ確認した。また遺物についても弥生土器片が出土しており、弥生時代の集落跡の存在が窺える。周囲の状況から判断すると、屋形原遺跡の範囲が拡大し、この地にまで及ぶものと考えられる。

遺跡の存在が確認された7,500㎡の取り扱いについては、農業基盤整備事業そのものが先送りとなったため、事業計画が具体化した時点で工事方法の問題も含め再協議を実施することになった。

B地区（上峰村大字堤字八藤、字迎原）は切通川とその支流、及び大谷川に挟まれた南北に延びる八藤丘陵上の平坦部（標高18～26m）である。

当該地区は八藤遺跡（弥生時代～奈良・平安時代の集落跡、縄文時代の遺物散布地）の分布範囲であり、奈良時代の土墨として著名な堤土墨跡（杠一義他　1978　『堤土墨跡』　上峰村教育委員会）も存在する。

8箇所の試掘溝を設定して確認調査を行った結果、1箇所から住居跡と柱穴、1箇所から弥生土器片、土師器片を含む遺物包含層を検出した。この結果から、B地区についても弥生時代から奈良時代にかけての集落跡の存在が想定される。

遺跡が検出された8,250㎡の取り扱いについて協議を行った結果、4,350㎡を盛土工法によって保存することとし、残りの3,900㎡については本調査を実施することとなった。

C地区（上峰村大字堤字三本柳外）は鎮西山南麓から派生する小尾根が丘陵へと移行するあたりで、九州横断自動車道と県道・佐賀～川久保～鳥栖線に挟まれた地区（標高40～42m）が調査対象範囲である。現況は水田で、尾根の先端部等傾斜の急な所は、かなりの部分が開墾時に切土されているようである。

当該地区には周知の埋蔵文化財包蔵地である堤三本柳遺跡（古墳時代の集落跡）が一部含ま

れており、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である堤五本松遺跡や屋形原遺跡とも隣接している。

掘削予定部分を中心に9箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、1箇所で時期不明の土壙と柱穴を確認したに止まった。また遺物についても縄文土器片と時期が不明の土器片を検出したのみであった。

D地区（上峰村大字堤字谷渡）は鎮西山南麓の谷渡溜池から南に開ける谷水田部分（標高41～49m）にあたり、谷渡古墳群の分布範囲内である。また周辺部は新立古墳群、二本柳古墳群等の古墳時代の墳墓群を中心にした埋蔵文化財の密集地となっている。

確認調査は8箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

E地区（上峰村大字堤字八藤、字迎原）はB地区の東側隣接地で、船石丘陵と八藤丘陵間の谷水田部分（標高18～26m）であり、切通川支流と大谷川によって画されている。

当該地はB地区と同様に周知の埋蔵文化財包蔵地である八藤遺跡にあたり、周辺も含めて、上峰村内でも遺跡の密度の高い地区として知られている。

確認調査は掘削予定部分を中心に7箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出することができなかった。

(6) 三根町　（三根西一期地区、大善寺北部地区）

三根西一期地区（三養基郡三根町大字西島字田中：確認調査対象面積50.0ha）は切通川と寒水川に挟まれた一帯で、両河川、及び地区の東側を北東から南西に流れる筑後川の沖積作用によって形成された低地（標高3～4m）である。現在は水田として利用されている。

調査予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、南側に近接して弥生時代中期の貝塚である本分貝塚（藤口健二他　1981　『本分貝塚』　佐賀県立博物館調査研究書第7集　佐賀県立博物館）や、農業基盤整備事業に関連して調査され、弥生時代から中世に至るまでの集落跡であることが明らかになった本分遺跡（田平徳栄　1987　『本分遺跡』　三根町文化財調査報告書第4集　三根町教育委員会）が立地している。また周辺の集落部にも田中遺跡、西島二本杉遺跡等の中世の集落跡が点在しており、中世以降、沼地帯の中に島状に点在する微高地上に集落が形成されてゆく過程が把握できる。

確認調査は掘削予定地を対象に4箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

大善寺北部地区（三根町大字坂口字開平外：確認調査対象面積41.0ha）は筑後川の蛇行部分が、流路の変化により陸地に取り残された事によって形成されている輪中状の低地（標高3～4m）である。調査対象はこの“中の島”の部分であり、現在は水田として利用されている。

この辺り一帯は従来遺跡の存在が殆ど確認されていない地域であるが、筑後川を挟んで西側には弥生時代から中世に至るまでの遺物散布地や中世の集落跡等が点在しており、その内の数

地点について、これまで農業基盤整備事業や河川改修工事に係る発掘調査が実施されている（天本洋一他　1981　『菰ノ江遺跡』　三根町文化財調査報告書第１集　三根町教育委員会、高瀬哲郎他　1983　『直代遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第67集　佐賀県教育委員会）。

水路建設による掘削予定地を対象に、試掘溝を26箇所設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

(7)　**三瀬村　（小竹地区）**

小竹地区（神埼郡三瀬村大字藤原字小竹：確認調査対象面積1.9ha）は嘉瀬川上流部の支流である高瀬川によって開析された狭い谷底平野（標高420～450m）で、現況は水田、及び畑地であり、周辺一帯は傾斜の急な尾根と尾根の間を縫うように、狭隘な谷底平野が複雑に入り込んでいる。

確認調査予定地区は小竹遺跡（縄文時代の遺物散布地）の範囲であり、昭和41～42年の土地区画整理事業で早期押型文土器等の遺物が出土している。また周辺には唐川遺跡、椎ノ木遺跡等の縄文時代の遺物散布地が点在している。

確認調査は削平予定地域を中心に５箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構は確認できず、上方からの流れ込みらしい安山岩と黒曜石の剥片を１点ずつ検出したに止まった。

(8)　**神埼町（神埼工区（祇園原地区　図10、姉川地区　図11、茜地区　図12）、志波屋地区）**

神埼工区・祇園原地区（神埼郡神埼町大字尾崎：確認調査対象面積13.7ha）は、神埼町北西部の城山から南の低地に向かって張り出している舌状の尾根部から派生している谷底平野の、佐賀平野への出口部分にあたり、東の早稲隈山、西の帯隈山に囲まれる微高地上（標高22～35m）に位置する。

計画地内には弥生時代の集落跡である岩田遺跡、岩田萩原遺跡、大藪遺跡が立地し、周辺にも尾根部を中心に帯隈山神籠石、天神尾古墳群、平原須恵器窯跡群等が所在している。

事業実施予定地区全体を対象に128箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、９箇所で古墳時代～近世の土壙、溝跡、柱穴等の存在を確認し、７箇所から同時代の遺物（甕形土器片、土師器杯、土師器小皿片等）包含層を検出した。ただし、調査区全域にわたって河川の氾濫に起因すると思われる砂層の堆積が見られ、遺構の分布密度も粗である。

遺跡を発見した地域については“岩田芦ノ元遺跡”、“岩田横山遺跡”の名称で、また既存の岩田萩原遺跡についてはその分布範囲の拡大として、それぞれ周知化を行った。

個別協議の結果、遺跡の分布面積13,600㎡については基本的に盛土で対応することとし、掘削が避けられない水路予定部分の2,090㎡については本調査を実施することになった。

神埼工区・姉川地区（神埼町大字姉川字二本松、字三本松、字五本松～字十六本松：確認調査対象面積56.5ha）は神埼市街の南西部に展開する低平な沖積平野（標高3.5m）で、現在は東側に隣接する中地江川からの引水で水田経営が行われている。なお計画地区周辺には姉川城

図10　神埼町・神埼工区（祇園原地区）試掘溝設定図

跡、野田城跡等の中世の城館跡が点在している。

水路計画地に200箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したところ、6箇所で柱穴を確認した。また染付磁器片、青磁皿等の遺物も出土していることから、当該地には中世から近世にかけての集落跡が存在することが窺える。

調査により遺跡の存在が確認された地域については"姉川十三本松遺跡"、"姉川十二本松遺跡"として周知化を行った。

遺跡の取り扱いについて個別協議を行った結果、分布面積3,600㎡のうち、2,000㎡について本調査を実施し、1,600㎡については水路の位置の変更によって保存されることになった。

神埼工区・茜地区（神埼町大字鶴、大字城原：確認調査対象面積41.9ha）は、土器山と仁比山の間に、城原川の浸食、沖積作用によって形成されている奥深い谷底平野の開口部分、いわゆる扇頂部（標高9～14m）にあたる。

調査対象地区は城原川の氾濫原に相当するため、従来遺跡の発見は報告されていないが、城原川を挟んだ対岸の城原地区には城原二本谷東遺跡、城原二本谷西遺跡、八子一本黒木遺跡等の、弥生時代から中世に至る集落跡や猿獄古墳群、城山古墳群等の古墳群が密集し、佐賀県内でも最も遺跡の集中度の高い地域の一つとなっている。

工事予定地区全域を対象に173箇所の試掘溝を設定して確認調査を行った結果、4箇所で古墳時代の竪穴住居跡、小穴等を、そして4箇所で古墳時代の土師器片をそれぞれ検出した。これにより、新たに確認された遺跡の広がりを"右原祇園町遺跡"として周知化した。

遺跡の取り扱いについて個別協議を行った結果、遺跡の広がりを確認した2,800㎡の全域が削平部分にあたり、また道路、水路の予定地でもあるため、全体が本調査対象地区となった。そして協議終了後、一部について工事計画の変更が提示され、500㎡が地区を除外されて保存地区となった。

志波屋地区（農免道路：神埼町大字志波屋字三谷：確認調査対象面積0.2ha）は権現山南麓部の舌状台地上（標高35～40m）にあたり、現在は水田、山林、畑地等として利用されている。

調査対象地区は志波屋六本松古墳群の分布範囲に含まれ、国府型ナイフ形石器、翼状剥片等が九州系ナイフ形石器に共伴して検出された船塚遺跡（八尋実　1984　『船塚遺跡』　神埼町文化財調査報告書第10集　神埼町教育委員会）がこれに隣接している、また周囲の丘陵上にも三谷古墳群、野々内遺跡、上志波屋遺跡等の縄文時代から古墳時代に至るまでの墳墓群、遺物の散布地が密集している。

確認調査については道路敷部分を対象に10箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出されなかった。

図11　神埼町・神埼工区（姉川地区）試掘溝設定図

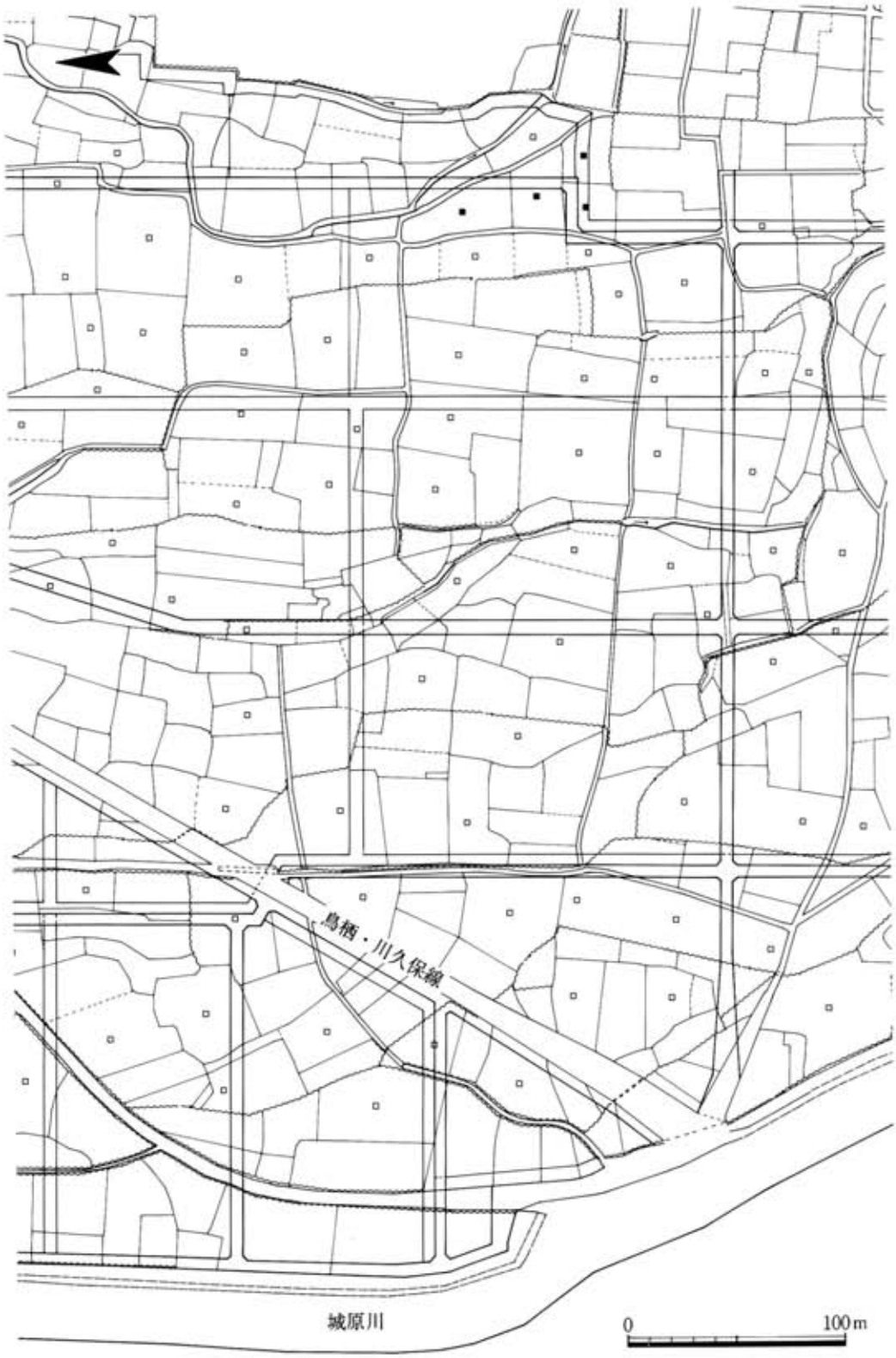


図12　神埼町・神埼工区（酒地区）試掘溝設定図

(9) 千代田町（千代田工区・迎島地区）

千代田工区・迎島地区（神埼郡千代田町大字迎島：確認調査対象面積55ha）は筑後川の沖積作用によって形成された低平な平野（標高2.4m）であり、県道・佐賀～城島線以南の中津江川東岸に展開する部分が確認調査の対象範囲である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周辺の集落部には膳内遺跡、崎村城跡等の中世城館跡、集落跡が点在している。

水路予定地を中心に43箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構及び遺物の存在は確認できなかった。耕作土の下層は暗褐色粘質土で、中世以降に湿地帯や旧河川の流路跡に客土をして水田経営を開始したものと思われる。

2．佐賀西部地区の調査

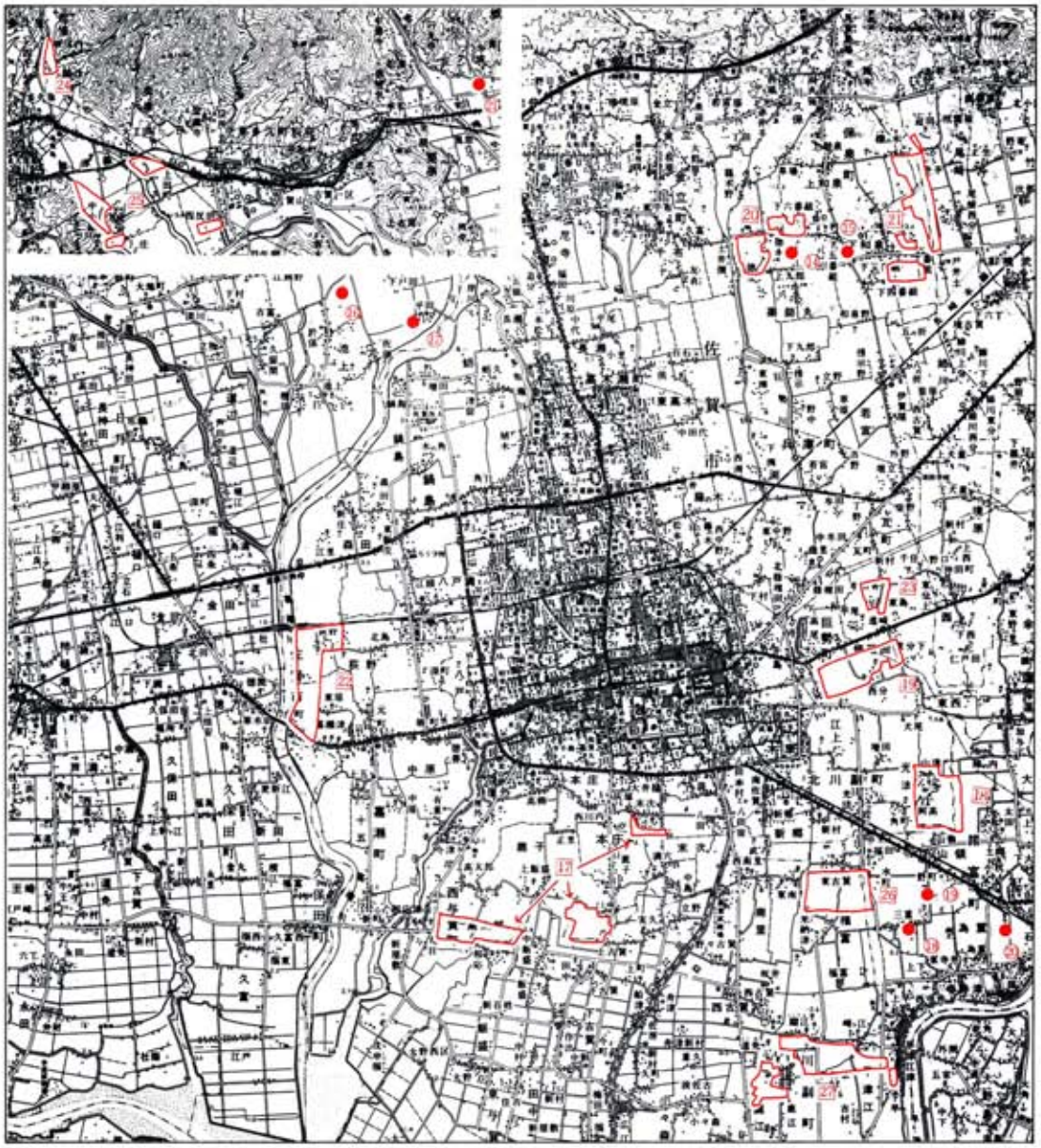


図13　佐賀西部地区周辺地形図（1：100,000）

17城西第1・第2（佐賀市）	24四　　下（多久市）	⑯於保三本松遺跡
18北　川　副（佐賀市）	25多久東部（多久市）	⑰本村籠遺跡
19巨　　勢（佐賀市）	26川副北部（川副町）	⑱三重本村遺跡
20久保泉西部（佐賀市）	27川副中部（川副町）	⑲三重楪ノ木遺跡
21久保泉東部（佐賀市）	⑭村徳永遺跡	⑳石塚古墳群２号墳
22嘉　　瀬（佐賀市）	⑮立野遺跡	㉑寺浦廃寺
23兵庫南部（佐賀市）		

(1) 佐賀市（城西第１地区、城西第２地区、北川副地区　図14、巨勢地区、久保泉西部地区（泉工区）　図15・16、久保泉東部地区（第２・第３換地工区）　図17・図18、嘉瀬地区、兵庫南部地区　図19）

城西第１地区（佐賀市西与賀町大字高太郎字丸目外：確認調査対象面積18.5ha）は佐賀市街の南側に展開する、現在水田として利用されている低地（標高３ｍ）一帯で、佐賀南部広域農道の北側、相応津の集落の東側地区である。

当該地内では従来埋蔵文化財の存在は確認されておらず、周辺部においても発見の報告は未だされていない。

確認調査は水路建設による掘削予定地、特に現集落部に隣接している地点を対象に18箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも確認できなかった。耕作土・水田部床土の下層は灰色・灰褐色粘質土（ガタ土）が厚く堆積している状況である。

城西第２地区（佐賀市本庄町大字本庄、大字末次：確認調査対象面積38.5㎡）は佐賀市道・城内～中島線の西側に隣接し、末次の集落の南側に広がる地域（標高2.5～３ｍ）、及び鹿子の集落の南側で大井手幹線水路、県道・東与賀～佐賀線、佐賀南部広域農道によって区画されている地域（標高２～2.5m）一帯である。

この地区についても第１地区同様周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周辺の集落部には末次遺跡、灰塚遺跡、上飯盛遺跡、飯盛館跡等中世の集落跡、居館跡が点在している。

確認調査は水路建設のため掘削が予定されている地区を対象に22箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

北川副地区（佐賀市北川副町大字光法、字山津、字阿高：確認調査対象面積35.2ha）は、佐賀市と諸富町の市町境に沿って南下する佐賀江川の支流に西接し、山津、阿高の両集落の周囲を取り巻く低地部分（標高2.5～2.8m）であり、現在は水田地帯となっている。

計画地区周辺の集落部には増田遺跡、山領村中遺跡（諸富町）などの中世から近世にかけての集落跡が点在する。

水路建設による掘削予定地を対象に、試掘溝45箇所を設定して確認調査を実施した結果、10箇所で弥生時代及び中世の土壙、溝跡、柱穴を確認し、１箇所で遺物包含層を検出したため、"阿高遺跡"の名称で周知化を行った。

個別協議の結果、遺跡が確認された2,600㎡は水路建設予定地であり、設計変更が困難なため全域本調査を行うことになった。

巨勢地区（佐賀市巨勢町大字高尾字高尾小路外：確認調査対象面積42.0ha）は巨勢川の東岸に隣接し、国道264号線に沿って道崎、角町、西分の集落まで広がる低地（標高３～3.5m）で、現在は水田として利用されている。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周辺の集落部分には平尾遺跡（弥生時代の遺

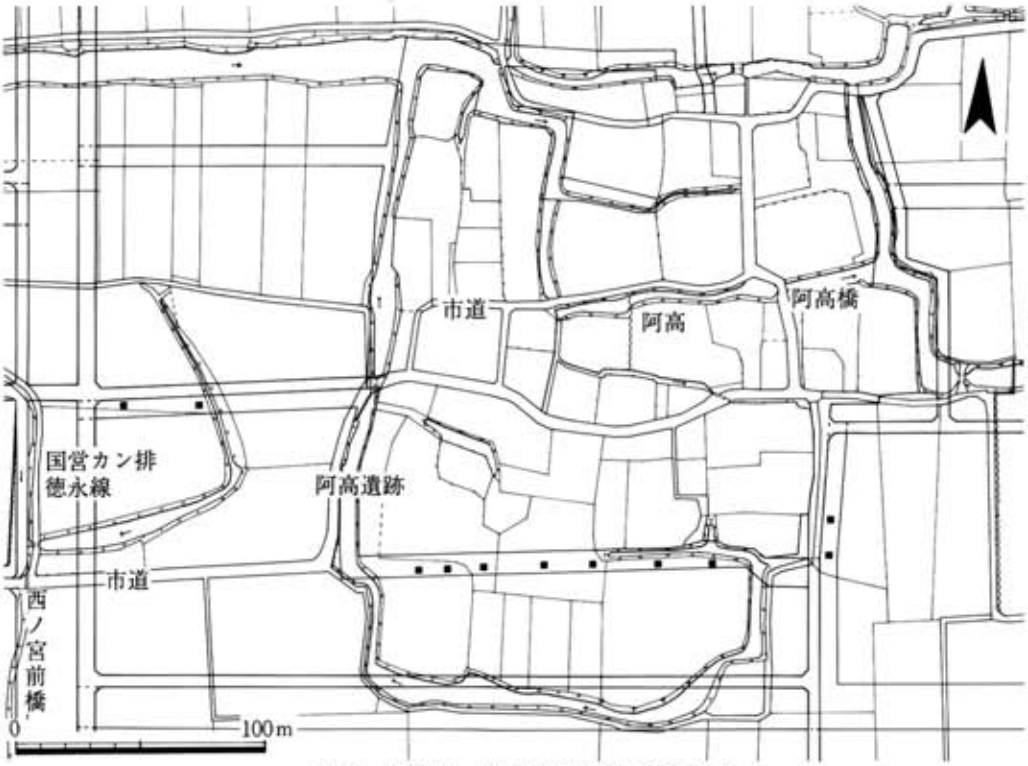


図14　佐賀市・北川副地区試掘溝設定図

物散布地）、牟田寄遺跡（弥生時代～中世の集落跡）、牟田寄貝塚（弥生時代の貝塚）等が点在する。

確認調査は国営・かん排徳永線部分を含め、水路建設予定地区を中心に28箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構は確認できなかった。遺物については５箇所の試掘溝で弥生時代中期から後期に至る包含層を確認したが、いずれも土器片の摩滅が著しいことから、外からの流れ込みによるものと判断される。

久保泉西部地区・泉工区（佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永、字古村：確認調査対象面積31.0ha）は巨勢川中流の東岸に接し、徳永、村徳永、篠木野等の集落に至る微高地（標高５～10m）で、現況は水田と畑地である。

計画予定地区はその殆どが弥生時代から中世に至る集落跡である村徳永遺跡、及び古村遺跡の範囲に含まれる。また周辺地域にも同様の性格を持つ遺跡が多数立地しており、佐賀県内においても最も遺跡の密度の高い地域の一つとなっている（福田義彦　1985　『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第15集　佐賀市教育委員会）。

掘削予定の部分を中心に40箇所の試掘溝を設定して調査を実施したところ、26箇所について弥生時代から中世に至る住居跡、井戸跡、溝跡、土壙、柱穴等を確認した。また遺物に関しても弥生時代から中世に至る各時期の土器片（弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁

器）、石器、石製品等を検出した。特に弥生時代の遺構・遺物は微高地上のほぼ全域に分布しており、大規模な集落跡の存在する可能性がある。

確認調査によって判明した遺跡の広がりは14,250㎡にも及び、基盤整備事業との調整が難行したが、13,300㎡については水路建設による掘削予定部分であり、設計変更が困難なため、本調査実施となった。

久保泉東部地区第２・第３換地工区（佐賀市久保泉町大字上和泉字本村、字新村、大字下和泉字永屋：確認調査対象面積60.0ha）は県道・小城～北茂安線の北側、県道・背振～佐賀線の東側に隣接し、国営・佐賀東部導水路の両側に広がる沖積平野（標高4.6～14m）で、東部地区内の南東の一隅を占め、その殆どが高畑や水田として利用されている。

調査対象地区はその全域が本村遺跡（弥生時代～中世の集落跡）、及び南宿遺跡（古墳時代・

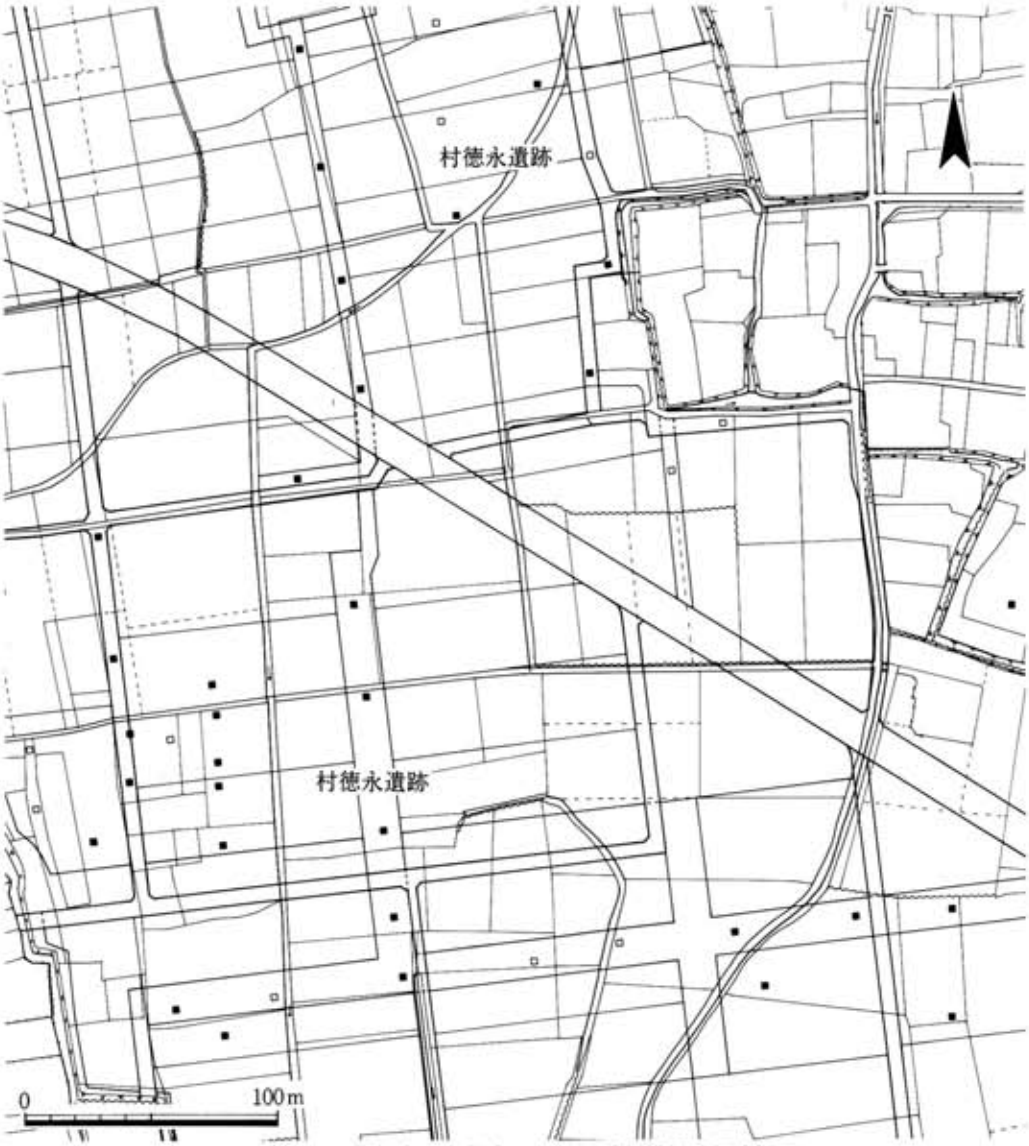


図15　佐賀市・久保泉西部地区試掘溝設定図(1)

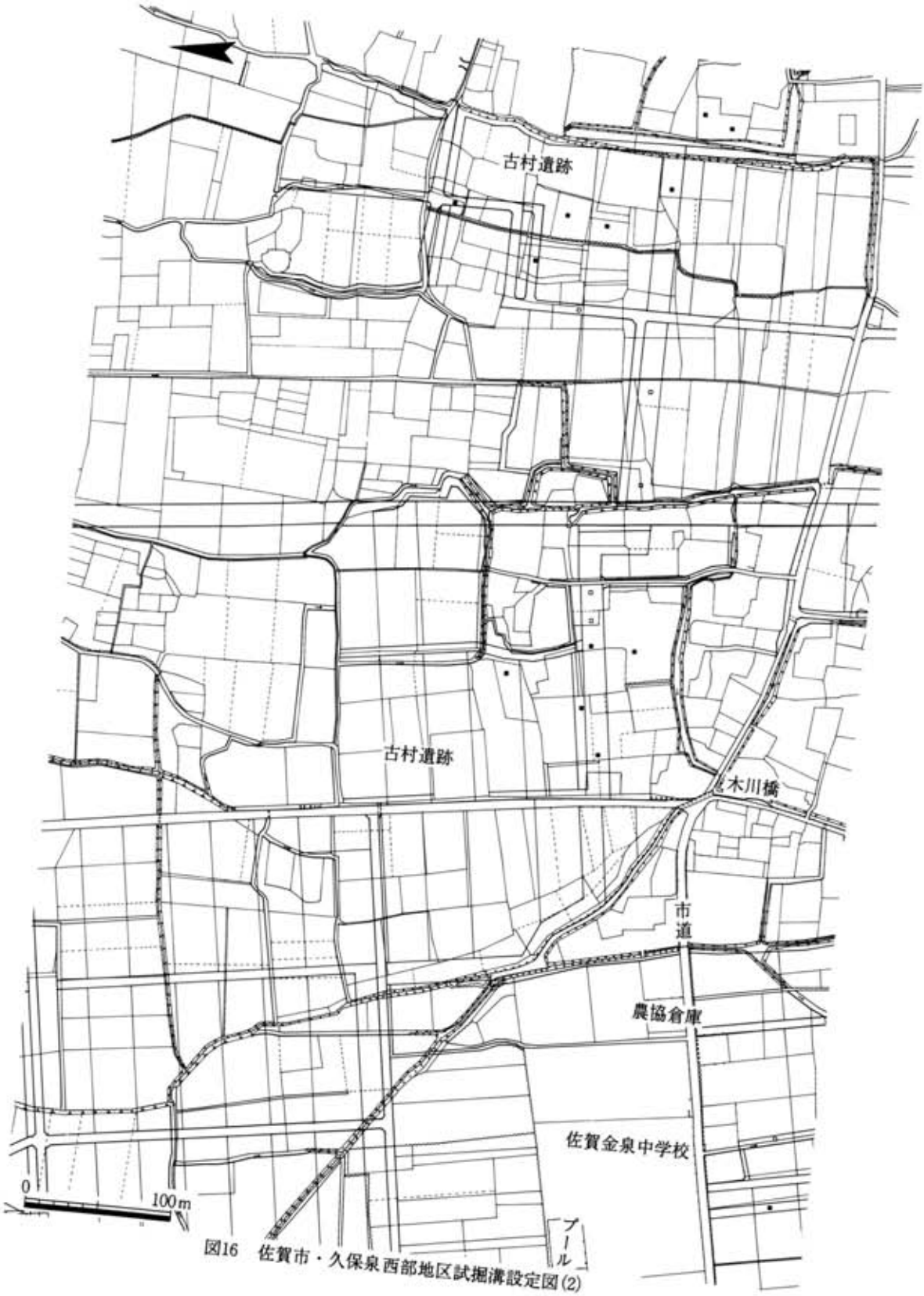


図16　佐賀市・久保泉西部地区試掘溝設定図(2)

中世の集落跡）の範囲内で、周辺部にも櫟ノ木遺跡、泉遺跡（福田義彦　1986　『泉遺跡』佐賀市文化財調査報告書第16集　佐賀市教育委員会）等弥生時代から中世に至る集落跡が密集している。

確認調査は第２換地工区に５箇所、第３換地工区に26箇所の試掘溝を、掘削される部分、及び水路掘削予定地に設定して行った。その結果、第２換地工区では遺構・遺物とも検出できなかったが、第３換地工区からは弥生時代から近世に至るまでの遺構（土壙、溝跡、柱穴等）と遺物（弥生土器片、土師器片、瓦等）を検出した。これにより竪穴住居跡や掘立柱建物跡の存在は確認できなかったものの、時代的に複合した集落跡が存在する可能性がある。

遺跡が発見された8,600㎡の部分の保存について協議を重ねた結果、遺跡の検出された箇所が高畑に集中しており、盛土による保存工法を採ることが難しいことから6,400㎡が本調査実施予定地区となった。

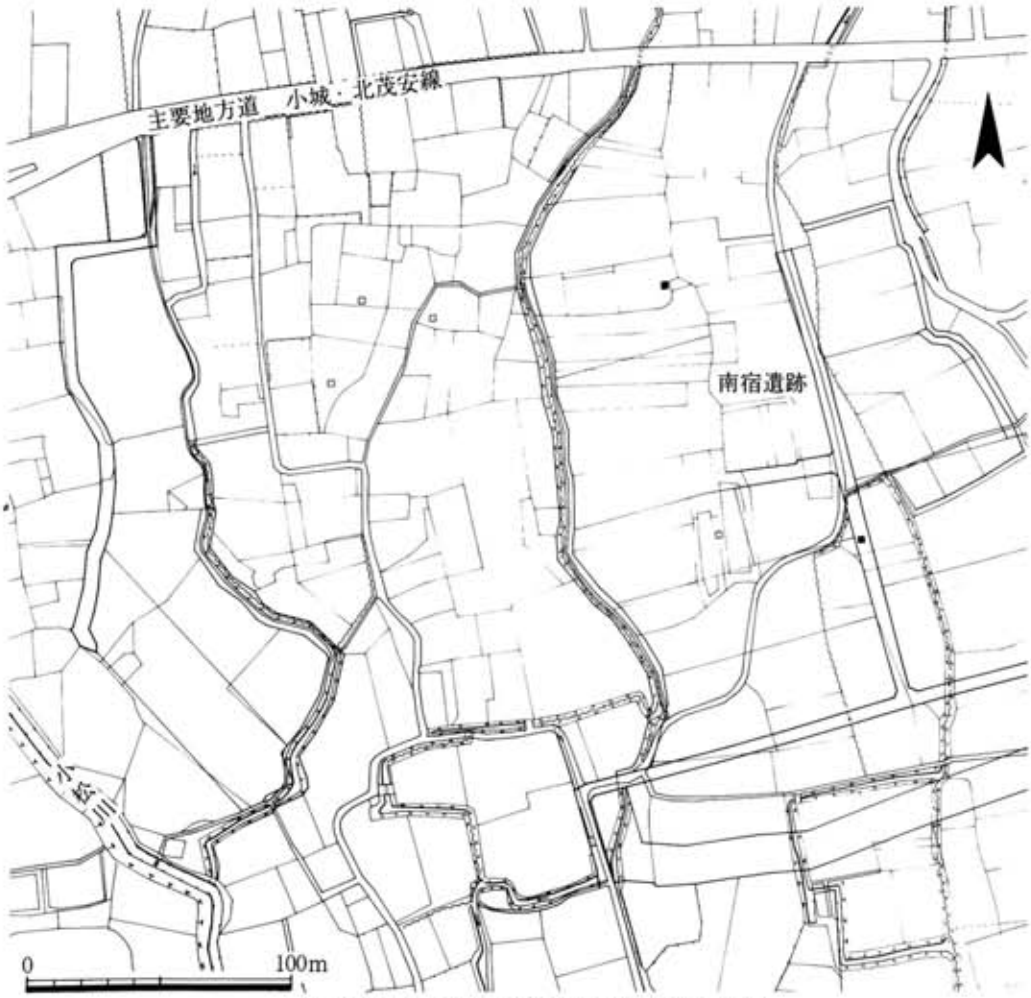


図17　佐賀市・久保泉東部地区試掘溝設定図(1)

図18　佐賀市・久保泉東部地区試掘溝設定図(2)

嘉瀬地区（佐賀市嘉瀬町大字荻野字二本松籠、字二本杉籠、字四本杉籠：確認調査対象面積74.4ha）は、嘉瀬川東岸に接する低位の沖積平野（標高3.4m）で、JR長崎線、県道・鍋島停車場線、国道・207号線に囲まれた範囲であり、現況は水田となっている。

調査区内には荻野の集落部を中心に分布する荻野遺跡（中世の集落跡）が立地しているほかは、遺跡の存在は知られていない。

確認調査は水路掘削予定地を対象に54箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

兵庫南部地区（佐賀市兵庫町大字瓦町字牟田寄：確認調査対象面積15.0ha）は県道・脊振～佐賀線の南側、国営幹線水路・徳永線と焼原川によって区画される地域の南半部分の低地（標高３～3.4m）で、計画予定地区内にはクリークが縦横に巡り、この地における独特な集落の景観を見せている。

当該地区はその全域が牟田寄遺跡（弥生時代～中世に至る集落跡）の分布範囲内であり、周辺の集落部にも伝阿弥陀寺跡、伝光明寺跡、伽藍遺跡等の中世の寺院跡、集落跡が点在している。

確認調査は水路掘削予定地を対象に32箇所の試掘溝を設定して行った。その結果10箇所で奈良時代より中世に至る土壙、溝跡、柱穴等の存在を確認し、遺物についても土師器片、須恵器片、陶器片を検出した。またクリークの掘削断面には厚さ10cm程の牡蠣殻の堆積層が露出しており、調査区の東側に隣接する牟田寄貝塚（弥生時代）の分布が当地にまで及んでいる可能性がある。

個別協議の結果、遺跡の分布する4,500㎡のうち、3,000㎡が本調査対象地区となった。

⑵　多久市（四下地区　図20、多久東部地区（大工田地区、西ノ谷地区、四半田地区））

四下地区（多久市北多久町大字多久原字四下：確認調査対象面積4.0ha）は多久市街が立地する多久原の扇頂部分(標高67～80m）にあたり、今出川に沿って岸川の集落部から南に伸びる狭隘な谷部の開口部分が調査対象地区である。

計画地の周辺には八天山遺跡（旧石器時代、縄文時代の遺物散布地）が存在するが、従来遺跡の存在は知られていなかった。

四下・申川内の両集落に挟まれた水田地区の削平予定の地域を対象に、28箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、３箇所で土壙、柱穴を確認し、２箇所から弥生時代後期の土器片、中世・近世の土器片、陶磁器片を含む遺物包含層を検出した。このことから弥生時代より中世に至る集落跡の存在が想定されるため、遺跡の分布している今出川の自然堤防上を対象に“四下大丹遺跡”として周知化を図った。

個別協議の結果、遺跡の広がりが確認された2,100㎡のうち、盛土対応が困難な1,200㎡については本調査を実施することとなった。

図19　佐賀市・兵庫南部地区試掘溝設定図

多久東部地区については、大工田地区、西ノ谷地区、四半田地区の３地域が確認調査の対象となった。

大工田地区（多久市北多久町大字多久原字大工田：調査対象面積5.4ha）は今出川の東岸に隣接し、JR唐津線と国道203号線によって区画される扇状地の部分（標高20～30m）で、現況は水田である。

計画地はその東側の大部分が大工田遺跡（縄文時代～古墳時代の集落跡）の範囲に含まれる。また周辺の、現在集落が形成されている微高地上、及び北側の尾根から舌状に突出した丘陵の縁辺部にも上田町遺跡、鴻ノ巣遺跡等の旧石器時代から中世に至る集落跡・遺物散布地が点在

図20　多久市・四下地区試掘溝設定図

している。

面工事による掘削予定地を対象に15箇所の試掘溝を設定して確認調査を行った結果、1箇所から弥生時代の遺物包含層を検出した。

西ノ谷地区（多久市南多久町大字下多久字西ノ谷：確認調査対象面積10.6ha）は、多久市街の南側に位置する独立丘陵の東端部が、扇状地と接する一帯（標高25～37m）であり、現在はそのほとんどが水田として利用されている。

当該地は一部が中小路遺跡（縄文時代～古墳時代の集落跡）、十井手遺跡（弥生時代・古墳時代の集落跡）の分布範囲に含まれるが、低地部分は今出川の氾濫原にあたるため遺跡の残存している可能性は低い。

掘削予定の部分に132箇所の試掘溝を設定して確認調査を行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

四反田地区（多久市東多久町大字別府字四反田：確認調査対象面積2.0ha）は、今出川と牛津川の合流地点の北側に広がる微高地上（標高10～12m）で、今手川と県道・多久～江北線とにその東西を区画される水田地帯である。なお当該地区は河川氾濫の常襲地帯であり、従来遺跡の存在は確認されていない。

計画地区全体を対象に40箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、調査地区の南西部分の3箇所から中世の土壙（もしくは溝跡）を検出した。遺物についても調査区周辺部の3箇所から中世の瓦器片、石鍋片、青磁片等を粗に含む遺物包含層を検出した。このことから今回の調査対象地区の周辺には、中世の集落跡が存在することも考えられる。

昭和60年度の確認調査で大工田地区において確認された縄文時代・弥生時代の遺跡約4,000㎡の保存問題も含めて協議を行った結果、農林側の努力により、盛土による遺跡全体の保存が可能となった。

(3) 川副町　（川副北部地区、川副中部地区）

川副北部地区（佐賀郡川副町大字福富：確認調査対象面積38.9ha）は、国道・208号線と県道・大詫間～光法停車場線、国営・市の江～川副幹線水路に囲まれた低平な沖積平野（標高2～3m）である。

事業予定地区に隣接している集落部には村中角遺跡、太田城跡、大堂五本松遺跡等の中世・近世の集落跡が点在する。

水路掘削予定地を対象に47箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

川副中部地区（佐賀郡川副町大字西古賀：確認調査対象面積45.0ha）は、早津江川の西岸河川堤防上に広がる低地（標高2m）で、国道・444号線と国営・市の江～川副幹線用水路によって区画される水田地帯である。

早津江津は有明海への出入り口に近く水上交通の便が良いため、古くから船舶運輸の基地として開発されており、その痕跡は鰐江遺跡（中世の集落跡）に残っている。また諸富町南部地区にかけての、低地に島状に点在する微高地上には三重村中遺跡、三重二ッ寺遺跡等の、弥生時代から近世に至る集落跡が見られる。

確認調査は水路掘削予定地を対象に93箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、鰐江集落の南側の１箇所から溝跡を検出し、他の１箇所では土師器小皿片、土鍋片等を検出した。これにより中世から近世にかけての集落跡の存在が窺えるが、その分布面積は余り広がらないと思われる。なお遺跡の広がりが推定される部分については〝鰐江南遺跡〟として周知化した。

3．佐賀南部地区の調査

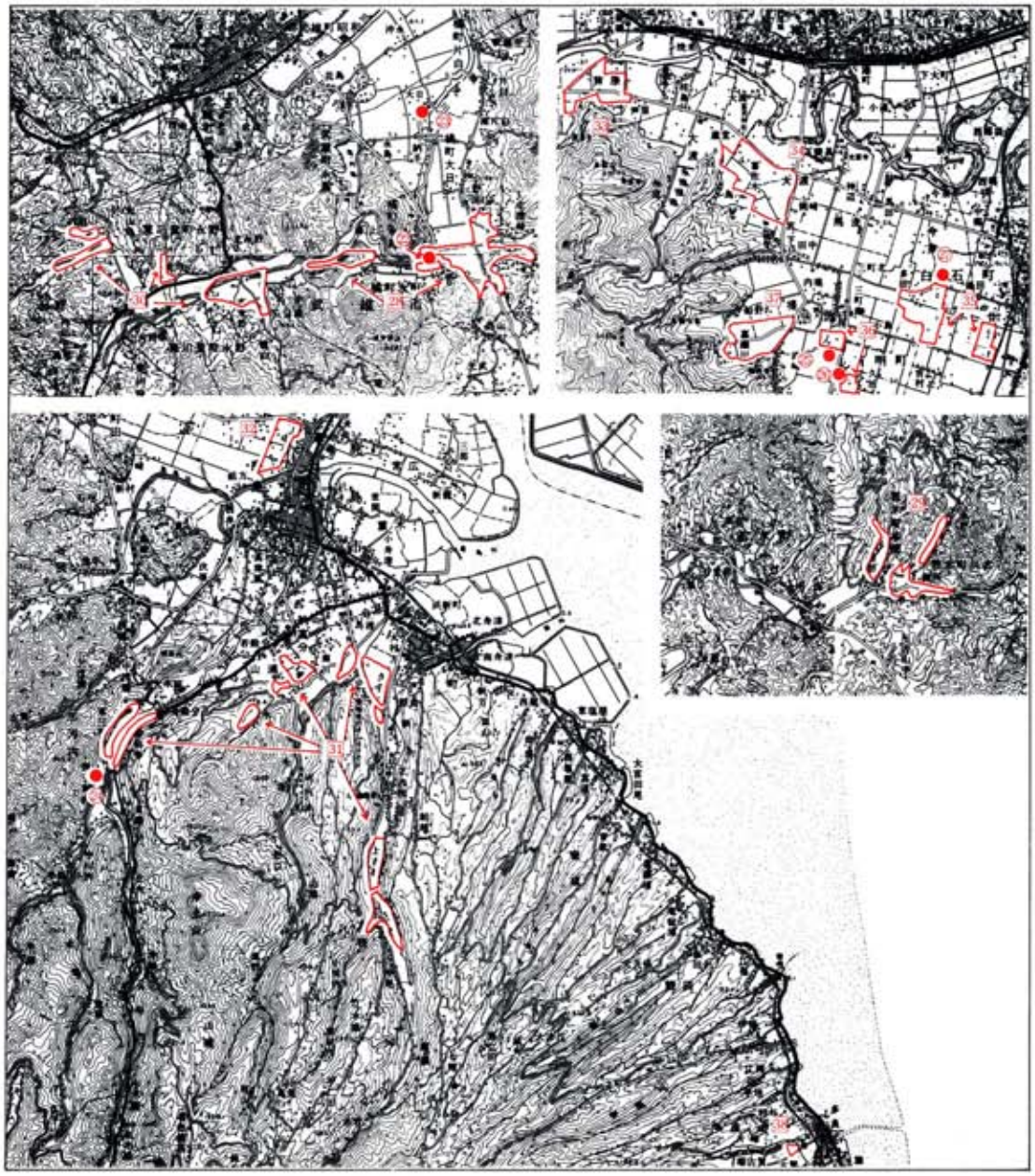


図21　佐賀南部地区周辺地形図（1：100,000）

28橋　（武雄市）	34白石西1-3（白石町）	㉒市場遺跡
29本　部（武雄市）	35白石西3-1（白石町）	㉓井手橋遺跡
30川　登（武雄市）	36白石西4-2（白石町）	㉔吹野遺跡
31鹿島西部（鹿島市）	37白石西4-3（白石町）	㉕湯崎東遺跡
32中　村（鹿島市）	38片　峰（太良町）	㉖久治遺跡
33橋　下（北方町）		㉗多田遺跡

(1) 武雄市（橘地区、本部地区、川登地区　図22）

橘地区（武雄市橘町大字永島字上野外：確認調査対象面積22.0ha）は橘町南部、武雄市と塩田町との市町境に位置する虚空蔵山の、緩やかな傾斜を保って北側に延びる尾根と尾根の間を縫って深く入り込んでいる谷水田一帯（標高７～８ｍ）である。

事業予定地区は、潮見山と虚空蔵山に挟まれた谷部を貫流する潮見川の自然堤防上に位置し、市場遺跡（弥生時代・古墳時代の集落跡、中世・近世の集落跡、墳墓群）、中小路遺跡（中世の集落跡）の分布範囲に含まれる。また東側隣接地には国史跡・おつぼ山神籠石が、そして周辺の自然堤防上には市道改良工事に伴う発掘調査によって、弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺構が確認された郷ノ木遺跡（原田保則　1984　『郷ノ木遺跡・Ｂ地点』　武雄市文化財調査報告書第14集　武雄市教育委員会）をはじめとする弥生時代から中世にかけての集落跡が数多く所在している（原田保則　1986　『みやこ遺跡』　武雄市文化財調査報告書第15集　武雄市教育委員会、原田保則　1987　『玉江遺跡』　武雄市文化財調査報告書第16集　武雄市教育委員会、原田保則　1987　『小野原遺跡』　武雄市文化財調査報告書第17集　武雄市教育委員会、原田保則　1988　『下貝原遺跡』　武雄市文化財調査報告書第18集　武雄市教育委員会）。

確認調査は面工事により削平を受ける部分、及び水路掘削予定地を中心に10箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

本部地区（武雄市若木町大字本部字山中：確認調査対象面積15.5ha）は武雄市の最北西部、伊万里市との市境に位置し、川古川、永野川、それに御所川の３本の河川による浸食作用によって形成された、傾斜が急で狭隘な谷底平野一帯（標高62～84m）であり、現在はそのほとんどが水田として利用されている。

調査対象地区はその中の最も奥まった部分で、範囲内には九浦遺跡（縄文時代の遺物散布地）が所在しており、周辺の丘陵縁辺部にも道免木遺跡、満場遺跡等の縄文時代の遺物散布地が点在している。

削平予定部分、及び水路掘削予定地を対象に67箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

川登地区（武雄市東川登町大字永野字天神皆木外：確認調査対象面積30.0ha）は橘地区の西側に隣接した地域の、潮見川とその支流である大山路川によって開析された谷底平野部分（標高15～47m）であり、現在は水田として利用されている。

当該地区内における遺跡の存在は余り知られておらず、周辺の丘陵縁辺部、及び現在の集落部について谷の浦遺跡、打越遺跡といった縄文時代の遺物散布地や、大円寺跡（中世の寺院跡）等が散在しているのみである。

面工事による削平予定地、及び水路掘削予定地を対象に、74箇所の試掘溝を設定して確認調

査を実施した結果、5箇所で中世の遺構の存在を確認し、4箇所から古墳時代より中世に至るまでの土師器片、須恵器片を主体とする遺物包含層を検出した。周囲の地形等を勘案すると集落跡の存在が想定され得る。またこれにより、従来遺跡の発見報告がなかった潮見川の自然堤防上にも遺跡が存在することが明らかになった。なお、発見した遺跡については"天神裏遺跡"、"南永野遺跡"として周知化された。

個別協議の結果、遺跡の存在が確認された4,800㎡のうち、掘削が避けられない600㎡については本調査を実施することになり、残り4,200㎡については農林側の努力によって保存されることとなった。

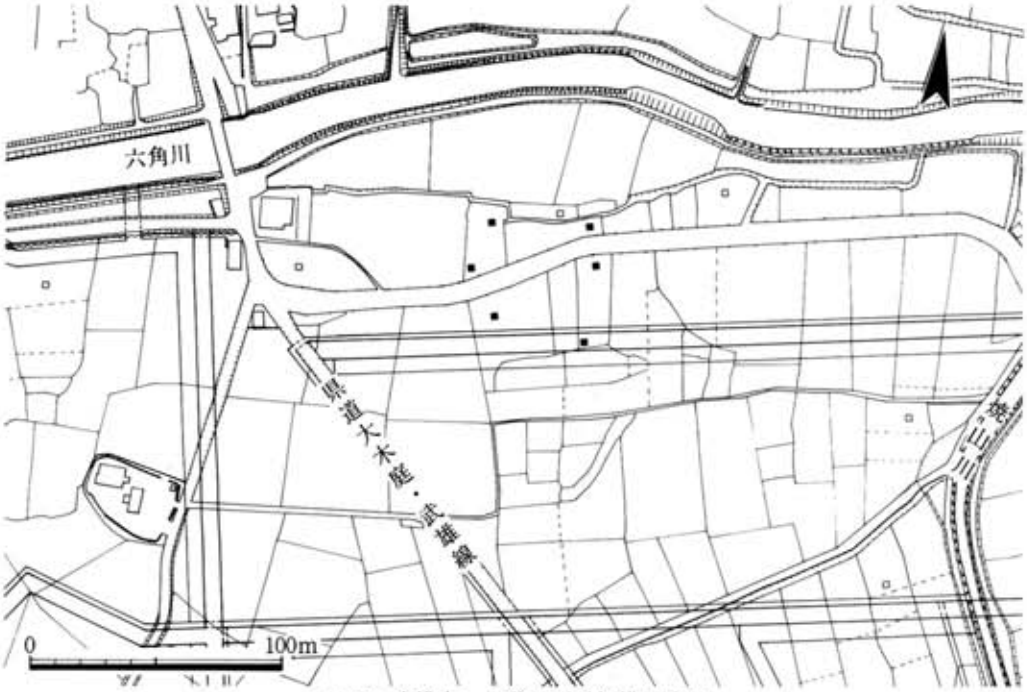


図22　武雄市・川登地区試掘溝設定図

(2)　鹿島市（鹿島西部地区（中尾地区、筒口地区　図23、久保山地区、上古枝地区、東三河内地区、水梨地区）、中村地区）

鹿島西部地区・中尾地区（鹿島市大字古枝字中尾、字門守外：確認調査対象面積8.5ha）は多良岳～経カ岳山系の北山麓の浸食谷の一つであるが、現在は浜川による開析が進行し、非常に狭隘で傾斜が急な谷底平野（標高65～85m）が形成されているため、棚田形式の水田経営が行われている。

調査予定地区については周辺部も含め従来遺跡の発見報告が皆無で、今回削平予定地と水路掘削予定地を対象に28箇所の試掘溝を設定して確認調査を行った結果でも、遺構を確認することはできなかった。なお遺物については近世陶磁器片を若干量検出したが、旧河川の氾濫に起因する流れ込みによるものと思われる。

鹿島西部地区・筒口地区（鹿島市大字山浦字筒口：確認調査対象面積7.8ha）は鹿島市街地の南部に位置し、中尾地区の浸食谷と同様に多良岳～経ケ岳山系の北山麓に石木津川の開析によって形成された谷底平野の、平地への開口部分（標高13～20m）にあたり、現在は水田として利用されている。

調査予定地区内には縄文時代から近世に至るまでの集落跡、遺物散布地である飯田遺跡、不動遺跡、立馬場遺跡が所在し、北側の市街地方向に傾斜して行く微丘陵上には県指定史跡・鬼塚古墳をはじめ、縄文時代から中世に至る集落跡、遺物の散布地が多く集中しており、佐賀南部地区における最も遺跡の密度の高い地域の一つとなっている。

削平予定地及び水路掘削予定地を中心に68箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、9箇所で中世の土壙、溝跡、小穴等を確認し、2箇所から縄文土器片、中世の土器片・陶器片、瓦片等を検出した。これにより当該地には中世の頃に小規模な集落が存在していたものと思われる。なお遺跡の分布面積は4,200㎡である。

鹿島西部地区・久保山地区（鹿島市大字古枝字久保山：確認調査対象面積12.0ha）は中尾地区の北側、浜川の中・下流域に展開する微丘陵地帯で、浜川によって開析された谷底平野の低地への開口部分（標高13～20m）に相当する。

調査予定地区内には中世の遺物散布地である百塚遺跡が所在し、周辺の丘陵縁辺部にも組合せ式石棺等の出土により弥生時代の墳墓群として注目を集めている野畠遺跡や久保山古墳群が点在している。

確認調査については面工事に伴う削平予定地、及び水路掘削予定地を対象に、86箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構の存在を確認することはできなかった。また遺物についても近世の磁器片が少量出土したが、これは浜川の度重なる氾濫に起因する再堆積層からの検出遺物である。

鹿島西部地区・上古枝地区（鹿島市大字古枝字上古枝：確認調査対象面積10.0ha）は中尾地区と久保山地区の中間に位置し、浜川の中流域に広がる自然堤防上の微高地（標高55～63m）であり、現在は水田として供用されている。この計画予定地の北側には貞享年間（1684～1688年）に建立され、現在では社内の命婦社が県指定の重要文化財（建造物）となっている祐徳稲荷神社が所在する。

当該地は浜川上流の中尾地区同様、以前より遺跡の存在は報告されておらず、周辺部についても東側丘陵の上部に鮒越遺跡、鮒越管原南遺跡等の縄文時代の遺物散布地が散在する程度である。

水路等の掘削工事予定地区を対象に、91箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構の存在は確認できず、遺物についても浜川の氾濫原から中世・近世の陶磁器を少量検出したに止まった。

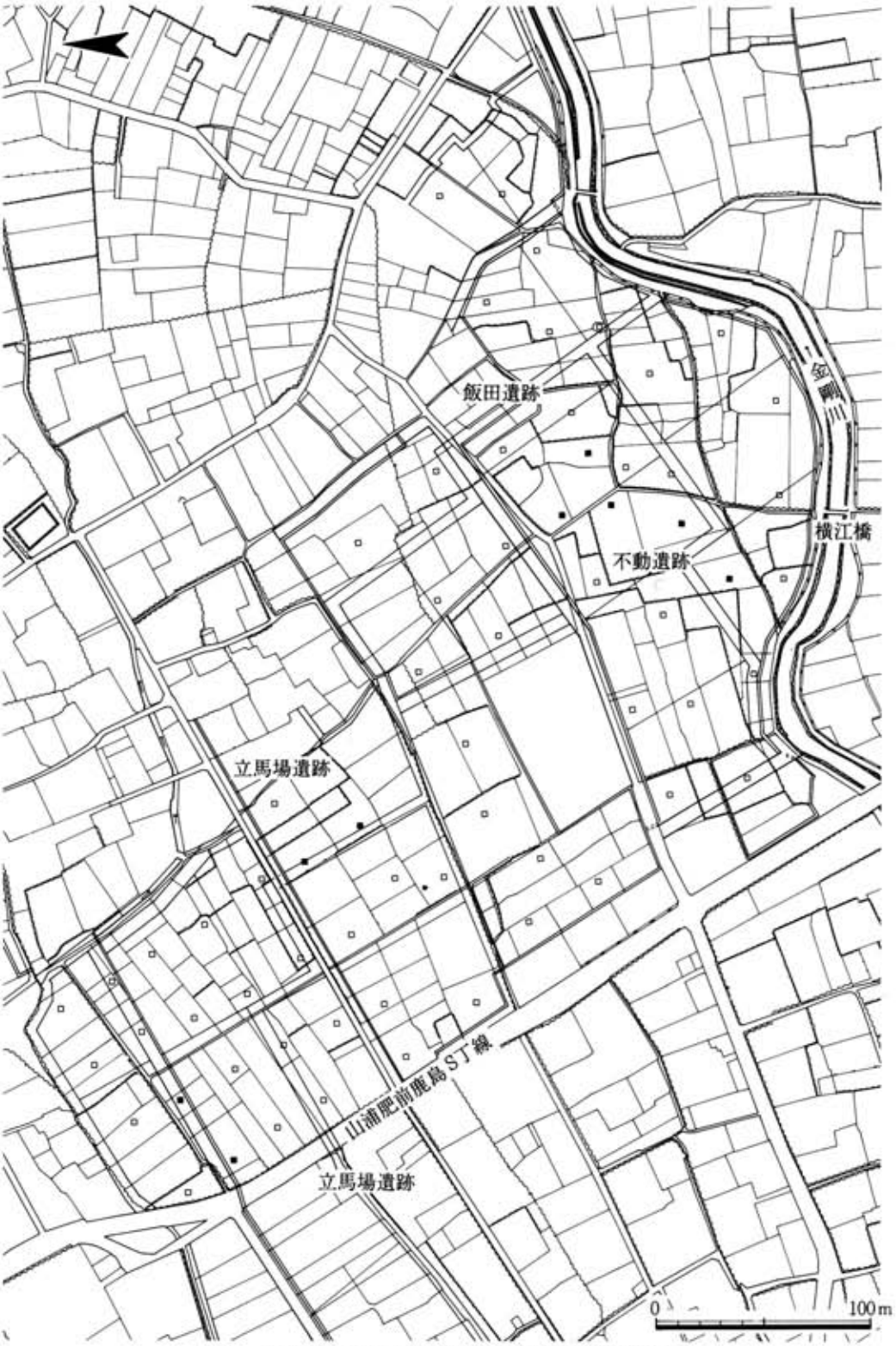


図23　鹿島市・鹿島西部地区（筒口地区）試掘溝設定図

鹿島西部地区・東三河内地区（鹿島市大字三河内字東三河内：確認調査対象面積8.7ha）は鹿島市街の南西部に位置し、琴路岳～浄土山系を貫流する木庭川と中川の浸食によって開析された谷底平野部分（標高40～70m）である。

調査対象地内には中世の遺物散布地である郷野遺跡、八名遺跡が所在し、周辺の丘陵上には三山遺跡、池田遺跡といった縄文時代の遺物散布地が点在する。

削平予定地、及び水路掘削予定地を中心に77箇所の試掘溝を設定して確認調査を行ったが、遺構の存在は確認できず、遺物についても耕作土中から黒曜石の剥片を１点検出したのみであった。

鹿島西部地区・水梨地区（鹿島市大字山浦字水梨：確認調査対象面積3.0ha）は筒口地区の西側に近接する微高地（標高30m）で、水梨堤に流入する小河川の両側に広がっている狭隘な谷底平野である。

調査対象予定地区内における周知の埋蔵文化財包蔵地の存在は未だ報告されていないが、隣接した水梨の集落部の丘陵上から経筒が出土している。

削平予定部分を中心に28箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構は確認されず、遺物に関しても２箇所で黒曜石の剥片、縄文土器と思われる土器の細片を検出したのみであった。

中村地区（鹿島市大字中村字本町、字横沢：確認調査対象面積30.0ha）は塩田川と鹿島川に挟まれた一帯で、両河川の沖積作用によって形成された低平な平野（標高５m）である。現況は鹿島市街の西側に展開する水田地帯で、国道・207号線バイパスがその中央部を南北方向に縦断する形で建設される予定である。

確認調査予定地区内には本町遺跡（中世の遺物散布地）、横造城跡（中世の城郭）が存在し、東側には角田遺跡・外道遺跡（共に中世の遺物散布地）や常広（鹿島）城跡（中世の城郭）等が近接して点在する。

水路掘削予定地区を対象に64箇所の試掘溝を設定して確認調査を行った結果、鹿島川の自然堤防上の一角を占める30m四方の高まり（現況は高畑）に設けた２箇所から近世の陶磁器を検出した。ただし遺物の出土状態、及び土層の堆積状態から判断すると、遺物を包含している土層は自然堆積によって形成されたものではなく、宅地造成時に地高めとして盛土されたものと思われる。

遺跡の存在が確認された鹿島西部地区・筒口地区の4,200㎡の取り扱いに関して協議を行った結果、1,000㎡については盛土による保存が可能となったものの、残りの3,200㎡については工法上の保存処置が困難なため、本調査を実施することになった。また中村地区の陶磁器を検出した地点については工事に際し、立ち会い調査を行うことで合意に達した。

なお、筒口地区の遺跡検出区域は名刹・蓮厳院の寺域に近接しており、両者の関連性も想定

できるため、発掘調査だけではなく、文献等を基にした資料調査も必要と思われる。

(3) 北方町（橋下地区）

橋下地区（杵島郡北方町大字芦原字一本松、字三本松：確認調査対象面積24.4ha）は勇猛山より北側に派生する丘陵の裾部分に接する水田地帯（標高3.2～3.8m）で、六角川の氾濫原の縁辺部にあたる。

調査対象地区の東部分は久治浦遺跡（弥生時代～中世の集落跡）の分布範囲に含まれている。また勇猛山北西山麓には昭和38、41年に団体営・パイロット事業に関連して調査され、石室内に線刻を有するものなど合わせて50基以上の墳墓の存在が推定されている勇猛山古墳群（木下之治　1967　『勇猛山古墳群』　佐賀県教育委員会）や、62基以上の墳墓の存在が推定され、昭和61年にその一部が調査された鳴瀬古墳群が立地している。そして東側に近接している独立丘陵上には、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群である椛島山遺跡が所在しており、六角川対岸の丘陵縁辺部には追分古墳（高瀬哲郎他　1983　『追分古墳』　北方町文化財調査報告書第２集　北方町教育委員会）が立地している。

水路掘削予定地を対象に16箇所の試掘溝を設定して確認調査を行ったが、１箇所より弥生土器片、土師器片を含む包含層を検出したのみで、遺構の存在については確認できなかった。

(4) 白石町（白石西地区・１－３工区、４－３工区、３－１工区　図24、４－２工区）

白石西地区・１－３工区（杵島郡白石町大字大渡字喜佐木：確認調査対象面積58.0ha）は杵島山から北へ向かって舌状に延びる小丘陵の東側に広がる低平な水田地帯（標高３～3.5m）で、県道・福富～武雄線と県道・錦江～大町線によって北側、及び東側を区画されている一帯である。

調査対象地区は喜佐木遺跡（弥生時代～古墳時代の遺物散布地）の分布範囲であり、西側の丘陵上には箕具崎古墳群、箕具山古墳群が立地している。

水路掘削予定地区を対象に114箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、３箇所で土壙を確認したが、覆土中に遺物を含まないため時期決定ができなかった。遺物については５箇所から土師器、及び須恵器の小片を検出したのみであった。耕作土の下層は淡黄色～淡灰色粘質土であり、これは六角川の広範囲に及ぶ氾濫に起因する再堆積土と思われる。

白石西地区・４－３工区（白石町大字堤字船野、字嘉瀬川：確認調査対象面積20.0ha）は犬山岳から東へ派生する小丘陵の縁辺部に展開する低平な土地（標高３～５m）で、現況は水田地帯である。

調査対象地区は嘉瀬川遺跡（弥生時代～中世の集落跡）の分布範囲に含まれており、周辺にも現在の集落部の広がりに重なる形で杵島城跡、隆城跡等の中世の城館跡が所在し、隣接する丘陵部についても５世紀後半のかぶと塚古墳や、５世紀代の陪冢を伴う湯崎古墳群等が点在している。

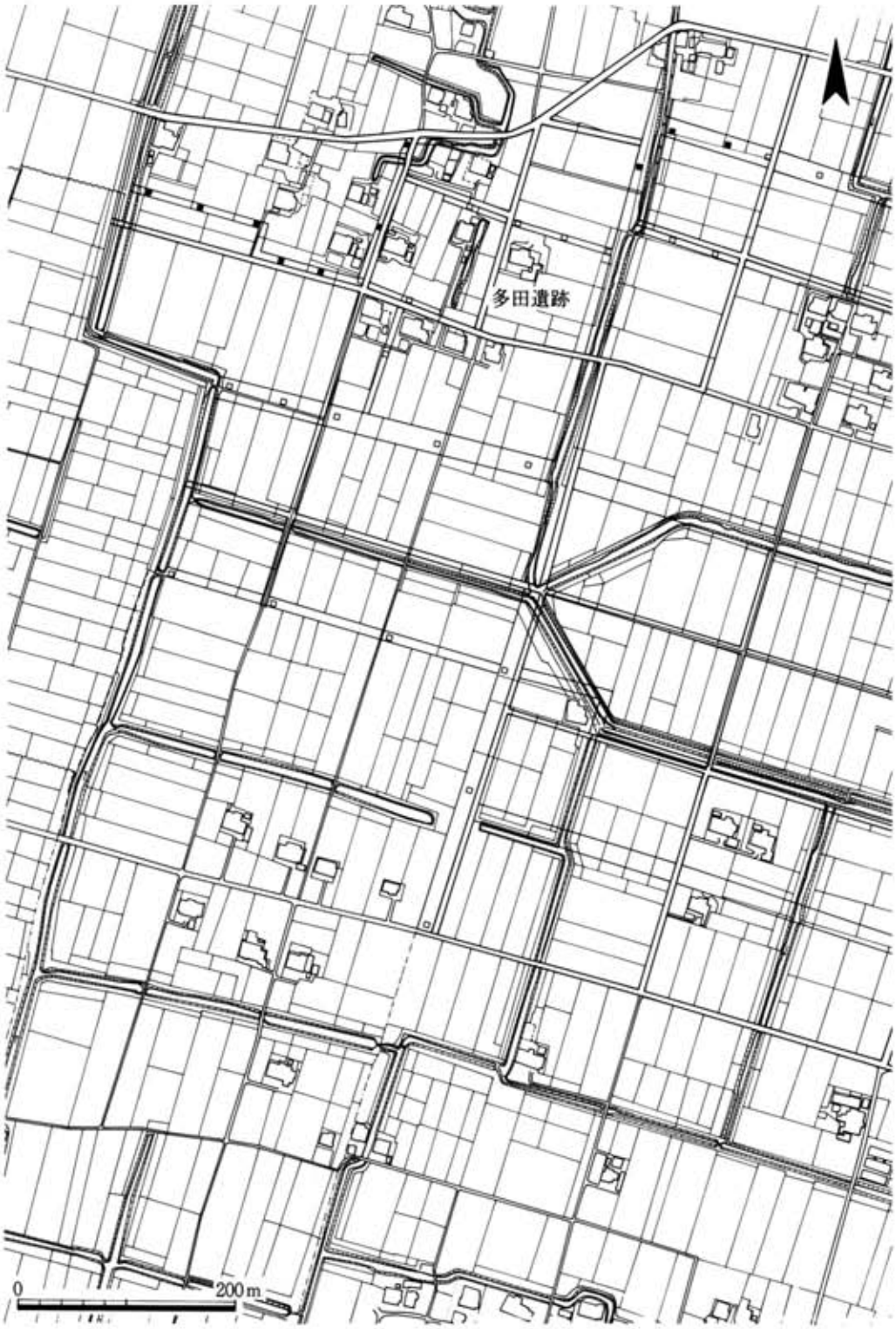


図24　白石町・白石西３－１工区試掘溝設定図

水路掘削予定地区を中心に44箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、１箇所より遺構を検出したが、規模・性格・時期については不明である。また遺物については４箇所から土師器片等が出土したが、いずれも細片である。

白石西地区・３－１工区（白石町大字多田、大字江越：確認調査対象面積30.0ha）は４－３工区の更に東側に位置し、白石町市街地の南西側から有明町との町境に至る一帯に広がる低地（標高1.4～2.3m）で、現況は水田である。

当該地は多田遺跡（弥生時代～中世の集落跡）の分布範囲に含まれており、昭和62年度に町道の北側部分について実施した農業基盤整備事業に係る文化財の発掘調査においても、古墳時代後期から奈良時代にかけての土壙、柱穴、及び近世の溝跡、木棺墓等を確認している。また現在集落が形成されている、水田周辺部に点在している島状の微高地や六角川の自然堤防上には、今泉遺跡、馬田遺跡、秀屋形跡といった奈良・平安時代から中世に至るまでの集落跡、館跡が点在する。

確認調査は水路掘削予定部分を対象に39箇所の試掘溝を設定して行った。その結果、3箇所で近世の遺構（規模・性格とも不明）及び小穴の存在を確認した。また15箇所で土師器片、須恵器片、磁器片等を含む包含層を検出したが、遺物はいずれも細片であり少量である。

今回の確認調査は、昭和62年に実施した本調査の結果を受け、多田遺跡の南限の把握が主目的であったが、調査結果から町道付近の標高２～2.4mの微高地周辺までは遺跡の範囲であることが明らかになった。

白石西地区・４－２工区（白石町大字湯崎字湯崎、字久治：確認調査対象面積3.8ha）は４－３工区の東側に近接する一帯であり、現況は有明町との町境に広がる低平な水田地帯（標高３m）となっている。

調査対象地区は弥生時代・古墳時代の集落跡である久治遺跡、湯崎東遺跡の分布範囲に含まれ、周辺にも、例えば杵島山系から派生している丘陵の縁辺部には弥生時代から中世に至る集落跡である湯崎遺跡、川津遺跡等が立地し、北側の現在堤集落が形成されているあたりには、同じく弥生時代から中世に至る集落跡である堤遺跡が所在する。

水路掘削予定地を対象に16箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、１箇所で小穴を確認したに止まった。遺物についても４箇所で土師器片等を検出したものの、いずれも細片である。このことから従来現在の久治集落に重なる形で存在が推定されていた久治遺跡は、その分布の中心が南にずれる可能性が大きい。

個別協議を行った結果、３－１工区で水路掘削部分にかかる5,000㎡、及び昭和62年度から継続調査を行っている４－２工区の持ち越し部分（町道の南側部分）3,000㎡の合計8,000㎡について本調査を実施することになった。

(5) 太良町（片峰地区）

片峰地区（藤津郡太良町大字多良字片峰：確認調査対象面積6.1ha）は多良川下流部の左岸域にあたる沖積平野（標高11～17m）一帯で、現在は水田、畑地、果樹園等として利用されている。

当該地は周辺の埋蔵文化財包蔵地内ではないが、北側に隣接する舌状の台地上には喜三郎遺跡（縄文時代の遺物散布地）、多良峰遺跡（縄文時代の遺物散布地、古墳時代の箱式石棺墓・土器棺墓等の墳墓群）が所在する。

試掘溝を水路掘削予定部分、及び面工事により掘削を受ける部分を対象に27箇所にわたって設定し、確認調査を行ったが、遺構の存在は確認できなかった。また遺物についても２箇所で黒曜石の細片と土器細片を検出したのみであった。

4．佐賀北部地区の調査

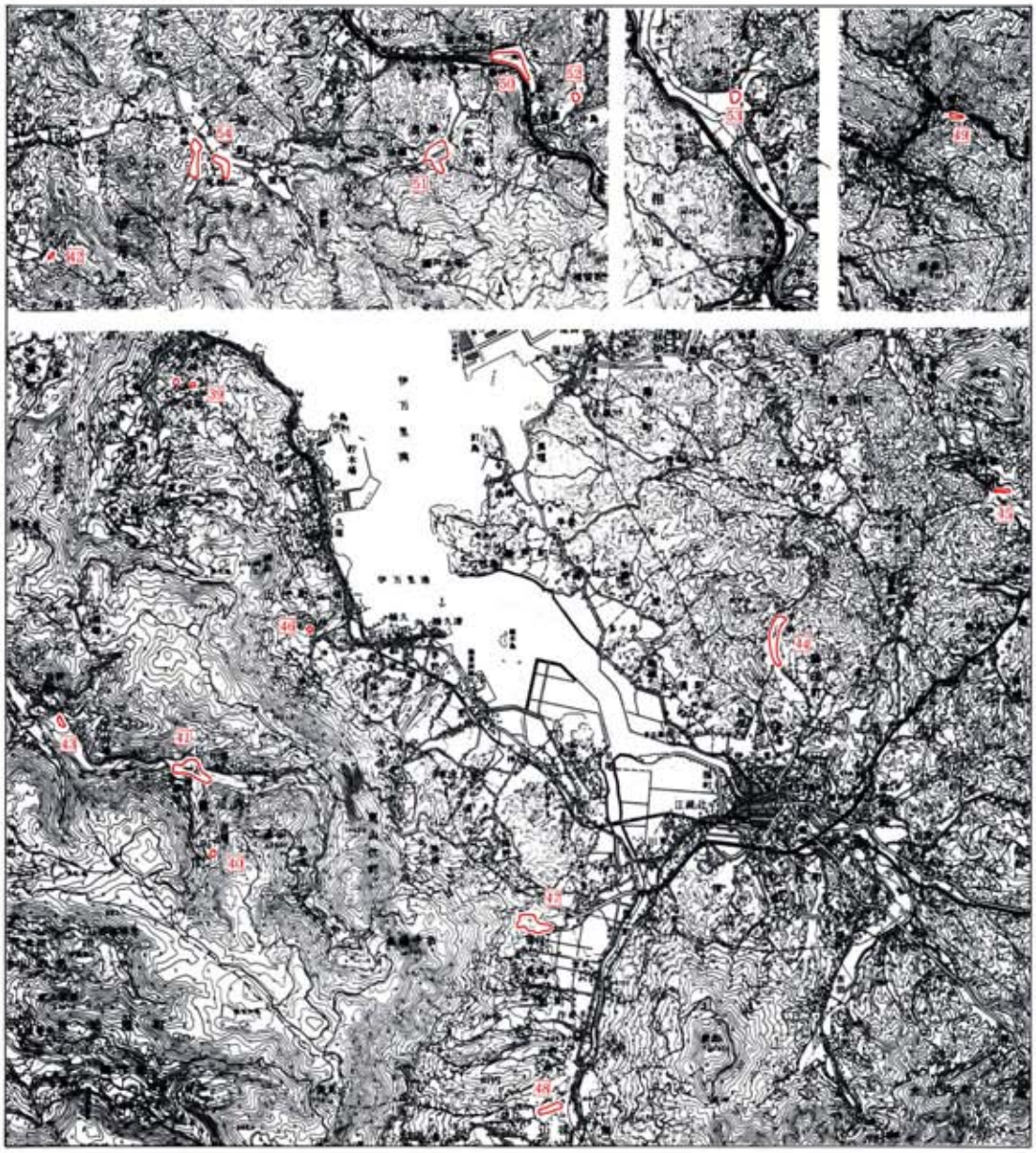


図25　佐賀北部地区周辺地形図（1：100,000）

39立　岩（伊万里市）
40古　場（伊万里市）
41滝川内（伊万里市）
42山　倉（伊万里市）
43川内野（伊万里市）
44平　山（伊万里市）
45大　野　岳（伊万里市）
46伊万里西部（伊万里市）
47伊万里・大里団地（伊万里市）
48柳　谷（西有田町）
49荒川－天川線（七山村）
50厳　木（厳木町）
51厳木北部（厳木町）
52浦川内（厳木町）
53大　野（相知町）
54尾部田（相知町）

(1) 伊万里市（立岩地区、古場地区、滝川内地区、山倉地区、川内野地区、平山地区　図26、大野岳地区、伊万里西部地区、伊万里地区（大里団地））

立岩地区（伊万里市山代町立岩：確認調査対象面積6.6ha）は伊万里市と長崎県松浦市との県境にそびえる石倉岳に対して、佐代川を挟んで対峙している平坦な頂部を有する台地上（標高50～100m）に位置する。

この第三紀層から成る平坦な丘陵上には竹原遺跡、皮籠石遺跡、猿喰遺跡等の縄文時代の遺物散布地が密集しており、その分布の状況は佐賀県内においても特異な様相を呈する。また弥生時代から中世にかけての遺跡も散見される。

確認調査は掘削予定地区を対象に35箇所の試掘溝を設定して行った。その結果２地点において遺跡の存在を確認することができた。まずＡ地点（立岩公民館東側）では６箇所の試掘溝から中世の柱穴や炉跡、遺物としては陶磁器片（中国の宋代から明代にかけてのもの、国産の近世初頭のもの）等を検出し、Ｂ地点（立岩公民館西側）では３箇所の試掘溝で縄文時代後期の遺物包含層を検出した。

これにより立岩地区においては2,100㎡に及ぶ中世の集落跡と、500㎡の分布範囲を持つ縄文時代の遺物包含層の両方が存在することが明らかとなった。

古場地区（伊万里市東山代町古場：確認調査対象面積3.0ha）は大通山西側の急斜面が平坦な台地（標高359m）へと移行する部分であり、志佐川の支流である讃岐川によって開析された谷内にあたる。

調査対象地区周辺には縄文時代の遺物包含層である上古場遺跡、坊主石遺跡等が立地しているが、その性格についてはほとんど知られていない。

掘削予定地の中で旧地形の形状を保っている地点を対象に、７箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構及び遺物は検出できなかった。

滝川内地区（伊万里市東山代町滝川内：確認調査対象面積19.4ha）は古場地区の北側にあたり、讃岐川と志佐川との合流点部分の緩傾斜地（標高200m）である。鳥帽子岳に水源を発する志佐川は、当該地を経由して志佐町に至るまで第３紀層の丘陵を急峻に開析しており、その流路に従って狭隘で傾斜の大きい谷底平野が発達している。

調査対象地区内には周知の埋蔵文化財の存在は確認されておらず、志佐川上流に前田遺跡（縄文時代の遺物散布地）が立地するのみである。

確認調査は掘削予定地のうち、旧地形の残存状態が良好な地点を対象に21箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

山倉地区（農免道路：伊万里市大川町山口字山倉：確認調査対象面積4.5ha）は松浦川の中流域に広がる沖積平野の東端が、八幡岳から北西に延びる丘陵部と接する位置に形成されている小盆地（標高50～100m）にあたり、現況は樹園地である。

当該地における遺跡の分布については、南方向の小高い丘陵上に中世の城館跡である出口城が立地する以外、現在のところ遺跡発見の報告はなされていない。

削平予定部分を中心に7箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

川内野地区（伊万里市東山代町川内野：確認調査対象面積9.4ha）は伊万里市東山代町と長崎県松浦市志佐町とを分ける県境の一部である志佐川に沿って東西に細長く延びる谷底平野部分（標高140～180m）である。国見岳と大阪山とを南北に対峙する形で区別しているこの谷底平野は、志佐川の開析に拠るもので、この地区は位置的には先述の滝川内地区の下流部（西側）にあたる。

調査予定地区内には周知の埋蔵文化財包蔵地の所在は見られないが、その周辺部については、国見岳から南に派生する尾根が平坦な台地へと移行し、平野部に接するあたりを中心に柳山遺跡、松葉遺跡、栗山遺跡等の縄文時代の遺物散布地が点在している。

面工事による削平予定部分を対象に、16箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したところ、7箇所で中世・近世の土壙、柱穴、小穴等を確認し、5箇所から縄文時代～近世に至る石器、土器片、陶磁器片等を検出した。

調査結果から、9,880㎡にわたって中世・近世の集落跡が分布していると推定されるため、“川内野遺跡”として周知化を行った。

平山地区（伊万里市脇田町平山：確認調査対象面積6.1ha）は城古岳から派生したなだらかな丘陵と大平山に挟まれた緩斜面の一帯で、伊万里川の支流によって開析され、南に向かって開けている谷底平野部分（標高34～80m）にあたる。傾斜角度が大きいため現在では棚田として利用されている。

調査対象地区周辺には平山高麗人墓（近世の墳墓）、瓶屋窯跡（近世の窯跡）が点在しているが、従来遺跡の存在は知られていない地域である。

削平予定部分、及び道路建設予定部分を対象に、79箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したところ、2箇所で近世の柱穴、石組遺構を確認した。またこの2箇所より明代の青花片、時期不明の青磁片等を検出した。

確認調査の結果より、遺構が検出された水田部を中心に中世・近世の建物跡が存在すると思われ、その分布面積は1,070㎡程度と考えられる。なお、この部分については“平山遺跡”として周知化を図った。

大野岳地区（農免道路：伊万里市南波多町原屋敷：確認調査対象面積1.0ha）は大野岳の南裾に広がる尾根と谷が交互に入り組む地域で、徳須恵川の支流によって開析された狭隘な谷底平野（標高66～95m）である。現在は水田、果樹園、人工林等として活用されており、周囲の地形、及び斜面に露出している土層の堆積状況を観察すると、開墾時に既に著しく削平を受け

図26　伊万里市・平山地区試掘溝設定図

ている模様である。

当該地においては従来遺跡の存在は確認されておらず、周辺部に下対遺跡、平木場遺跡、裏ノ原遺跡といった縄文時代の遺物散布地や、中世の城館跡である新久田城跡が点在するのみである。

削平予定部分、及び道路建設予定部分を対象に13箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物の存在は確認できなかった。

伊万里西部地区（伊万里市山代町峰：確認調査対象面積1.3ha）は国見山系から伊万里湾に向かって派生する台地上（標高36～70m）にあって、湾内に急激に落ち込む城山と、谷間を挟んだ南東側に位置する。

調査予定地区は狩場遺跡（縄文時代、及び中世の遺物散布地）の分布範囲に含まれており、周辺の平坦な尾根上には狩場遺跡、湯谷遺跡や浦野遺跡といった縄文時代の遺物散布地が点在している。

削平予定部分について８箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

伊万里地区・大里団地（伊万里市二里町大字大里字西尾：確認調査予定面積8.6ha）は鳥帽子岳東麓の尾根が急斜面から緩斜面へと移行しつつ、有田川下流に広がる沖積平野に至るまでの低平な台地上（標高60～80m）で、西尾堤の南側を取り巻く一帯である。現在は山林、果樹園等として利用されている。

調査対象地区の立地する丘陵の東側先端部には西尾遺跡（縄文時代・弥生時代の遺物散布地、甕棺墓、中世・近世の建物跡）が所在しており、周辺にも長谷平遺跡、浦田遺跡といった縄文時代の遺物散布地が点在している。また北西方向には旧石器時代から縄文時代にかけての岩陰遺跡として著名な白蛇山岩陰遺跡（森醇一朗　1974『白蛇山岩陰遺跡』　佐賀県立博物館調査研究書第１集　佐賀県立博物館）が立地している。

面工事による削平予定部分を対象に、19箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、１箇所から時期不明でしかも残存状態が良くない土壙を１基検出したほかは、遺構・遺物を検出することはできなかった。

遺跡の存在が確認された地区の中で、文化財の取り扱いについての個別協議が必要となったのは川内野地区と平山地区である。川内野地区については遺跡が分布している9,880㎡のうち、全体の約30％に相当する3,000㎡が盛土対応で保存されることになり、残りの6,900㎡が本調査対象となった。また平山地区については遺跡の広がる1,070㎡のうち、盛土対応で830㎡の保存が可能となったため、残り240㎡が本調査の対象となり、結局合計7,140㎡が本調査対象として扱われることとなった。

(2)　西有田町（柳谷地区　図27・図28）

柳谷地区（西松浦郡西有田町大字山谷（乙）字柳谷、字谷平：確認調査対象面積5.5ha）は国見山系東麓の、有田川に注ぐ支流によって開析された谷部と、それを望む丘陵の北斜面（標高38～83m）にあたり、現在は水田として利用されている。

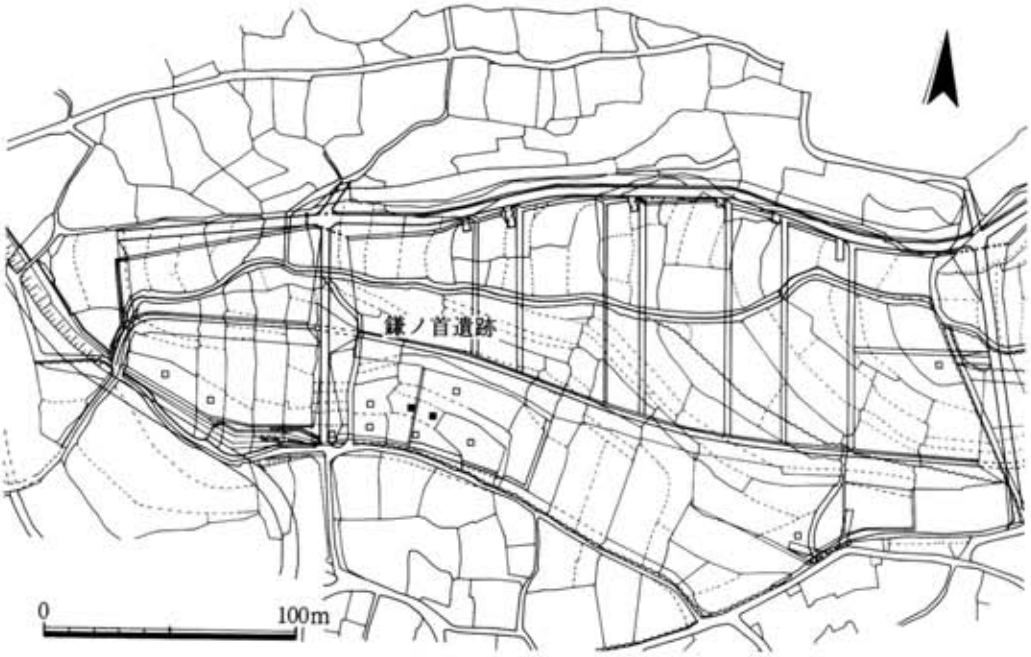


図27　西有田町・柳谷地区試掘溝設定図

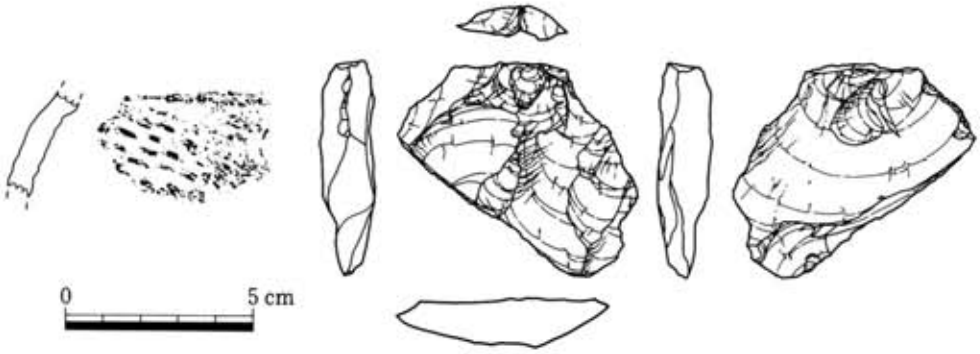


図28　西有田町・柳谷地区№5試掘溝出土遺物実測図

調査対象地区内には縄文時代の遺物散布地である鎌ノ首遺跡、柳谷遺跡、谷平遺跡、野瀬原遺跡が所在し、周辺の平坦な頂部を持つ丘陵上にも立山遺跡、黒木原遺跡、高良遺跡等の縄文時代の遺物散布地が密集している。

削平予定部分を対象に、14箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、２箇所から楕円押型文土器片を含む縄文時代の遺物数点を検出した。当該地は鎌ノ首遺跡の縁辺部と思われるが、地区内での遺物の包含は希薄で範囲も狭い。

(3)　七山村（荒川ー天川線）

荒川ー天川線（林道；東松浦郡七山村大字荒川字細川：確認調査対象面積0.1ha）は羽金山の南西麓に広がる急峻な尾根が、玉島川の支流によって開析された狭隘な谷底平野に接する部分（標高330～360m）で、現況は棚田に開墾された水田である。

調査対象地区は前田遺跡（縄文時代・中世の遺物散布地）の分布範囲内であり、周辺には河川の流域に沿って、縄文時代の遺物散布地である広田Ⅰ遺跡、広田Ⅱ遺跡が点在するが、そのほかの遺跡については余り良く知られていない。

掘削予定地区を対象に、４箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、表土から黒曜石の剥片を検出した以外は、遺構・遺物ともその存在を確認できなかった。

(4)　厳木町（厳木地区、厳木北部地区、浦川内地区）

厳木地区（東松浦郡厳木町厳木：確認調査対象面積12.0ha）は厳木川の開析によって作礼山南麓に形成されている谷底平野（標高35～45m）で、厳木川とJR唐津線とに挟まれている低平な部分（JR唐津線・厳木駅の北側一帯）が事業対象地区である。現在は水田として利用されている。

調査対象地区内における周知の埋蔵文化財の存在については明らかではないが、近接している南側尾根上にはオタッチョ（中世の墳墓）、室園神社六地蔵（天正14年：1586年銘の石造物）が所在する。また調査予定地区の東側に位置する、厳木川の開析作用によって形成された谷底平野に接している丘陵の縁辺部には、縄文時代から近世に至るまでの集落跡や遺物散布地が点

在している（樋渡敏暲　1979　『清音寺遺跡』　厳木町文化財調査報告書第１集　厳木町教育委員会）。

確認調査は削平予定地区を対象に、28箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。当該地については耕作土の下層は厳木川の氾濫・再堆積に起因すると思われる川砂、礫層であり、遺跡がかつて立地していたとしても現在では既に流失している可能性が大きい。

厳木北部地区（厳木町浪瀬：確認調査対象面積3.2ha）は、船山から北に延びる山系を厳木川の支流が開析して造り上げている狭隘な谷底平野（標高60～80m）で、現況は緩傾斜上に造成された棚田である。当該地一帯は昭和20年代に耕作土下の堆積土を大規模に採土し、ボタを選別した後、残った廃土を水田の床土として再利用していた地区であり、樫原遺跡、川頭Ｉ遺跡といった縄文時代の遺物散布地が周辺の低平な丘陵上に点在する以外は、従来遺跡の存在は知られていない。

削平予定地区を対象に22箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも検出できなかった。しかし水系に沿って溯ると、険しい岩山の山頂に築かれた中世城郭として著名な獅子ケ城の南麓に達するため、この地域一帯に当時の集落が営まれていた可能性もあり、今後の調査に期待される。

浦川内地区（厳木町浦川内：確認調査対象面積1.0ha）は厳木地区とは尾根を挟んだ東側に位置する急傾斜・狭隘な谷底平野部分（標高70～90m）である。調査対象地区は厳木川の支流が開析作用によって形成した氾濫原であり、現在は棚田として利用されている。

調査予定地区は縄文時代・弥生時代の遺物散布地である河内遺跡の分布範囲に含まれ、水系の両側に形成されている丘陵上にも山神遺跡、有ノ木遺跡、一踊遺跡等の縄文時代の遺物散布地が点在している。

掘削予定地を対象に12箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、２箇所で厚さ20cm程度の弥生時代中期の遺物包含層を確認した。

浦川内地区の遺物包含層の取り扱いについて個別協議を行った結果、包含層の存在が確認された場所は事業予定地区の中でも最も低地であるため、盛土対応による保存方法を採用することで協議が成立した。

(5)　相知町（大野地区　図29、尾部田地区）

大野地区（東松浦郡相知町大野：確認調査対象面積17.2ha）は松浦川によって開析された谷底平野が、松浦川の支流によって開析・形成された扇状地と接する一帯で、松浦川東岸の自然堤防上（標高８～10m）にあたり、現況は水田となっている。

調査予定地に近接している、夕日山～陣の山山系から西麓に派生している尾根の縁辺部には、小山遺跡、入道町遺跡、八反ケ倉遺跡といった縄文時代から古墳時代にかけての遺物散布地が

点在している。

削平予定地を対象に26箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、２箇所から弥生時代中期の土器片、及び中世の土師器片を検出した。遺物包含層の存在が想定できるが、２箇所以外の試掘溝については同性質の土層は確認できるものの、遺物の包含が認められない。なお遺物包含層の分布範囲については“大野遺跡”として周知化を図った。

遺跡の取り扱いについて個別協議を行った結果、盛土対応による保護が可能となった。

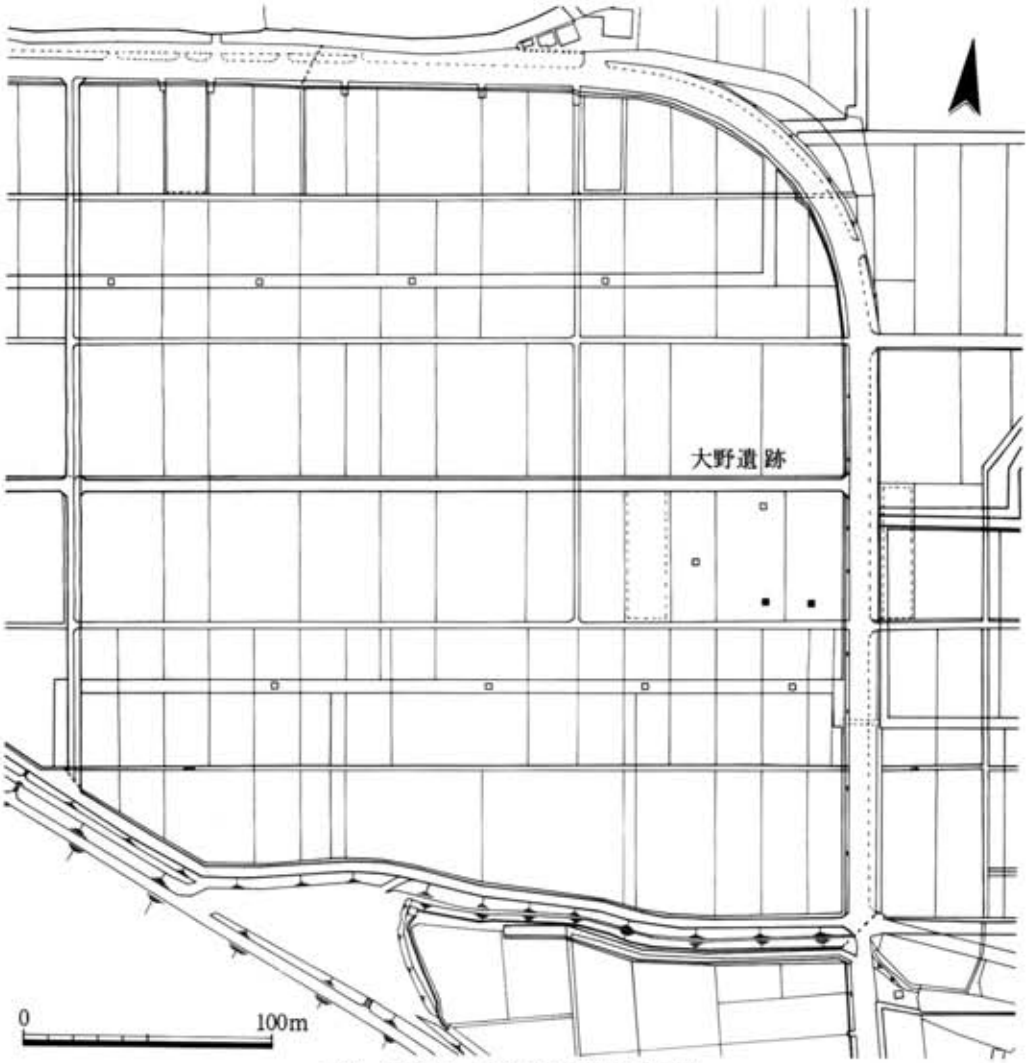


図29　相知町・大野地区試掘溝設定図

尾部田地区（相知町大字平山上字尾部田：確認調査対象面積6.4ha）は松浦川の支流である平山川が、八幡岳北麓から派生している尾根を開析して形成している狭隘な谷底平野の中で、尾部田集落の周囲を取り巻くように立地している傾斜地一帯（標高60～100m）であり、現在

は急傾斜を利用して棚田が造営されている。

調査予定地区に隣接した丘陵上には、縄文時代・弥生時代の遺物散布地である受泉寺遺跡、尾部田遺跡が立地しているが、従来集落跡等の存在についてはほとんど報告されていない地域である。

削平予定地を対象に37箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構・遺物とも確認できなかった。この地区においては耕作土の下層は礫を多く含んだ岩盤に近い性質の土層であり、地山形成層と思われる。

5．佐賀上場地区の調査

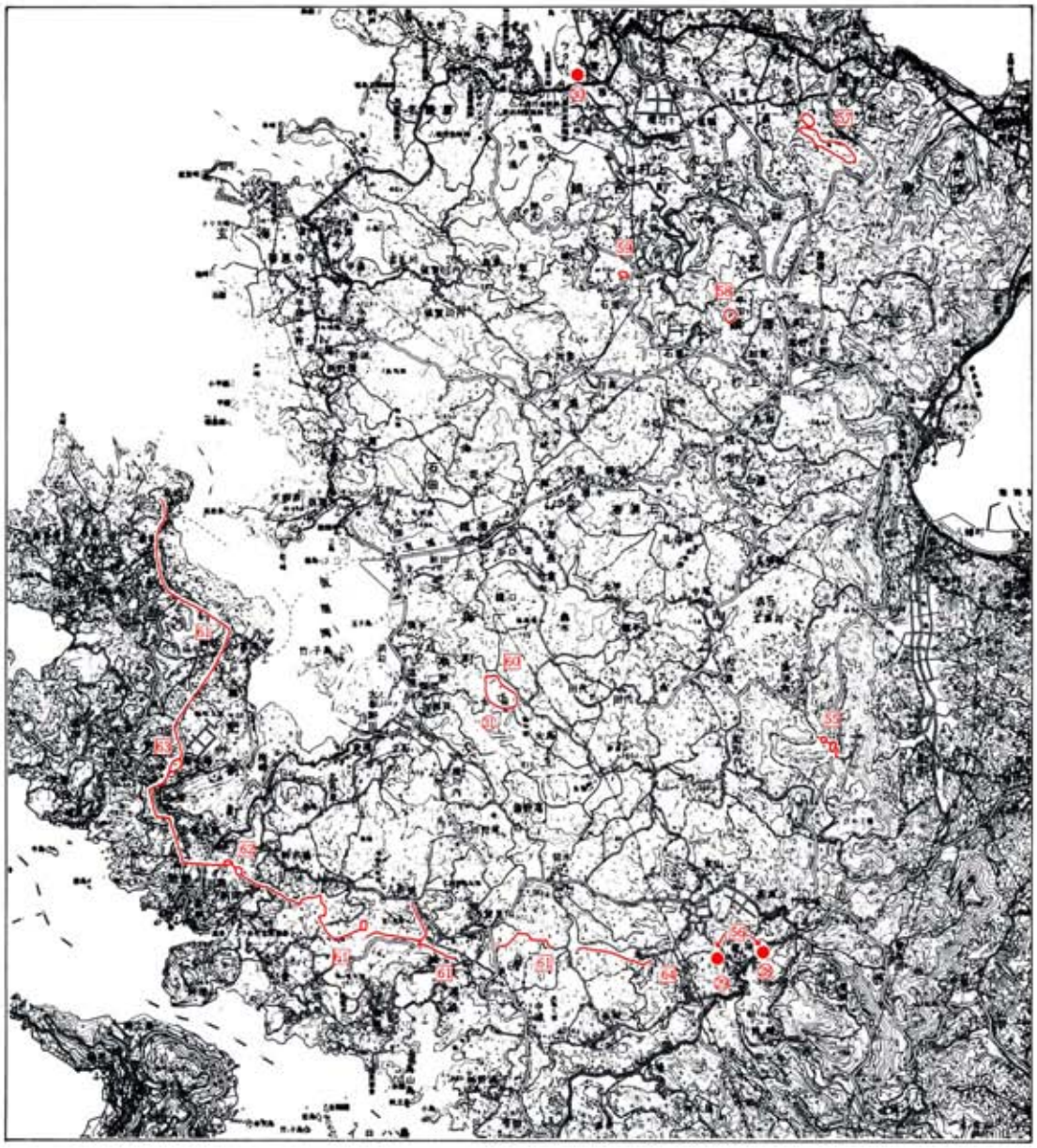


図30　佐賀上場地区周辺地形図（1：100,000）

55後川内（唐津市）	60牟　　形（玄海町）	㉘唐ノ川高峰遺跡
56唐ノ川（唐津市）	61鶴牧・八斗蒔・万賀里川（肥前町）	㉙唐ノ川境遺跡
57中　里（唐津市）	62新　　木　　場（肥前町）	㉚来島通之陣跡
58早　田（鎮西町）	63入　　野（肥前町）	㉛牟形遺跡群
59早ヶ田（鎮西町）	64赤　　坂（肥前町）	

(1) 唐津市（後川内工区、唐ノ川工区（殿切地区）、唐ノ川工区（境地区）、中里工区）

後川内工区（20号ファーム・ポンド；唐津市大字後川内：確認調査対象面積0.6ha）は松浦半島南部の平坦な丘陵上（標高220m）で、唐津ゴルフクラブ・ゴルフ場の北側に近接した一帯である。現在は畑地、水田として利用されている。

調査対象地区周辺の丘陵の平坦部には犬ノ馬場Ⅰ遺跡、犬ノ馬場Ⅱ遺跡、柳ノ坂遺跡等の縄文時代の遺物散布地が点在し、一部の遺跡については既に調査が行われている（田島龍太他 1985 『小十窯跡・大良中尾二ツ枝遺跡調査概報』 唐津市文化財調査報告書第12集 唐津市教育委員会）が、従来の存在は余り知られていない地域である。

水路掘削予定地を対象に、旧地形の残存状態が比較的良好な地点を選定し、3箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、1箇所で表土中より時期不明の土器片を検出した以外は、遺構・遺物とも発見できなかった。

唐ノ川工区・殿切地区（幹線水路；唐津市大字唐ノ川字殿切：確認調査対象面積0.2ha）は唐津市と肥前町との市町境に接する形で東西方向に細長く延びている、近世ないし近代に大規模に客土され、水田造営が行われた谷合地一帯（標高190～200m）である。現在は畑地として利用されている。

調査対象地区周辺の丘陵上には竹木場東山遺跡、堀田遺跡等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地が点在しているが、従来遺跡の存在が余り知られていない地域である。

幹線水路掘削予定地を対象に、3箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、谷部の客土中よりキセルの雁首を検出した以外は、遺構・遺物包含層とも確認できなかった。

唐ノ川工区・境地区（唐津市大字唐ノ川字境：確認調査対象面積0.6ha）は東松浦半島上の小盆地状低地に張り出した丘陵部の先端付近で、山塊から尾根状に延びた丘陵が急激に落ち込み、鞍部状の平坦地（標高165～197m）を形成している一帯であり、現況はほとんどが畑地として利用されている。

削平予定地区を対象に3箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、1箇所から縄文時代のものと思われる黒曜石の砕片数点を検出した。土層の堆積状況は良好で、旧石器時代の遺物包含層の存在も想定され、地形等を勘案すると丘陵のほぼ全域が旧石器時代・縄文時代の遺跡と考えられるため"唐ノ川境遺跡"として周知化を行った。

中里工区（唐津市湊町中里：確認調査対象面積9.3ha）は東松浦半島の先端部、唐津市と鎮西町との市町境に近接する形で形成されている、上部が平坦な台地上（標高80～120m）であり、現在は水田、及び畑地として利用されている。

調査予定地区には縄文時代の遺物散布地である神ノ脇Ⅰ遺跡、神ノ脇Ⅱ遺跡が存在しており、近接する平坦な鞍部を持つ丘陵部には前田Ⅰ遺跡、前田Ⅱ遺跡、上場Ⅰ遺跡、上場Ⅱ遺跡等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地が所在している（中島直幸 1982 『上場遺跡』

唐津市文化財調査報告書第４集　唐津市教育委員会）。

掘削予定地区を対象に、旧地形の残存状態が良好な地点を選んで15箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、水田造成時の整地層から黒曜石片、サヌカイト片を検出したに止まった。

遺跡の分布が確認された唐ノ川工区・境地区の取り扱いについて個別協議を行った結果、掘削が避けられない部分390㎡に関して本調査を実施することとなった。

(2)　鎮西町（早田工区・旱ケ田工区）

早田工区（東松浦郡鎮西町大字打上字渕頭外：確認調査対象面積3.5ha）は渕山川に面する丘陵の平坦面、裾部、及び丘陵に挟まれた狭隘な谷部（標高75～120m）であり、現況は水田である。

調査予定地に近接して藤原遺跡、尾箱遺跡、東渕山Ⅲ遺跡等の旧石器時代・縄文時代の遺物散布地が点在しているが、詳細については不明である。

削平予定部分を対象に11箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、１箇所の水田床土から黒曜石製の剥片を検出したのみである。

旱ケ田工区（16号ファーム・ポンド；鎮西町大字石室字旱ケ田：確認調査対象面積0.3ha）は潟川西岸部に立地する尾根状丘陵部の東端部一帯（標高145～146m）で、現況は原野、山林となっている。

調査対象地区周辺の平坦な台地上には丸林遺跡、坂遺跡、宿Ⅰ遺跡等旧石器時代から縄文時代に至る遺物散布地が点在しているが、従来調査はほとんど行われていない地域である。

掘削予定地を中心に６箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施した結果、遺構の存在については確認できなかったものの、２箇所で黒曜石製のスクレイパー、剥片等を検出した。原野部分については旧形状が畑地であり、開墾時に削平が進行していて遺物包含層の存在は望めないが、山林部分については旧地形が比較的良好に保たれている。

遺跡の広がりを確認した300㎡について個別協議を行ったが、工法上の変更が困難なため全面について本調査を実施することとなった。

(3)　玄海町（牟形地区　図31）

牟形地区（東松浦郡玄海町大字牟形字稗田：確認調査対象面積12.0ha）は仮屋湾を西に望む平坦な丘陵上の、三枚溜の周囲部一帯の谷合い地（標高180～200m）にあたり、現況は水田、畑地となっている。

調査対象地区周辺の台地上と、その縁辺部には赤松Ｂ遺跡、小久保遺跡、稗田Ⅰ遺跡、稗田Ⅱ遺跡、牧ノ地Ⅰ遺跡、牧ノ地Ⅱ遺跡等の、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地が点在している。

掘削予定地を対象にして64箇所の試掘溝を設定し、確認調査を実施したところ、５地点で旧

図31　玄海町・牟形地区試掘溝設定図

石器時代から縄文時代に至るまでの遺物包含層を確認した。更に周辺の地形から勘案すると、三枚溜の周囲はすべて遺跡の分布範囲に含まれると考えられる。

遺跡の広がりが確認された6,100㎡の部分の取り扱いについて個別協議を重ねた結果、設計変更が困難であるため、全域が本調査の対象範囲となった。

(4) 肥前町（鶴牧～八斗蒔～万賀里川の各地区・新木場地区・入野地区・赤坂地区）

鶴牧～八斗蒔～万賀里川地区（幹線水路及びファーム・ポンド；東松浦郡肥前町大字鶴牧、大字新木場、大字万賀里川：確認調査対象面積0.3ha）は通称入野半島の北端部、京泊から半島の付け根部分に位置する大浦に至るまでの長距離に及ぶ納所幹線水路建設予定地区であり、このうち、旧地形が比較的良好な状態で残存している鶴牧、八斗蒔、万賀里川の各地区において確認調査を実施した。

鶴牧地区は仮屋湾内に瘤状に突出しながら海に向かって落ち込む台地の、平坦な上面部（標高100～110m）にあたり、現在は水田として利用されている。

調査予定地区一帯は旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地である山頭Ⅰ遺跡の分布範囲に含まれ、周辺近接地にも山頭Ⅱ遺跡、吹上Ⅰ遺跡、西七ツ江遺跡といった同時代の遺物散布地が点在している（松尾吉高　1984　『七ツ江遺跡』　肥前町文化財調査報告書第４集　肥前町教育委員会）。

確認調査は遺物包含層の存在が想定される地区を対象に、２箇所の試掘溝を設定して行ったが、表土下で黒曜石片が１点検出された以外は、遺構、及び遺物包含層の存在は確認できなかった。

八斗蒔地区は仮屋湾を北西に見渡せる丘陵上（標高170～180m）に位置し、国道204号線と平行して走る幹線水路が八斗蒔溜の北側に達するあたり一帯である。

当該地は縄文時代の遺物散布地である八斗蒔Ⅹ遺跡の分布範囲内であり、近接地にも同時期の遺物散布地である八斗蒔Ⅱ遺跡、八斗蒔Ⅵ遺跡、樫山遺跡等が点在している。

確認調査は遺物包含層の存在が予想される地点を対象に、１箇所の試掘溝を設定して行ったが、表土下で流れ込みと思われる黒曜石片１点が出土したのみで、遺構、及び遺物包含層の存在は確認できなかった。

万賀里川地区は八斗蒔地区の東側に隣接する地域で、大浦溜北側の丘陵上（標高200～205m）に位置し、現況は畑地である。

調査予定地区内には旧石器時代の遺物散布地である甚手田Ⅱ遺跡が所在しており、隣接地についても、同時期の遺物散布地として知られる甚手田Ⅰ遺跡、甚手田Ⅲ遺跡、甚手田Ⅵ遺跡等が点在している（松尾吉高　1983　『川原田遺跡』　肥前町文化財調査報告書第３集　肥前町教育委員会）。

水路掘削予定地とファーム・ポンド建設予定地を対象に７箇所の試掘溝を設定して確認調査

を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

新木場地区（幹線水路及びファーム・ポンド；肥前町大字新木場字東、字放四郎川：確認調査対象面積5.0ha）は東松浦半島の南西部に位置し、田野新田川によって開析された谷部北側の丘陵上部（標高120～130m）にあたる。

調査予定地区内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、周辺部には佛田遺跡、古田遺跡、塔ノ木溜西Ⅰ遺跡、塔ノ木溜西Ⅱ遺跡等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地が点在している。

水路掘削予定地、及びファーム・ポンド建設予定地を対象に、8箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したところ、丘陵頂部の平坦地に設けた3箇所でナイフ形石器、剥片等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺物を主体とする遺物包含層を検出した。地形等から勘案すれば集落跡が存在する可能性もある。なお遺跡の分布する範囲については"新木場東遺跡"として周知化を図った。

個別協議の結果、遺跡の存在を確認した地点については、位置変更等の工法上の保護措置を取ることが困難なため、その全面が本調査対象地区となった。

入野地区（肥前町大字入野字殿木場、字尾山、字田の峰：確認調査対象面積5.0ha）は仮屋湾と日比水道に挟まれた入野半島の基部付近の平坦な丘陵上面（標高160m）にあたり、水田、及び畑地として利用されている。

調査対象地区の周辺には尾山遺跡、磯道遺跡、田尾遺跡といった旧石器時代から縄文時代にかけての遺物散布地が密集しており、その状況は上場台地上に広範囲にわたって存在している遺跡群のモデルケースともなっている（堀川義英　1981『上場の文化財（Ⅰ）』佐賀県文化財調査報告書第62集　佐賀県教育委員会、堀川義英　1981『田尾遺跡群磯道遺跡』　肥前町文化財調査報告書第1集　肥前町教育委員会、堀川義英　1982　『田尾遺跡群田尾遺跡・磯道遺跡（その2）』　肥前町文化財調査報告書第2集　肥前町教育委員会）。

水路掘削予定部分、及びファーム・ポンド建設予定地部分を対象に、11箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したところ、旧地形が比較的良好な状態で残存している丘陵の頂部に設けた4箇所でナイフ形石器、剥片等の遺物を含む包含層を確認したほか、周辺においても微細な剥離痕を持つ剥片や縄文土器片を表採した。これにより新たに発見した遺跡の分布範囲を"殿木場遺跡"として周知化した。

遺跡の存在が確認された1,700㎡の部分の取り扱いに関し、水路の掘削ルートの変更等を中心に据えた個別協議を行ったが、設計変更による回避が事実上困難なため、全域を本調査対象地区とすることに決した。

赤坂地区（幹線水路；肥前町大字赤坂：確認調査対象面積0.2ha）は唐津市との境界に位置する。この地区は近世ないし近代になってから水田造営を目的として埋め込まれた谷部、及び

丘陵北斜面部分（標高190～200m）で、現在は畑地として利用されている。工事区の上では上倉幹線水路建設計画地域に属し、唐津市の唐ノ川工区・殿切地区に市町境を越えて連続する部分である。

調査対象地区、並びにその周辺地域においては、従来遺跡の存在がほとんど報告されておらず、調査例も余りない。

水路建設による削平予定地域を対象に、旧地形の形状を良好に止めている地点を選んで、3箇所の試掘溝を設定して確認調査を実施したが、遺構、及び遺物の存在を確認することはできなかった。

6．筑後川下流用水事業に係る調査

水資源開発公団（筑後川下流用水建設所）による筑後川下流用水事業（右岸域）に係る文化財の確認調査は、佐賀東部導水路の北茂安西部工区（北茂安町）と、鶴工区（神埼町）について実施した。

北茂安西部工区（三養基郡北茂安町大字中津隈：確認調査対象面積1.4ha）は筑後川の支流である寒水川と切通川に挟まれた低平な水田部分（標高６ｍ）であり、農業基盤整備事業の実施予定地域の一つである北茂安中部工区の西側に隣接している。

調査対象地区の北方に位置する集落部には干飯遺跡が立地しており、県営圃場整備事業に伴って弥生時代から平安時代にかけての集落跡の存在が確認され、調査が行われている（天本洋一他　1988　『中津隈干飯遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第３集　北茂安町教育委員会）。

確認調査は延長1,600m、幅8.5mの水路掘削予定地に10箇所の試掘溝を設定して行ったが、遺構・遺物とも検出できなかった。

鶴工区（神埼郡神埼町大字鶴：確認調査対象面積0.3ha）は、城原川の氾濫によってその東岸部に形成された自然堤防上（標高８ｍ）に位置しており、一帯は現在水田として利用されている。

調査対象地区には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である馬郡遺跡が隣接しており、農業基盤整備事業に関連して一部本調査が行われている（八尋実他　1981　『馬郡遺跡』　神埼町文化財調査報告書第７集　神埼町教育委員会）。また城原川を挟んだ対岸には、弥生時代後期の集落跡である川寄吉原遺跡や、弥生時代前期から中期にかけての集落跡、及び墳墓群である利田柳遺跡、四本黒木遺跡が立地しており、筑後川下流用水事業（佐賀東部導水路）と県営圃場整備事業に伴って発掘調査が実施されている（森田孝志他　1985　『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書１』　佐賀県文化財調査報告書第80集、天本洋一　1981　『川寄吉原遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第61集　佐賀県教育委員会、岩永政博他　1980　『利田柳Ⅲ区』　神埼町文化財調査報告書　神埼町教育委員会、八尋実　1980　『四本黒木遺跡』　神埼町文化財調査報告書第６集　神埼町教育委員会）。

確認調査は延長330m、幅10mの水路掘削予定地に、７箇所の試掘溝を設定して行ったが、表土下は城原川の氾濫に因ると思われる砂層が厚く堆積しており、遺構・遺物とも検出できなかった。

Ⅳ. 昭和63年度発掘調査の概要

《佐賀東部地区における調査》

1．東福寺遺跡（略号：ＴＯＦ）

遺跡の所在地

三養基郡基山町大字園部字東福寺

調査主体者

基山町教育委員会

調査期間

昭和63年９月～10月

調査面積

450㎡

図32　東福寺遺跡周辺地形図（１：25,000）

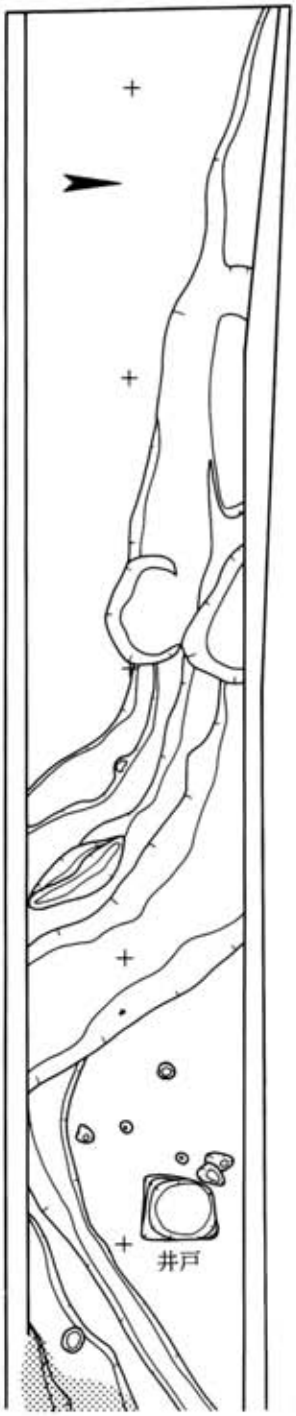
遺跡の概要

東福寺遺跡は、権現山から杓子ケ峰へ延びる丘陵と、契山から東へ延びる丘陵に挟まれた園部谷に位置する。園部谷は、山下川と秋光川によって造られた扇状地で中央付近に独立丘陵の中隈山がある。中隈山には、中世の山城の園部城、古墳時代の墳墓の中隈山遺跡がある。南側の丘陵上には、基部に古墳時代後期の杓子ケ峰古墳群・馬場古墳群・鎌浦古墳群・亀ノ甲古墳群が連なっており、先端部には、金丸遺跡・三ケ敷遺跡などの弥生から平安時代にかけての集落遺跡がある。また、弥生時代前期の甕棺墓の金丸遺跡、弥生時代中期から後期の久保田遺跡が立地している。

調査は、中隈山の南側に接した水田の排水路約450㎡を実施した。調査の結果検出した遺構は、用水路状溝１条・小溝２条・井戸１基・小穴群等である。用水路状溝は、東西方向に延びており、溝の中央付近の北側の側面には、拳大以下の円礫が意図的に敷かれている。また円礫が敷かれていた端に杭が９本認められる。さらに杭列のある所の溝内から、意図的に組み合せられた木材が確認されている。

遺物は、土師器・須恵器・石器類・土製品・木製品などが用水路状溝内より出土しているが、そのほとんどが古墳時代後期に属するものである。木製品の中には、機織りの際に用いられたと考えられるものもある。

今回の調査成果を概略したが、調査範囲が限られていたため明らかにできなかった事項が多い。今後、周辺地域の調査、および、用水施設の調査例の増加とともに本遺跡の内容を考察したい。



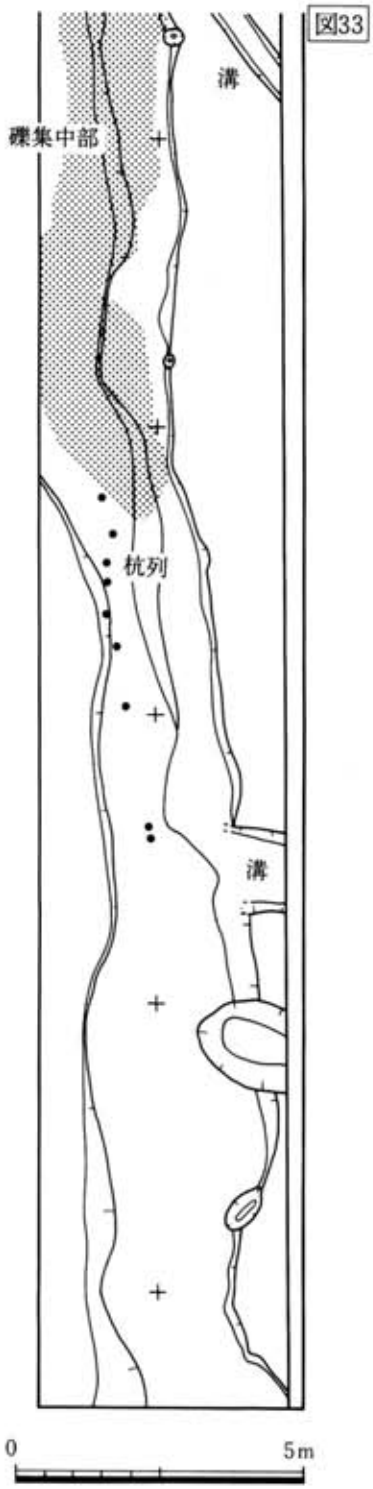


図33　東福寺遺跡遺構配置図

2．原古賀三本谷遺跡（略号：ＨＳＤ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字三本谷

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

昭和63年５月～平成元年２月

調査面積

8,500㎡

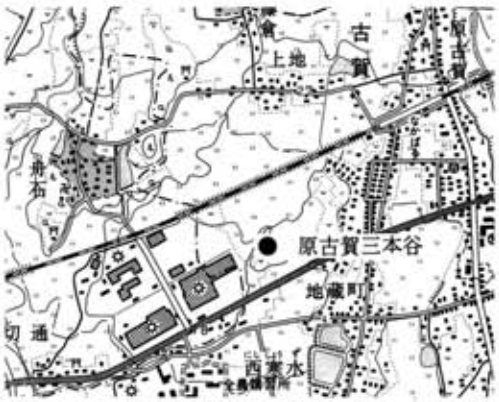


図34　原古賀三本谷遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

原古賀三本谷遺跡は、切通川の支流東岸標高約20mの地点に位置する。遺跡の周辺には上峰村船石遺跡、二塚山遺跡、中原町天神遺跡等の著名な遺跡が存在する。

遺構は、竪穴式住居跡60軒、土壙約300基、小穴多数、溝３条、環濠遺構２基、周溝状遺構６基がある。

調査区西側の環濠遺構は、東西45m×南北60mの二重の環濠である。内側の環濠の西側には10m×３mの張出し部があり、前面の土壙から鏡片が出土している。溝中からは、多量の土器が出土しており、時期は弥生時代後半から古墳時代初頭と見られる。南側の環濠遺構は、全形の¼程を調査した。時期は弥生時代終末期から古墳時代前半とみられる。

住居跡は、弥生時代中期から弥生時代終末のものまであり、土壙は弥生時代前期から終末期と奈良時代のものがある。

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石器、鉄器、鐸型土製品、鏡片、土弾、紡錘車、炭化米がある。

弥生土器の中でも、南側の環濠遺構より出土した瀬戸内式器台は、瀬戸内地方との関係を窺わせ興味深い。

また鐸型土製品は全体の¼程の破片で、弥生時代中期後半の土器と共伴した。身の断面は菱形をなし、側縁に型持孔を模したと思われる穴の痕跡がある。

以上のように、原古賀三本谷遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落のあり方を明らかにすることができた。また環濠遺構や瀬戸内式器台等の貴重な発見もあり、今後の研究において重要な位置を占める遺跡である。

1．原古賀三本谷遺跡全景
2．ＳＤ001 土器出土状況
3．ＳＤ107 器台出土状況

3．原古賀四本谷遺跡（略号：ＨＹＤ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字四本谷

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成元年１月

調査面積

350㎡

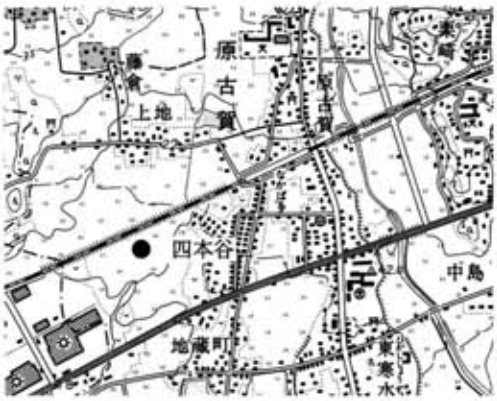


図36　原古賀四本谷遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

原古賀四本谷遺跡は、切通川によって形成された沖積平野上、標高約22mの地点に位置する。原古賀三本谷遺跡の約80m北側である。本遺跡は、弥生時代中期～後期の集落跡で、溝２条、土壙８基、小穴多数を検出した。ＳＤ005は、東西に伸びる溝で、多量の土器が出土した。

本遺跡は、調査面積がせまいものの、原古賀遺跡群の一端を窺い知ることができたという点において重要である。

1.原古賀四本谷遺跡全景

4．原古賀五本谷遺跡（略号：ＨＧＤ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字五本谷

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

昭和63年９月～平成元年１月

調査面積

5,600㎡

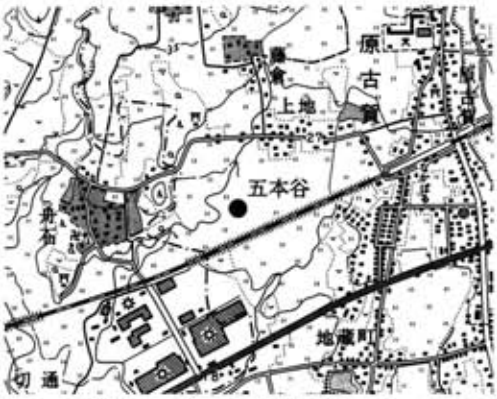


図38　原古賀五本谷遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

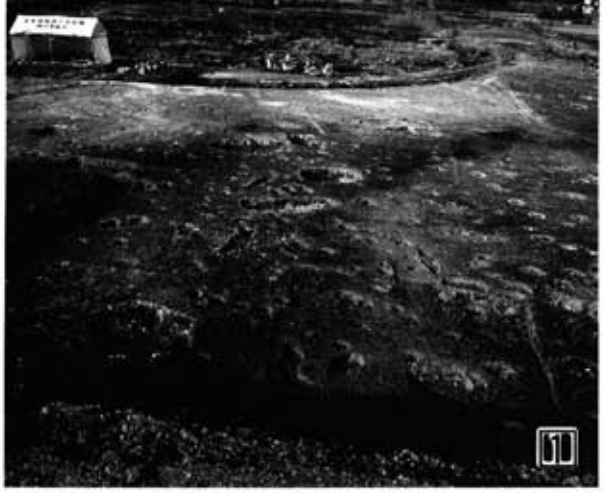
原古賀五本谷遺跡は、原古賀四本谷遺跡の北西約200ｍの地点に位置する。本遺跡は弥生時代前期～後期及び古墳時代後期～奈良時代にかけての複合遺跡で、検出された遺構は、竪穴住居跡20軒、土器棺墓２基、土壙墓１基、土壙65基、掘立柱建物８軒、柵列２条、溝３条などである。竪穴住居跡は弥生時代中期～後期、６世紀後半、７世紀前半、８世紀代のものがある。

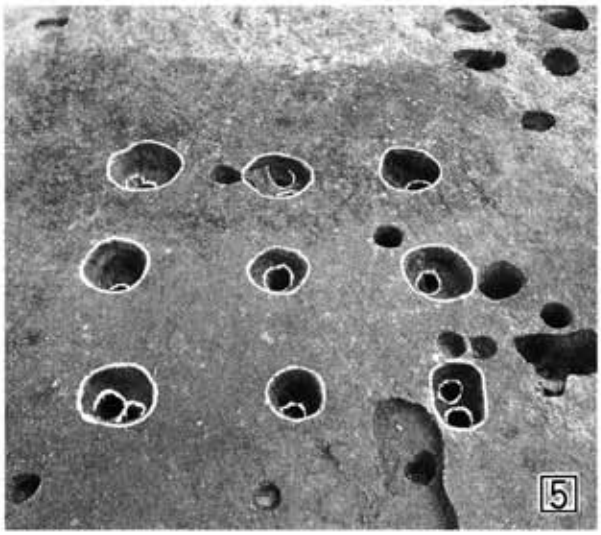
土器棺墓は主軸をほぼ東西にとる。成人棺と小児棺と思われ、時期は須玖式である。東側にほぼ並行して存在する土壙墓も同時期であろう。

土壙には、土器溜り、土壙墓の可能性があるもの、製鉄関連遺構の可能性があるもの、性格不明のものがある。製鉄に関連する可能性がある土壙からはスラッグ、焼土塊、ふいご羽口が出土しているが、その具体的性格、機能は不明である。

掘立柱建物には、１間×２間が３棟、１間×２間以上が１棟、２間×２間が２棟、３間×４間以上が２棟あり、時期はおよそ８世紀代と思われる。

本遺跡は、原古賀遺跡群の中では弥生時代の北端、古墳時代以降の西端の位置に当たり、中原町における遺跡の時期的変遷をさぐる上で重要である。





1．原古賀五本谷遺跡全景（南から）
2．全景（東から）
3．ＳＨ032
4．ＳＫ072
5．ＳＢ018
6．ＳＢ069

5．中野城跡（略号：ＮＫＮ）

遺跡の所在地

三養基郡北茂安町大字江口字中野

調査主体者

北茂安町教育委員会

調査期間

昭和63年８月

調査面積

600㎡

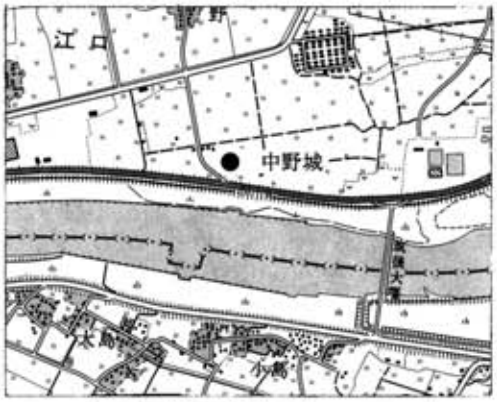


図40　中野城跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

中野城跡は、北茂安町大字江口字中野に所在する、中世の城跡である。当該地は、脊振山系から派生した段丘の末端から、南に向って広がる平野が、筑後川によって遮断される標高４ｍ～５ｍの低平な水田地帯に、小山状に残る城跡である。

調査は、城跡の東側に接して走る水路掘削予定地に対して行なった。調査の結果、溝状遺構２、土壙２が検出された。

土壙はいずれも、長軸１ｍ程度、短軸0.8ｍ程度で、深さは、検出面より約0.4ｍを測る。出土遺物はなく、時期、性格等は不明である。

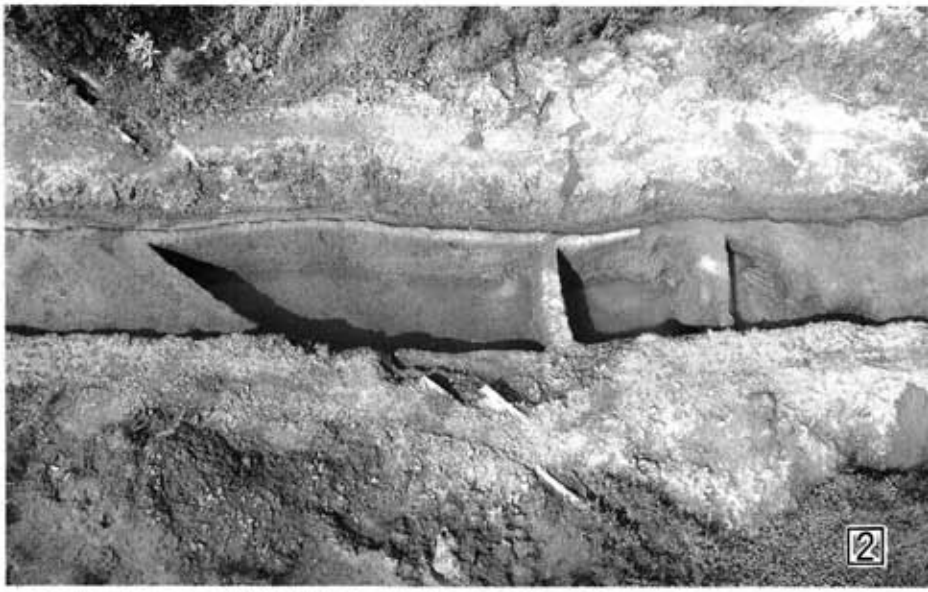
ＳＤ－５溝は、調査区を東西に横断する形で検出された。幅13ｍ、深さは、検出面から、約1.0ｍを測る。北側に２段のテラスをもち、底部へ至る。埋土は、大別して、茶褐色粘質土、茶褐色砂質土の２種類である。底部には、鉄分沈澱による茶褐色砂質土層が検出された。

出土遺物は、輸入陶磁器片、土師器片、国産陶器片等で、時期幅があり、比較的長期にわたって、堆積したものと思われる。

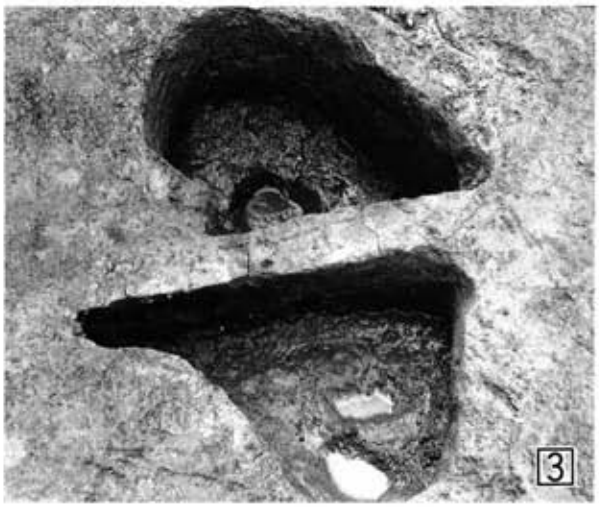
明治22年作成の字図を観ると、城跡の周囲には、クリークが点在している。今回、検出したＳＤ－５を含め、これらが周溝として機能していた可能性が有る。

以上のように、今回の調査は、検出した遺構、遺物ともに少なく、検出された遺構と中野城との関係を、明確にはし難い。しかしながら、出土した輸入陶磁器等に関して、今後、検討を重ねていく必要がある。また、町内には当城跡を含め、５つの城跡（館跡）が存在するが、中野城跡が、筑後川河畔の低平地に立地する他は、段丘末端部に位置している。

この点にも注目しなければなるまい。



1．中野城跡
　調査区全景（北から）
2．ＳＤ－５
3．ＳＫ－１
4．ＳＫ－２



6．船石遺跡８・９・10区（略号：ＦＮＩ－Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ）

遺跡の所在地

三養基郡上峰村大字堤字二本松他

調査主体者

上峰村教育委員会

調査期間

昭和63年６月～12月

調査面積

5,000㎡

図42　船石遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

船石遺跡は、佐賀平野東部、脊振山地の鎮西山（202.1m）に源をもつ切通川東岸の河岸段丘上（標高14～25m）に位置しており、弥生時代がその主体である。分布範囲は、現在船石集落が位置する中位段丘面と、これから南に延び、切通集落北側で沖積平野に没する低位段丘面にまたがり、全体では10ha以上の広がりをもつものと推定される。

本遺跡の周辺には、かなりの密度で弥生時代の遺跡が分布しており、これらは、船石遺跡群としての有機的関連を持つと考えられる。

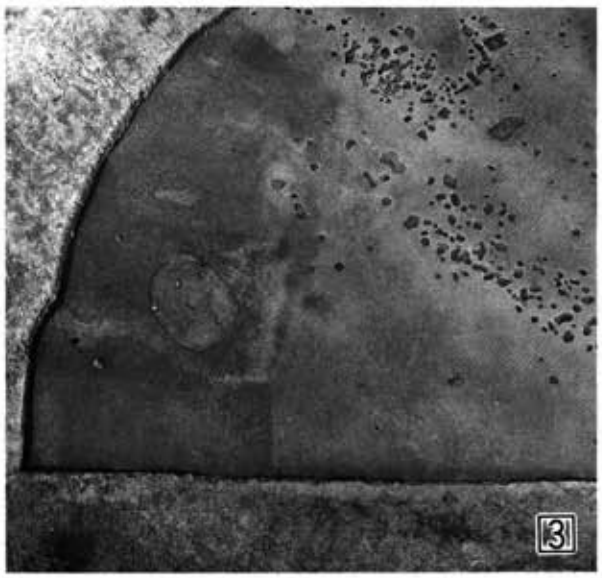
今回の調査は、便宜上８区、９・10区の２箇所、３区に分けて調査を行った。

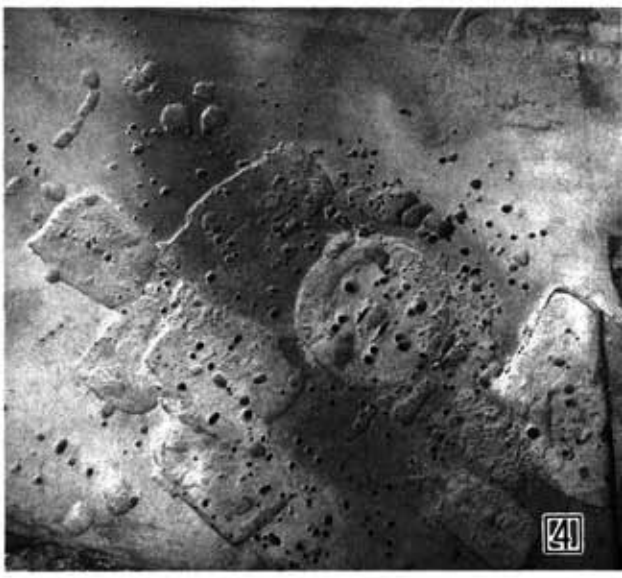
８区は舟石川東岸の中原町との境界付近に位置する。検出された遺構は、弥生時代中期の住居跡２軒・土壙４基、奈良時代後期の土壙１基、時期不明の掘立柱建物跡、柵列と考えられる柱穴群１条などである。遺物は、各遺構より弥生土器片、須恵器片などが出土している。

９・10区は、船石集落の西に隣接する地域で、調査区は南北に細長く、西方の切通川へ向って緩やかに傾斜している。検出された遺構は、縄文時代後期の住居跡１軒・土壙５基・埋甕１基、弥生時代中期の住居跡17軒・土壙10数基等である。弥生時代の住居跡群は調査区南部に集中しており、調査区北部には見られないことから、本調査区付近が弥生時代の船石遺跡の北限であったことが想定できる。

また、遺物は、縄文土器片、弥生土器片や各種の石器類が出土したほか、舶載青磁碗片等が出土している。とくに縄文時代後期の住居跡からは、土器片とともに石棒・磨石・石皿がセットで出土している。

今回の船石遺跡の調査では、弥生時代の集落跡（船石遺跡）の北限を確認することができた。また、縄文時代の遺構・遺物の内容も重要であり、佐賀県の東部地区における縄文研究に重要な資料を提示したといえる。





1．船石遺跡８区全景
2．９、10区全景
3．８区（弥生）住居跡
4．９区（弥生）住居跡群
5．10区（縄文後期）住居跡
6．作業風景

7．西島二本杉遺跡（略号：ＮＪＮ）

遺跡の所在地

三養基郡三根町大字西島字二本杉

調査主体者

三根町教育委員会

調査期間

平成元年１月～２月

調査面積

600㎡

図44　西島二本杉遺跡周辺地形図（1:25,000）

遺跡の概要

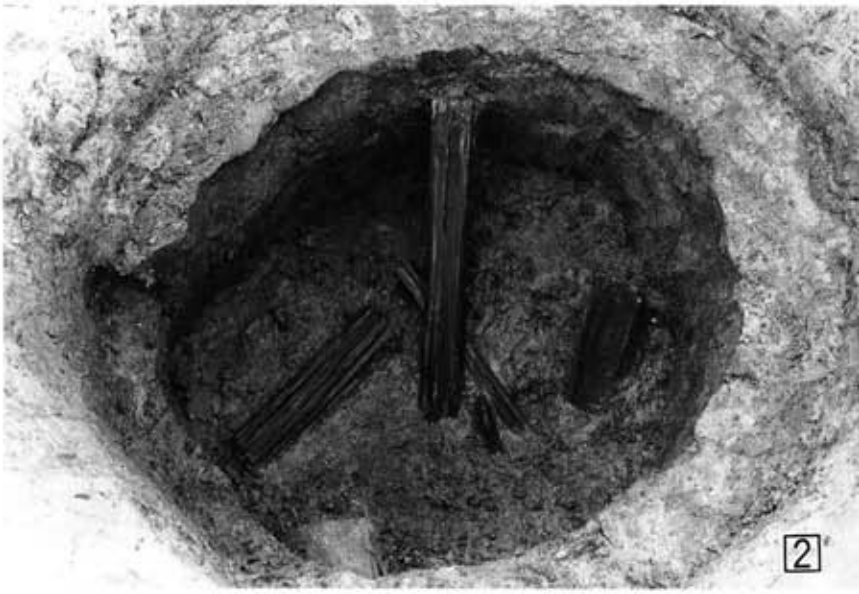
西島二本杉遺跡は、三養基郡三根町大字西島字二本杉に所在する。筑後川水系寒水川右岸の海抜４ｍ前後の低平な沖積平野上に立地し、周辺には、遺跡東方に本分遺跡[註1]・本分三本柳遺跡[註2]・南方に天建寺土井内遺跡[註3]などがみられる。調査は圃場整備に伴う水路掘削部分の約600㎡を対象に実施したが、調査区が、クリークで分断されたため、便宜上南側を第１地点、北側を第２地点と称した。

遺跡は、中世（13世紀～15世紀）を主体とする時期に形成されており、当該期の遺構は、溝３条・井戸跡５基・土壙数基・土壙墓数基・柵列（？）等である。溝跡は東西方向と南北方向にほぼ直交して、調査区外へと逃げている。井戸跡からは多量の板材・木片のほかに土師器・瓦器などが出土している。また土壙墓（ＳＰ207）には木棺の痕跡が残っている。墓壙の平面プランはほぼ正方形で、２本の横木を渡した上に平板を載せ、その上に棺を置くという構造になっており、町内の本分遺跡、天建寺土井内遺跡で検出されているものと同様な造りをなしている。柵列は南北方向に伸びたピット６基からなり、柱根の残るものもある。これもまた調査区外へと続くものと考えられる。遺物は、土師器細片のみであるため時期は明確でない。なお、第１地点と第２地点では遺構の密度に明らかな差異が見られる。溝・井戸等のおもだった中世の遺構は特に南側に集中しており、逆に北側には土壙墓の集中が見られる。中世の集落は第１地点以南に向けて形成されていたものであろうか。なお以上のほかに、青磁、木柱（ホゾ穴のある梁若しくは桁）・敷居板等の建築材、漆器片、金箔、硯、鉄釘、鉄器片、スラグ等の遺物を検出した。このように、この地における中世集落の構造と性格とを解明する上でも貴重な手掛かりが得られたと言えよう。周辺における今後の詳細な調査が望まれる。

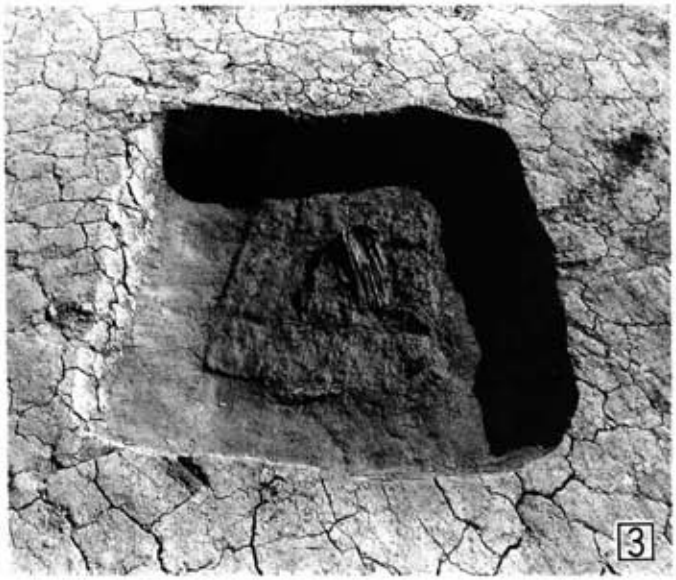
註１　田平徳栄編　『本分遺跡』　三根町文化財報告書第４集　1987

註２　天本洋一編　『本分三本柳遺跡』　三根町文化財報告書第３集　1986

註３　天本洋一編　『天建寺土井内遺跡』　三根町文化財報告書第２集　1985



1．西島二本杉遺跡
　調査区全景（北から）
2．ＳＥ125 敷居板出土状況
3．ＳＰ207 土壙墓
4．ＳＡ213 柵列



8．大曲二ノ坪遺跡（略号：OMN）
大曲鶴ノ森遺跡（略号：OMT）

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字大曲字二ノ坪・鶴ノ森

調査主体者

東脊振村教育委員会

調査期間

昭和63年11月～平成元年２月

調査面積

3,200㎡

図46　大曲二ノ坪遺跡（A）・大曲鶴ノ森遺跡（B）周辺地形図　（1：25,000）

遺跡の概要

東脊振村南部は佐賀県の東部で背振山系の南麓に位置し、高中位段丘が南北に細長く広がる丘陵地帯である。大曲二ノ坪遺跡・大曲鶴ノ森遺跡はこれらの段丘に挟まれた、田手川の東岸に広がる標高12～13mに立地する中近世の生産遺跡であり、本来２遺跡は同一の遺跡と考えられる。周辺には弥生時代の三津永田遺跡・二塚山遺跡群・吉野ヶ里遺跡群、古代末から近世の山岳仏教遺跡である霊仙寺跡などが存在している。

遺跡周辺は現況の水田に条里らしい痕跡が航空写真からは認められ、また、古代官道の推定地でもあった。確認調査時には、数枚の水田層と見られる土の堆積が観察することができた。

遺跡での土の堆積は、表土（耕作土）下の現床土より下には５～10cmの間隔で明赤褐色砂質土（旧床土？）が２～３cmの幅で堆積している。この状況が薄いところで20～30cm、厚いところでは50cmほどで、その下は50cmほどの粗砂層があり、そのまた下には明青灰褐色のシルト質粘土層が厚く堆積している。

明赤褐色砂質土の上面で、浅い溝状の遺構がかなり広範囲に広がっているのが観察できた。この浅い溝跡は北北西の方向に伸び、幅と間隔が10～20cm、深さ１～２cmで、７～８mでこの溝跡に直交した溝跡が数条ある。主に長く伸びる溝跡の形状は不整形であり、畝状遺構と見られる。この遺構は数枚の層に見られ、活動の継続性が伺われる。

出土遺物としては、弥生土器・黒曜石・サヌカイト・土師器・須恵器・青磁器・白磁器・陶器など多種多様であったが、そのすべてが小破片であり摩耗していた。

遺跡は、その出土遺物と遺構の形状から中世末か近世の水田跡もしくは畑地跡ではないかと考えられるが、この種の遺構の検出例が少なく十分な比較検討ができないため今後の調査例の増加により再検討する必要がある。なお、古代官道は確認できなかった。

図47

1．大曲二ノ坪遺跡
調査区全景
（南南西から）
2．土層堆積状況
（南西から）
3．畝状遺構
上面検出状況
（東から）

9．田手一本杉遺跡（略号：ＴＤＳ）
田手二本杉遺跡（略号：ＴＮＳ）

遺跡の所在地

神埼郡三田川町大字田手字一本杉、二本杉

調査主体者

三田川町教育委員会

調査期間

昭和63年10月～12月

調査面積

2,400㎡

図48　田手一本杉遺跡（A）・田手二本杉遺跡（B）
周辺地形図（1：25,000）

遺跡の概要

三田川町は佐賀県の東部に位置する面積10.85㎢の南北に細長い町で、その西部と東部を田手川と井柳川の二河川が南流する。これらは、脊振山系に源を発し、有明海に注いでおり、上流では扇状地、中下流では、肥沃な沖積平野を形成している。

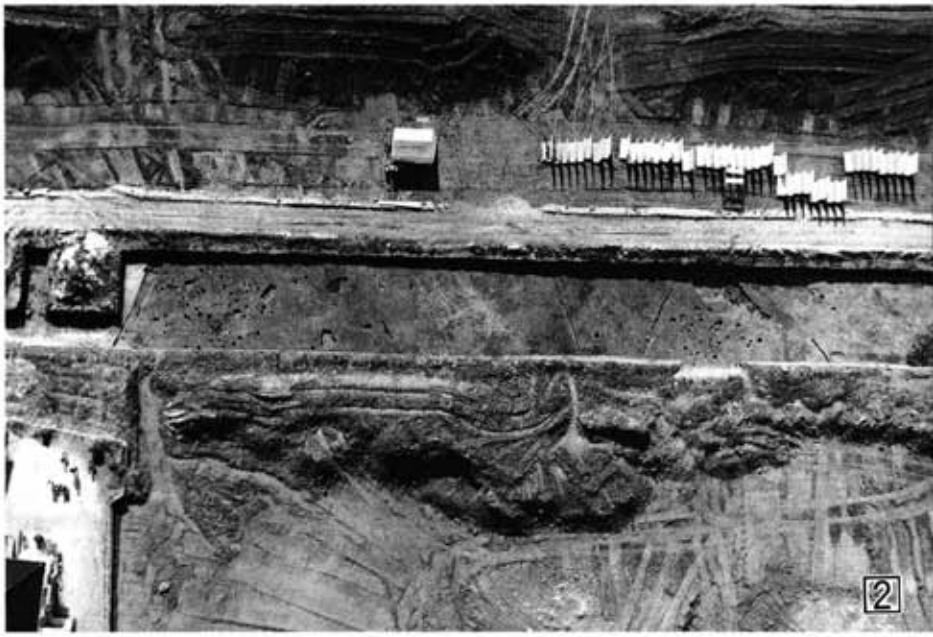
田手一本杉・田手二本杉遺跡のある田手地区は三田川町と神埼町とを画する田手川右岸の標高12～13mの水田地帯である。この一帯には、弥生時代から中世に至る複合遺跡が多く見受けられる。北側の東脊振村との境界付近から殿ノ隈遺跡・田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡・杉籠遺跡・田手遺跡等と、いずれも田手川水系の影響下に立地していたことがうかがえる。

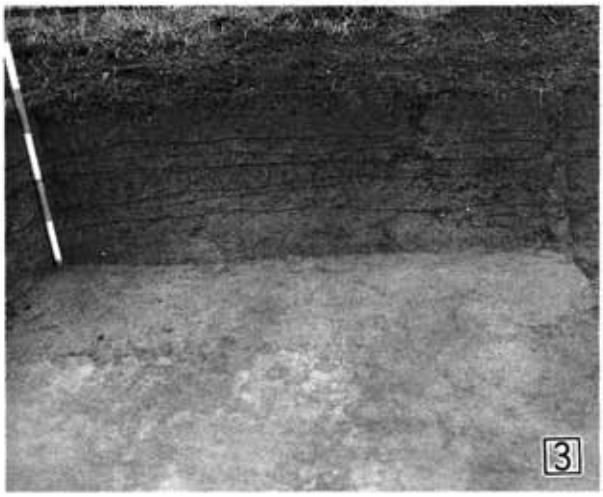
田手一本杉遺跡は、東西100m、南北100mの範囲を有し、弥生時代～中世にかけて営まれていることが判明している。調査区は遺跡の東南端に位置し、東西に細長い形状を呈する。調査の結果、遺構らしきものは検出できなかった。田手二本杉遺跡と同様に田手川の旧河川もしくは氾濫に起因すると考えられる流砂層の堆積が認められる。出土遺物は弥生土器～中・近世の舶載陶磁器まで多岐にわたっている。

田手二本杉遺跡は、以前の確認調査で東西180m、南北200mの範囲を有し、弥生時代～平安時代にかけて営まれていることが判明している。調査区が東西に細長い形状を呈するが、東側部分ではほとんど遺構を検出できず、西側部分で溝・小穴を主体とする遺構を検出することができた。いずれの遺構にも田手川の旧河川もしくは氾濫に起因すると考えられる流砂層の堆積が認められ、プライマリーな状況で遺存するものはほとんどみられない。調査の結果、古墳～中世に至る溝・土壙・小穴群を検出した。主体は多数の小穴群であるが、時期・性格ともに不明なものが多く、位置関係から柱建物の存在も想定し、現地で検討を試みたが明らかにそれと確認できるものはない。出土遺物は弥生土器～舶載陶磁器まで多岐にわたっている。

図19

1.田手一本杉遺跡
（西から）
2.田手二本杉遺跡
遠景
3.田手一本杉遺跡
南壁土層
4.田手二本杉遺跡
ＳＤ07遺物出土状況





10. 志波屋一ノ坪遺跡（略号：ＳＩＴ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字志波屋

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和63年４月～９月

調査面積

3,000㎡

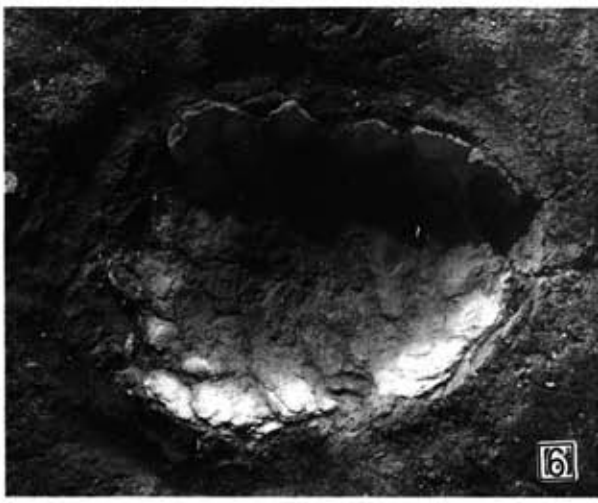
図50　志波屋一ノ坪遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

志波屋一ノ坪遺跡は、神埼町北部の標高約12～13mの低位段丘上に立地する。遺跡の東方には、奈良時代の官衙跡と考えられる中園遺跡・志波屋二ノ坪遺跡などが位置し、奈良時代の道路跡も確認されている。

調査は、水路および貯水堀部分について実施した。主な遺構としては弥生時代前期（甕棺墓２基、竪穴住居跡１基）、弥生時代後期～終末期（竪穴住居跡３基以上、溝跡１条、土壙）、古墳時代前期（竪穴住居跡４基以上、土壙）、奈良時代（掘立柱建物跡７棟以上、井戸跡、土壙）、平安時代の土壙などである。弥生時代前期の遺構は、調査区東端に散在しており、東に広がるものと考えられる。後期～終末の竪穴住居跡は平面方形でベット状遺構をもつ。また南北に弧状に走る溝跡が検出され、集落を区画する。古墳時代の竪穴住居跡は平面方形で調査区中央部に集中する。奈良時代の遺構は２間×２間・２間×３間以上・３間×４間の掘立柱建物跡があり、すべて同一方向に主軸を持ち、調査区北部には総柱の倉庫跡が南北に並ぶなど、規則的な配列を持っている。遺物としては、弥生時代前期～終末の甕・壺・高杯・鉢・器台等のほか鉄器として鎌がある。古墳時代の遺物は、布留式土器が主体を占めている。奈良時代のものとしては、土師器・須恵器の杯・碗・甕等があり、特に「神埼厨」とヘラ描された土器が土壙より集中して出土した。平安時代のものは、土師器・黒色土器の碗・杯等がある。

以上のように、本遺跡は弥生時代から平安時代にかけての集落跡及び墓地跡である。弥生時代に関しては、周辺の遺跡との関連性が認められ、特に溝跡の状況が今後の問題となる。奈良時代の掘立柱建物跡・遺物は東に位置する官衙的な遺跡と同一時期であり、ヘラ描土器の出土は官衙関連施設の可能性があり、注目される。



1．志波屋一ノ坪遺跡調査区全景
2．弥生時代溝跡
3．奈良時代建物跡
4．弥生時代後期竪穴住居跡
5．奈良時代土壙
6．弥生前期甕棺墓

11. 上志波屋七ノ坪遺跡（略号：ＫＳＮ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字志波屋

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和63年５月～平成元年２月

調査面積

11,000㎡

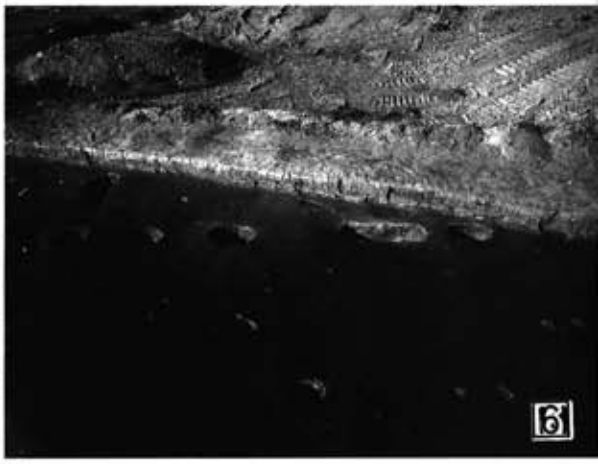
図52 上志波屋七ノ坪遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

上志波屋七ノ坪遺跡は、神埼町北部の標高約13～15mの低位段丘上に立地する。遺跡の東方に位置する中位段丘上には縄文時代から古墳時代にかけての集落跡・墓地跡が密集して分布し、南方には志波屋一ノ坪遺跡が所在する。

調査は、水路部分を対象とし、縄文時代早期の集石４基と包含層、弥生時代前期の竪穴住居跡、奈良時代～中世の竪穴住居跡・溝跡等を検出した。縄文時代の集石遺構は、径約１m程の規模をもち拳大の礫を用いている。弥生時代前期の竪穴住居跡は、平面円形で２本の柱穴をもつ。また、調査区北部には溝跡が集中して確認され、一部の溝は方形に巡っており周溝墓の可能性も考えられる。江戸時代の遺構は現在の竹原集落の北より確認され、溝跡に区画された建物跡が検出された。遺物としては、縄文早期の押型文土器・石鏃・石斧、弥生時代の甕・高杯・壺等のほか、奈良時代以降の土師器・須恵器の杯・小皿・瓦器・陶磁器、江戸時代の陶磁器や土師器・瓦質の鉢・甕、それに石塔の一部などが出土した。

以上のように、本遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての集落跡であり、縄文時代早期の遺構・遺物の確認はこの時代の遺跡の立地・地形などを考える上で重要である。また、江戸時代の遺構を検出した地区は、地元で寺があったと伝えられており、その関連施設ではないかと考えられる。



1．上志波屋七ノ坪遺跡調査区全景（南から）
2．1区全景
3．竪穴住居跡
4．縄文早期集石遺構
5．江戸時代建物跡
6．掘立柱建物跡

12. 横武城跡（略号：ＹＴＪ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字横武・本告牟田

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和63年４月～平成元年２月

調査面積

10,000㎡

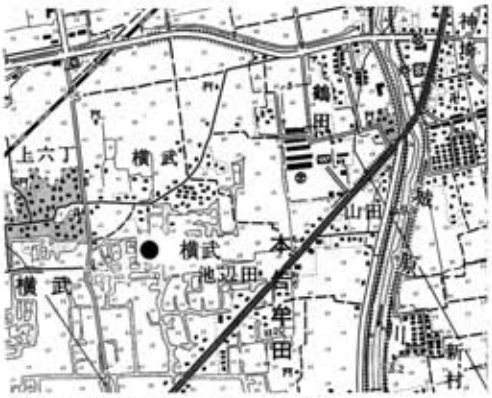


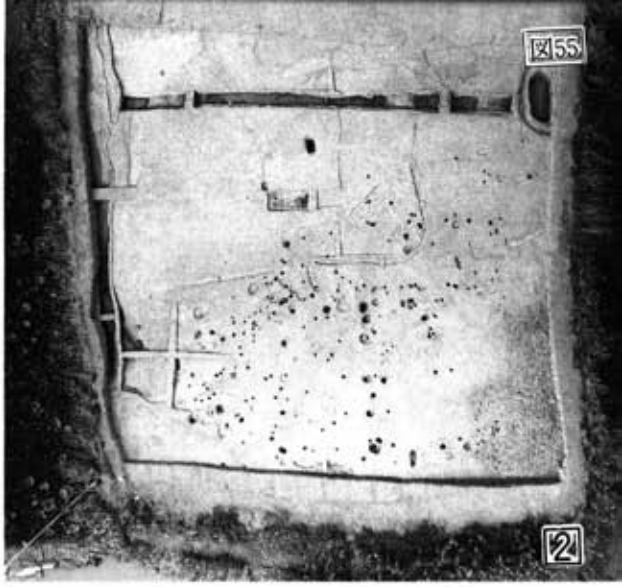
図54　横武城跡周辺地形図（１：25,000）

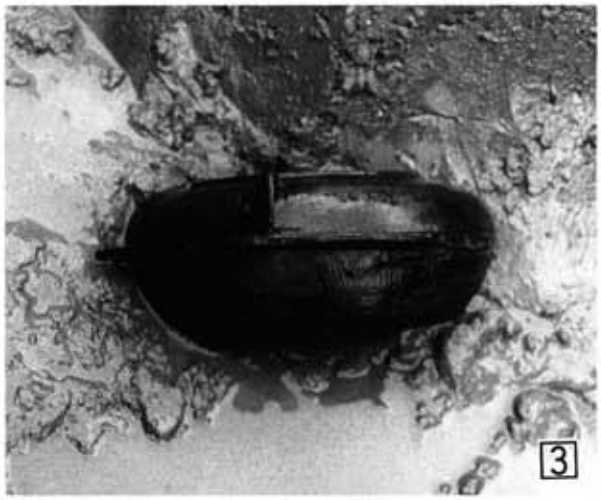
遺跡の概要

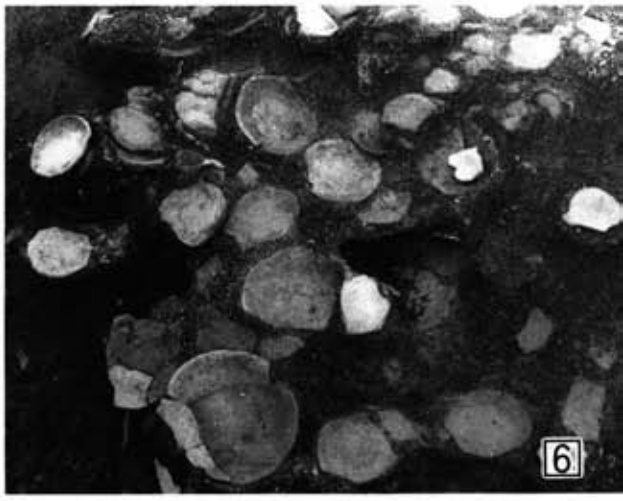
横武城跡は、神埼町南西部、城原川と中地江川に挟まれた標高３～４ｍの低湿水田地帯に立地している。周辺には、堀あるいはクリークと称される水路が縦横に走る。本告牟田遺跡、柳郷城跡、姉川城跡、下六丁遺跡、横武四本黒木遺跡などの中世の館跡、環濠集落跡が多く分布しており、特徴的な集落形態を示す好例として注目されている。近年にこれらの調査が行われ、遺跡の性格、内容等が明らかになりつつある。今回の調査は、工事によって掘削される水路部分と一部削平を受ける面部分の１～11区について実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡６棟、土壙２基、土壙墓１基、井戸跡１基、溝跡54条、道路跡１箇所、旧クリーク跡、祭祀遺構３基などを検出した。掘立柱建物跡は、１間×２間、１間×３間、２間×２間、２間×２間以上、２間×３間、２間×４間で、軸方向は南北方向４棟、東西方向２棟である。このうち11区の建物跡は建て替えによる整地と地鎮祭祀が行なわれ、両者の時期差が明らかになった。土壙墓は、５区より検出し規模0.7ｍ×1.0ｍの長方形の主体部に方形状に周溝が巡っている。溝跡は、横武城跡以前の条里に関連する溝と思われ、南北方向と東西方向に延びている。道路跡は、幅２～３ｍで両側に0.2～0.4ｍの側溝を持ち、調査区中央部を東西方向に延びる。旧クリーク跡は、埋土に自然遺物を多数含み、湿地地形であったことを物語っている。出土遺物には、土師器小皿、杯、鉢、すり鉢、羽釜、甕、陶磁器、木製品などがある。

以上のように横武城跡は、低湿地であった所が条里制の施行により水田となり、その後14世紀～16世紀にクリーク、掘立柱建物跡などの遺構が建設され、環濠集落としての機能を持ったことが明らかになってきた。今後は、中心部の城館跡と周辺部の集落跡との関連を明らかにして行きたいと考えている。







1．横武城跡９区全景（南から）
2．５区全景（南から）
3．９区ＳＤ904 溝遺物出土状況
4．10区ＳＤ1001・ＳＤ1004溝
5．11区掘立柱建物跡
6．11区祭祀遺構遺物出土状況

13. 下西八本松遺跡（略号：ＳＨＭ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字下西字八本松

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和63年５月～平成元年３月

調査面積

2,000㎡

図56 下西八本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

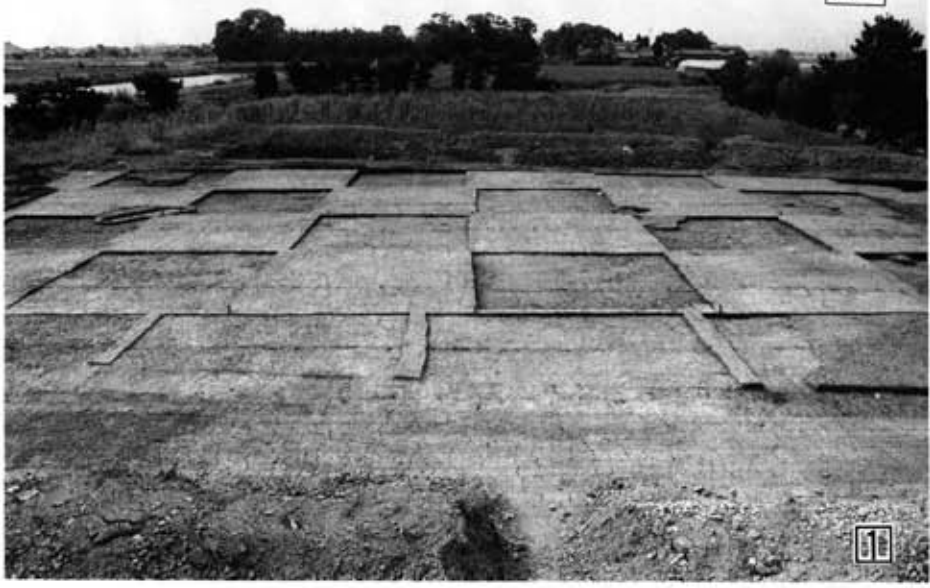
遺跡の概要

下西八本松遺跡は千代田町の南西部、中地江川の東方標高3.2mの沖積平野に立地する。この遺跡は今回の農業基盤整備事業にかかる確認調査により新たに発見された遺跡で、周辺には川崎遺跡、余江西二本松遺跡など、古代から中・近世の遺跡が点在する。今回調査の対象となったのは、掘削を受ける水路部分である。

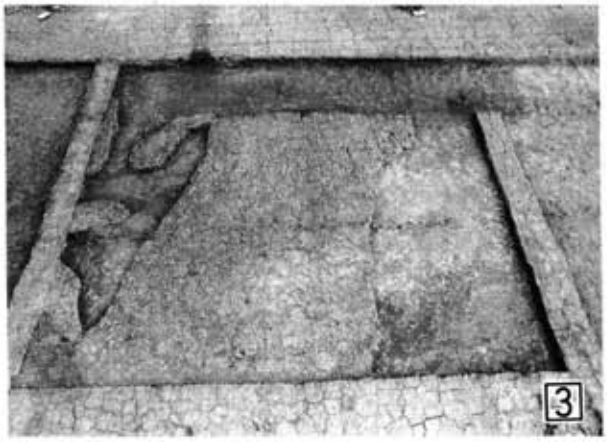
下西八本松遺跡は、便宜的にＡ・Ｂの２地点に分け調査を行い、遺構はＡ地点より溝跡１条と中世の包含層を、Ｂ地点より中世の遺物包含層を検出した。包含層は、大きく２層に分かれ中世の土師器を含む土器の堆積が見られた。包含層の広がりは遺跡全体におよび、また部分的に土器の集中が見られた。しかし、縁辺部は後世に掘られたクリークにより破壊され、その広がりは不明である。

以上報告したように、今回の調査で新たな資料を得ることができた。今後これらの資料をもとに、周辺地域を含めた古代史解明を行っていかなければならない。

図57



1．下西八本松遺跡
　A地区全景（北から）
2．B地区全景（西から）
3．土器集中部近景
4．溝跡検出状況



《佐賀西部地区における調査》

14. 村徳永遺跡（略号：ＭＴＮ－Ａ、Ｂ、Ｃ）

遺跡の所在地

佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

昭和63年９月～11月

調査面積

2,300㎡

図58　村徳永遺跡周辺地形図（1:25,000）

遺跡の概要

本遺跡は、脊振山系南麓に広がる平野部に位置し、標高約８ｍをはかる。今回の調査地は巨勢川中流域から東へ600ｍのところに所在している。

調査の結果、溝28条、土壙65基、土壙墓１基、井戸12基、掘立柱建物跡５棟などを検出した。遺物は土師器・瓦器を中心に出土しており、時期は平安時代から中世にわたっている。

掘立柱建物跡はＢ地区で検出された。建物方位を同じくするものは２棟だけで、この建物は一部で柱穴を共有している。柱間寸法は１間幅でかなりの差があり、単位を求めることはできなかった。建物の先後関係は不明だが、室町時代の所産である溝との切り合い関係や柱穴出土の遺物、埋土の状況から考えると、５棟のうち４棟は室町時代に属する可能性が高い。

溝のなかで、幅1.2～3.2ｍ、深さ0.4～0.8ｍをはかる溝はＡ地区、Ｂ地区で検出されており、埋土の状態や出土遺物より同一時期の所産である可能性が高い。溝はＢ地区においては掘立柱建物跡を囲むようにめぐっているようである。

井戸は、素掘りが殆どであるが、曲げ物を井戸枠にしたものを１基検出した。この井戸には人頭大の礫がぎっしりつまっており、井戸を廃棄する際に意識的に投げ込んだものと思われる。

遺物出土量は比較的少ないが、９世紀前半の土師器の一括資料、黒色土器、また底部切り離し技法がヘラ切りから糸切りに変化する時期の遺物も若干含まれている。その他東播系中世須恵器、常滑甕等も出土している。

佐賀市域においては、中世遺跡の発掘例が少なく、今回の調査結果に対比できる資料をもたないが、今後この地区における中世遺跡の発掘の増加が予想されており、類例の増加を待って今回調査を行なった遺跡の性格・遺物の時期などについて再検討したい。

1．村徳永遺跡全景
2．C地区全景
3．B地区ＳＥ034 井戸枠出土状況
4．B地区ＳＢ020 全景（北から）
5．B地区ＳＫ025 遺物出土状況

15. 立野（たての）遺跡（略号：ＴＡＴ）

遺跡の所在地

佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

昭和63年８月～10月

調査面積

4,500㎡

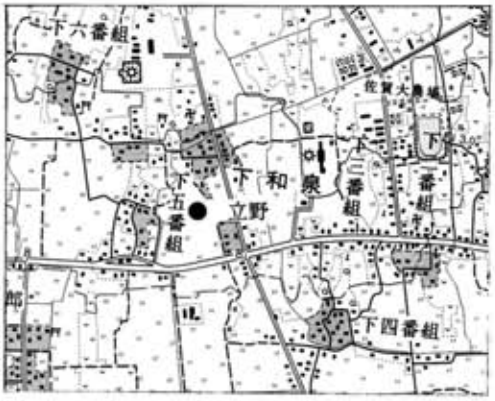


図60　立野遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

立野遺跡は佐賀市域の北部、標高８ｍの低丘陵上に位置する。周辺は埋蔵文化財包蔵地として周知されているが、調査例は少なく、泉遺跡（昭和60年度調査、中世から近世の集落跡）、泉三本栗遺跡（昭和61年度調査、弥生時代、古墳時代、中世の集落跡）、上和泉遺跡（昭和62年度調査、古代から近世の集落跡）などがあるにすぎない。

今回の調査では弥生時代中・後期から中世に至る遺構を検出した。検出遺構には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、周溝状遺構、井戸、溝、小穴群がある。

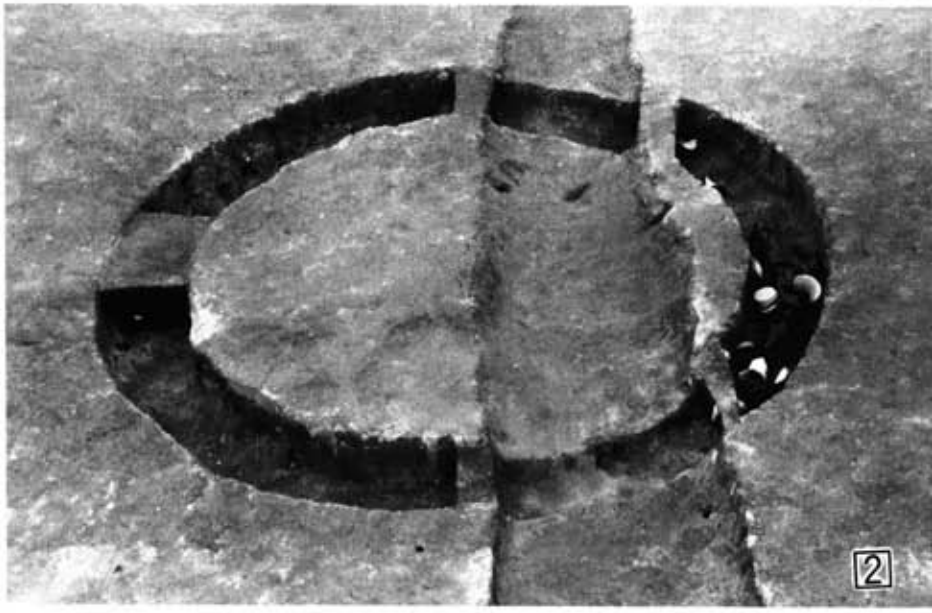
住居跡については、掘立柱建物跡（14棟）と竪穴住居跡（11軒）を検出した。これらの遺構は比較的高い標高をもつ部分に南北方向に並んで点在する。

掘立柱建物跡は、その規模から見て４種に分類できる。グループ間で若干の時期差は想定できるものの、時期決定のための資料が非常に少なく、わずかに出土した土器や、竪穴住居跡との位置関係からして、弥生時代中頃の所産と推定する。

土壙は38基検出した。便宜的に大型土壙とそれ以外のものに大別した。前者は上面の平面形が隅丸長方形を呈し、上面の面積10.6～14.7㎡を測るものである。鎌倉～室町時代の所産と考えられるが、他遺跡では奈良時代のものもある。後者は隅丸長方形、楕円形、不定形を呈し、住居跡群の中に点在し、弥生土器を内包している。

周溝状遺構は３基（内１基は方形）検出したが、佐賀市域では初めての検出例であり、そのうちの一基から弥生土器の甕・器台を検出した。これらの土器は炭化木と折り重なったように出土したので、火を用いる何らかの祭祀が存在した可能性もある。しかし性格の確定は今後の調査を待ちたい。

以上のことから、立野遺跡は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、周溝状遺構、井戸を具備する弥生時代の小集落と考えられ、その存在期間は比較的短期間で、廃棄されたもののようである。



1．立野遺跡全景
2．ＳＸ001 周溝状遺構
3．ＳＸ001 周溝状遺構
　遺物出土状況

16. 於保三本松遺跡（略号：ＯＳＭ）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上字上於保

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和63年７月～９月

調査面積

3,850㎡

図62　於保三本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

於保三本松遺跡は大和町の南西部に位置し、西側に東平川がある。遺跡の現況は畑地で、低地の中の微高地と考えられ、標高は８ｍを測る。調査区を西南調査区、北側調査区、東南調査区に分け、順次調査を実施した。

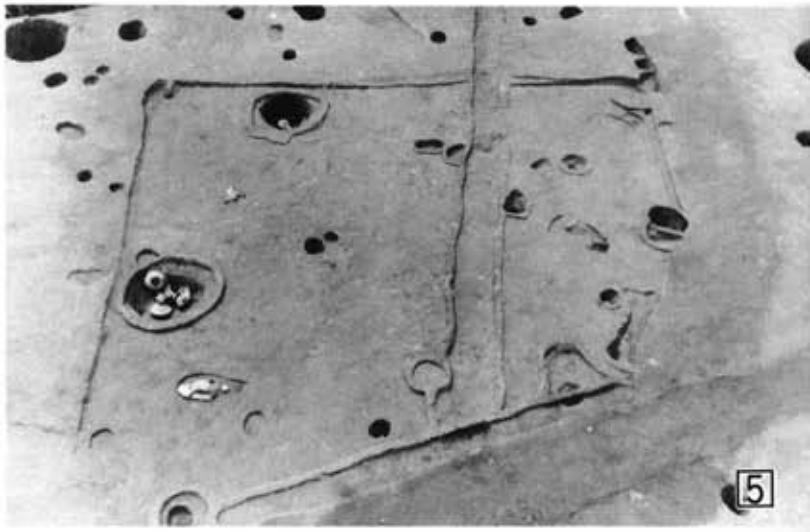
調査の結果、於保三本松遺跡は古墳時代前期～平安時代の集落跡であることが判明した。古墳時代前期の遺構は、竪穴住居跡が１軒検出された。遺構の残存状況は良好ではないが、住居跡に伴う土壙・小穴より布留式土器の高杯等の良好な一括資料が出土した。住居跡は一辺約６ｍの方形を呈する。

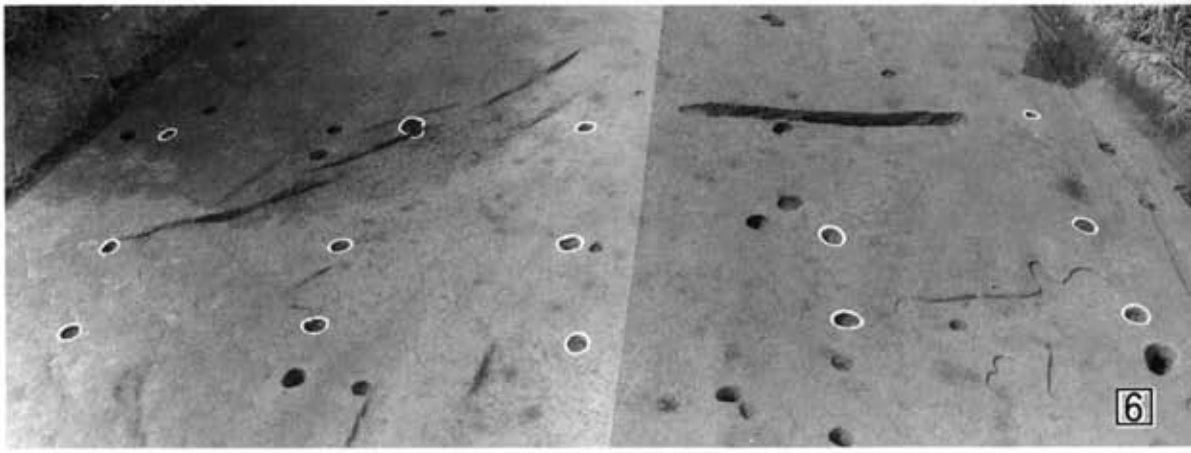
平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡19棟、柵列１列、井戸26基、溝11条、土壙数基を検出した。掘立柱建物跡は、２間×３間の建物跡が６棟、２間×２間が１棟、３間×３間が１棟調査区外にかかる建物跡が11棟ある。調査区外にかかる建物跡のうち、柱間が６間を測るもの、４間を測るものが各１棟、南北の柱間が２間（北の柱間2.2m・南の柱間1.3m）で東西に６間（１間2.5m）伸びる長屋状の建物跡が１棟検出された。各掘立柱建物跡の建物軸は、３方向の軸をとるが磁北と軸を同じくするものがほとんどである。柱の掘方は20～50cmの円形を呈する。調査区から検出された井戸のすべてが平安時代のもので、土師器の杯・椀、黒色土器多数を出土した。また多量の炭化米と若干の緑釉陶器片が出土している。井戸の大きさは、１～1.5ｍのものが24基、２～３ｍの直径を測るものが２基である。検出された溝は、ほとんどが東西方向に走る大小の溝で南北に走る溝は１条を数える。溝の底から出土した遺物は少ないが、埋土中から土師器・黒色土器が出土している。また甕の三足土器が出土している。

以上の遺構以外に時期不詳の土壙・小穴、近世から現代にかけての水田跡に関わる水路跡等が検出された。

於保三本松遺跡は平安時代の集落跡が主体となる遺跡であるが、集落の主要部分は調査区の南側に展開しており、今回の調査ではその全容を明らかにすることはできなかった。また掘立柱建物跡に掘方の規模、間尺等に差があり、この時期の集落を考える上で貴重な資料である。

1．於保三本松遺跡
　調査区全景
2．北側調査区
3．南西調査区
4．南東調査区
5．ＳＩ106 竪穴住居跡
6．ＳＢ95掘立柱建物跡





17. 本村籠遺跡（略号：ＨＳＧ）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上字本村籠

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和63年６月～７月

調査面積

1,250㎡

図64　本村籠遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

本村籠遺跡は大和町の南西部に位置し、東に嘉瀬川を挟んで佐賀市の鍋島地区がある。遺跡の現状は畑地で、嘉瀬川の氾濫原の中の微高地（標高７ｍ）の一つと考えられる。調査は水路部分となる発掘区南側を先に行い、その後残りの北側について調査を行った。

調査の結果、本村籠遺跡は弥生時代～鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判明した。弥生時代の遺構としては甕棺墓が41基、土壙墓１基、井戸２基が検出された。甕棺墓は大部分が成人棺で汲田式甕棺（弥生時代中期前半）のものがほとんどである。甕棺は水平に近い形で埋葬されており、後世の耕作によってかなりの部分が欠損している。井戸は出土した遺物より弥生時代中期のものと思われる。

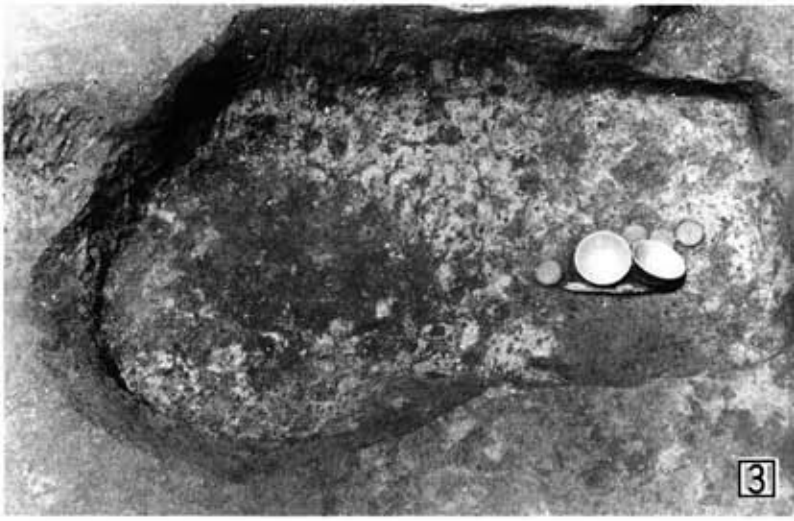
古墳時代～奈良時代のものと断定できる遺構は検出されていない。

平安時代～鎌倉時代の遺構としては、土壙墓４基、井戸33基、溝８条、布掘り状の掘立柱建物１棟、土壙数基が検出された。土壙墓のうち２基は、土師器の椀が供献されていた。また土壙墓のうち１基は龍泉窯系の碗が２個、土師器の小皿４枚、小刀一振りが供献されており、鎌倉時代のものと思われる。井戸からは、黒色土器・瓦器の良好な資料が出土している。溝は、南北に伸びる大溝が２条検出された。このうち調査区東側で検出された溝は、途中で途切れており区画性が高い溝である。

またこの他に時期不詳の土壙、小穴多数が検出された。このうち小穴から腰帯の丸鞆一つが出土している。

本村籠遺跡は標高6.7ｍの微高地上に立地する遺跡で、弥生時代中期前半には甕棺墓群が出現する。その後平安時代を中心に集落関連遺構・墓群が現われるが、それは一般集落との関連性よりも居館等の遺構との関連性を窺わせるものである。本調査区の北東250ｍには於保一族の居館跡と伝えられる於保天満宮が位置している。遺物については、平安時代の黒色土器が多数出土しており、この時期の良好な資料である。また他の遺物では、平安時代の井戸より曲物と田舟を転用したと思われる井戸枠が出土している。

1．本村籠遺跡
　北側調査区全景
2．南側調査区全景
3．ＳＰ310 土壙墓
4．ＳＰ310 土壙墓
　遺物出土状況
5．ＳＢ46掘立柱建物跡



18. 三重本村遺跡（略号：MHM）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字三重

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和63年４月～５月

調査面積

900㎡

図66　三重本村遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

三重本村遺跡は、諸富町の南西部に位置する三重地区集落を中心に広がる約50,000㎡の広さを有する町内南部地域最大の遺跡である。遺跡周辺には、北西部に三重二ツ寺遺跡（奈良時代～中世）や北部に三重櫟ノ木遺跡（弥生時代終末～近世）などが知られている。遺跡の北東部には、用明天皇期に成立したと伝えられる新北神社がある。遺跡の所在する三重地区は町内南部地域の中心的集落で、集落の北東角に位置する新北神社は、川副庄の中心的神社である。また地区内には、江戸時代川副代官所が設置されていた。

今回調査を実施したのは、遺跡の中央西角部分（３区・360㎡）と北角部（４区・540㎡）で、それぞれ東西方向に向かって実施した。

調査の結果３区では、中世～近世の溝跡３条・土壙６基・柱穴多数を確認した。特に調査区南角を東西方向に向かって伸びる溝跡より16世紀の磁器・土師器等と供に五輪塔が出土した。また土壙等より瓦器・土師器・輸入陶磁器等が多数出土した。４区は、昨年調査を実施した三重二ツ寺遺跡の東側にあたり、集落を区画したと見られる溝跡が調査区の両サイドに見られ、環濠集落と見られる。遺構密度は高く、溝跡５条・土壙15基、井戸跡４基・柱穴多数が確認された。各遺構より８世紀～９世紀にかけての須恵器・土師器や12世紀～14世紀にかけての瓦器・土師器・輸入陶磁器等が多数出土した。特に調査区中央南で確認された長方形の土壙より８世紀代の丁寧に磨かれた土師器等と供に「宮邊」と読める墨書土器が出土し、注目された。この他、獣骨・魚骨などの自然遺物も出土している。

1．三重本村遺跡遠景
　（南側から）
2．同（東側から）
3．3区土壙

19. 三重楪ノ木遺跡（略号：ＭＵＫ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字三重

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和63年６月～11月

調査面積

3,400㎡

図68　三重楪ノ木遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

三重楪ノ木遺跡は、町内南西部に位置する三重地区集落の北部に位置する約30,000㎡の広さを有する遺跡で、佐賀平野最南端の弥生時代終末の遺跡である。標高2.70ｍでこの地域ではやや高い。遺跡の周辺には、近接して南に三重本村遺跡・南西に三重二ツ寺遺跡などが見られ、南部地域最大の遺跡群を形成している。

調査は、遺跡のほぼ中央を東西に横断する幅18ｍの水路部分及び削平予定の1,000㎡の広さの雑種地で実施した。

水路部調査区西角にはクリークが見られ、内部より弥生土器の他、瓦器・土師器・古式土師器・近世の磁器等が多数出土した。この他、溝に囲まれた地域に溝跡２条・土壙２基・井戸跡７基・建物跡１戸・柱穴多数が確認された。特に調査区東角で確認された中世の溝跡は方形に廻り、集落内の一定地域を区画したとみられ注目される。区画内に建物跡が見られた。また調査区中央南部分より確認されたＳＥ122井戸跡より、上層で布留０式と見られる甕・小形丸底壺が、そして下層より庄内甕を模倣した甕・山陰系壺・東海系甕等が一括で出土し注目された。またＳＤ218からＳＤ307間には中世の溝跡４条が東西方向に向かって確認され、内部より土師器・瓦器・磁器等が多数出土した。調査区中央東側に位置するＳＸ157より東海系のＳ字口縁台付甕の口縁部が確認され、更に古墳時代前期の木器等も検出された。

水路部北側の雑種地では埋土中より古式土師器・瓦器・須恵器等が多数見られた。また形が前方後方墳に類似していたため、全体に５ｍのグリッドを設定し、雑種地周辺の水田面の表土を剥ぎ周溝の確認を行った。この結果、表土下20cmから意図的に固められたと思われる黒色の層が確認され、内部より土師器・古式土師器の小破片が多数出土した。

以上のことから、三重楪ノ木遺跡は、弥生時代終末から中世までの複合遺跡で、特に弥生時代終末～古墳時代前期の遺構が多く、その土器組成も複雑である。一遺構内に在地系と外来系土器が一括で出土した例が多く、佐賀平野の古墳時代成立時期やその過程を考える上で重要である。

1．三重樔ノ木遺跡１区全景(東側から)
2．１区東側全景
3．１区中央全景
4．１区西側全景
5．２区全景(東側から)

20. 石塚古墳群２号墳（略号：ＩＳＺ－２号墳）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字為重字石塚

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和63年６月～10月

調査面積

800㎡

図70　石塚古墳群２号墳周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

石塚古墳群は諸富町南東部、旧国鉄佐賀線諸富駅付近に位置する古墳群である。この古墳群は、昭和63年１月に実施された農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査において発見され、佐賀平野・筑後平野最南端の低地に見られる古墳として注目を集めた。本来は数基群集していたと推定されるが、諸富駅跡地南方100mに１号墳、さらに南西100mに２号墳が現存するだけで、その他は佐賀線建設や工場建設・開墾等で破壊されたものと思われる。１号古墳は、調査の結果横穴式石室を有する長径約20m・短径12mの楕円形の円墳と推定され、石室はほとんど破壊されていたが、石室内部より６世紀末の須恵器・馬具杏葉・辻金具・金銅製蓮華紋装飾品・水晶製切子玉・管玉・勾玉・ガラス玉・耳環・鉄鏃・刀子・太刀・挂甲など豊富な副葬品が出土した。この為工事区域から除外され、保存される事になった。

２号古墳は、１号古墳の南南東約100m標高2.9mの水田に立地する。この周辺は、古墳時代の海岸線の存在が推定される地域で、南南東300mには古墳時代前期の貝塚を有する石塚遺跡などが見られる。

調査は、63年６月より10月まで実施した。この結果、西方に開口すると思われる横穴式石室の一部が確認され、石室内より須恵器（６世紀中頃～７世紀初）・ガラス小玉・玉・切子玉・管玉・馬具・鉄鏃・太刀が出土した。

石室の破壊は１号墳より激しく、腰石の一部が確認されたのみで、石室の形態等は確認できなかった。しかし、現存する墳丘周辺より直径11.5mの不整円の掘込みが確認された。

この掘込みは、古墳築造時に実施されたと考えられる基盤整地の痕跡と考えられ、後の寺院建築などに見られる掘り込み地業と類似している。なお、古墳の形態は、周溝が確認できなかったため不明である。

以上の事から２号古墳は、６世紀中頃～７世紀初の古墳時代後期に築造された平地の古墳と考えられ、佐賀平野南部における古墳の盛衰を考える上で重要な資料となった。

1.石塚古墳群２号墳（石室北側）
2.石塚古墳群１号墳（南側から）

21. 寺浦廃寺（てらうらはいじ）（略号：ＴＲＵ）

遺跡の所在地

小城郡小城町大字晴気字寺浦

調査主体者

小城町教育委員会

調査期間

平成元年２月～３月

調査面積

500㎡

図72　寺浦廃寺周辺地形図（１：25,000）

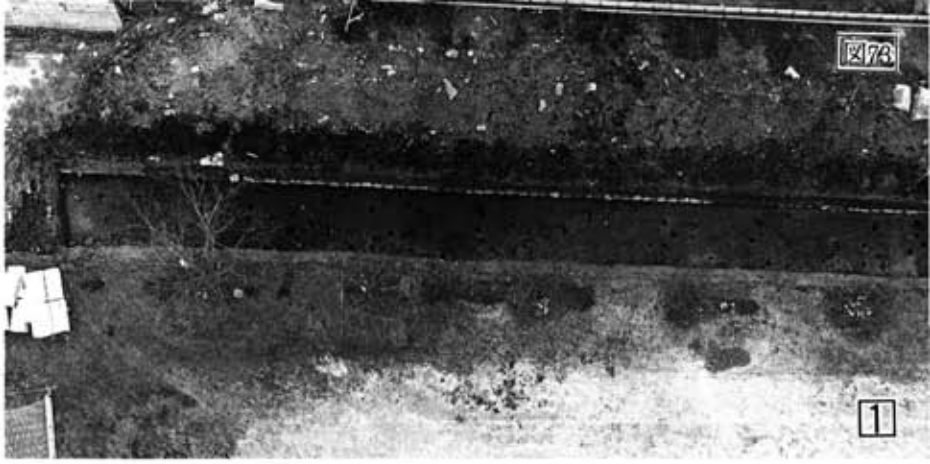
遺跡の概要

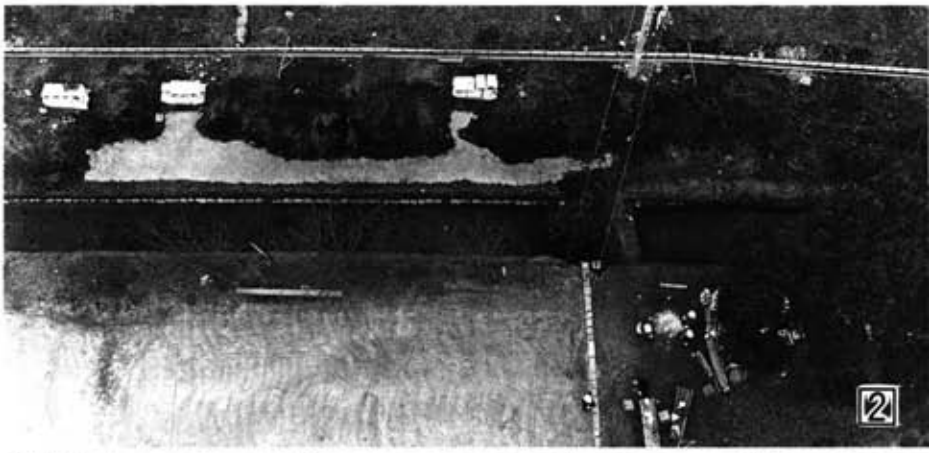
寺浦廃寺は、天山山系の愛宕山から派生したゆるやかな扇状地の扇頂部に位置し、三方は山に囲まれ、南側は佐賀平野をのぞむことのできる好処にある。標高は約45ｍである。別名晴気廃寺とも呼ばれており、周辺には当廃寺に因むと思われる大門、拝門橋、塔廻山、和尚谷、古屋敷などの地名が残されている。また、近くには寺浦古墳群や当廃寺の瓦を焼いた瓦窯跡がある。

寺浦廃寺は戦前から研究者に知られており調査報告がなされている。それによると大正の初め頃には塔跡と金堂跡と思われる基壇が残されており、法隆寺式の伽藍配置を推定されている。瓦は百済系唐草文縁単弁八弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合せと、鴻臚館式複弁八弁軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦の組み合せが知られている。現在、当廃寺は塔の心礎と基壇が残っており、県の史跡に指定されている。

調査は農道の拡幅によって削平される500㎡にわたって行った。塔跡から南へ約75ｍの地点である。調査の結果、西側の部分で幅2.7ｍ、深さ0.9ｍの南北に走る溝跡を検出した。出土遺物は重弧文軒平瓦などの瓦類をはじめ、土師器の小皿、椀や瓦質土器が出土している。東側では、小穴を多数検出したが、建物を復元することはできなかった。また遺物も出土しておらず時期も不明である。

今回の調査によって検出できた溝跡は果樹試験場研修棟北で検出できた溝跡と一連のものと思われ当廃寺の寺域を推定するうえで重要な資料である。





1．寺浦廃寺
　調査区東側
2．調査区中央部
3．調査区東側
4．調査区西側
5．土壙（南から）
6．ＳＤ01（南から）

《佐賀南部地区における調査》

22. 市場遺跡（略号：ＩＣＢ）

遺跡の所在地

武雄市橘町大字永島

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和63年８月～12月

調査面積

5,250㎡

図74　市場遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

市場遺跡は潮見山の南を東西に流れる六角川の右岸にあり、標高８～９ｍの水田及び畑地に立地する。遺跡の北部については昭和58年度に六角川河川改修工事に先だって発掘調査を実施しており、古墳時代の竪穴住居跡や遺物では弥生時代の土器などが確認されている。[註1]

調査は削平を受ける畑地を対象とし、畑１枚毎にＡ～Ｗの記号をつけ、その前にほ場整備の地区番号を付した。

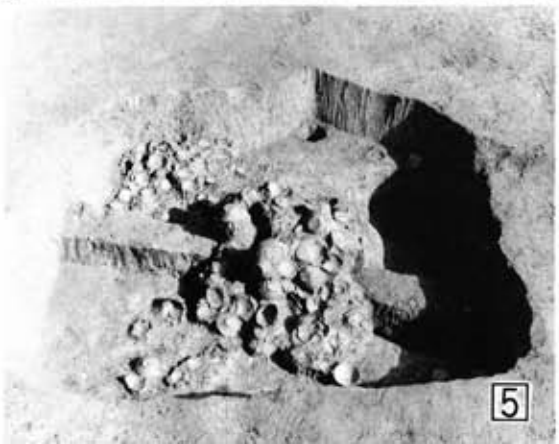
検出した遺構は竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡14棟、土壙23基、井戸跡11基、溝23条、その他柱穴などである。竪穴住居跡は２軒とも方形を呈し、古墳時代のものであり、鉄製の紡錘車などが出土した。掘立柱建物跡は近世に属するものが多く、大形の柱穴をもつものもあり、国産陶磁器などを検出した。土壙は古代～近世にわたっており、ＳＫ068土壙からは大量の土師器杯・小皿（全て糸切りで、口径に比して器高が高い）が出土した。井戸跡は全て円形基調のもので、中世を中心としたものである。溝は大小があり、中世～近世のものと考えられる。溝としたものの中には、幅0.6m、深さ0.15m前後で、埋土中に、大量の鉄滓及び、羽口片を包蔵しており、製鉄関連遺構の可能性もある。

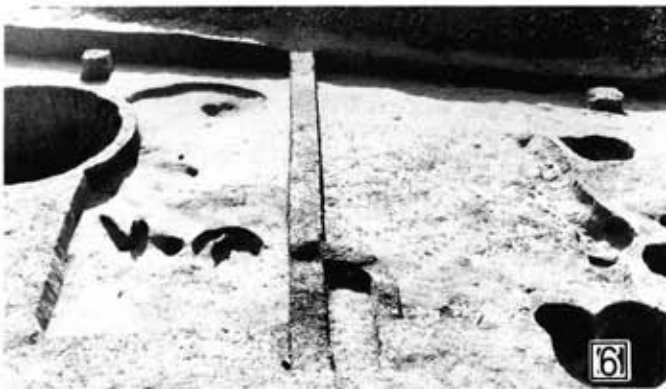
以上のように、今回の調査によって、当該地においては古墳時代以降近世を経て現代に至るまで、連綿として生活が営まれたことが判った。特に古代の土器類は市内での出土例も少なく、本遺跡の西に位置する玉江遺跡[註2]のものと合わせて、重要な資料と考えられる。

註１　原田保則編　『みやこ遺跡』　武雄市文化財調査報告書第15集（上巻）所収　武雄市教育委員会　1986

註２　原田保則　『玉江遺跡』　武雄市文化財調査報告書第16集　武雄市教育委員会　1987

1．市場遺跡11地区全景
2．8地区全景
3．SK044　（南から）
4．SH050　（西から）
5．SK068　（西から）
6．SH076　（東から）





23. 井手橋遺跡（略号：ＩＤＢ）

遺跡の所在地

武雄市橘町大字大日

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和63年７月～８月

調査面積

750㎡

図76　井手橋遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

井手橋遺跡は武雄平野の中央部に位置し、旧六角川と新六角川に挟まれた狭小な地域である。北には中世遺構及び古墳時代の包含層の庄ノ前遺跡[註1]や墨書土器を出土した林副遺跡[註2]、南には小型仿製鏡出土の納手遺跡[註3]、有鉤銅釧出土の茂手遺跡[註3]、みやこ遺跡[註4・註5]、郷ノ木遺跡[註4]が自然堤防状の微高地に存在する。

調査は削平を受ける畑地及び水路予定地（合計３箇所）を対象として実施した。各調査区の呼称はほ場整備の地区番号並びに水路番号に合わせた。調査の中心となったのは、対象面積の大きかった62地区である。

検出した遺構は掘立柱建物跡３棟、土壙10基、溝２条、その他柱穴等である。これらの遺構から出土した遺物は近世を主体としており、一部に中世のものが見られる。59地区では土師器杯や輸入磁器が出土した。

62地区の東側（現六角川）周辺は、中村屋敷と呼ばれる地域がある。これは鎌倉時代に入部した橘公業の子孫公村が姓を渋江と改め、舎弟三人に各々牛島・中村・中橋の姓を唱えさせていることから、この中村の屋敷跡の存在が考慮されるが、検出した遺構からはその確証は得られなかった。

註１　原田保則編　『庄ノ前遺跡』（図版編）　武雄市教育委員会　1984

註２　昭和57年度ほ場整備関係で調査。未報告（遺物実測図のみ註４に掲載）

註３　原田保則編　『茂手遺跡』　武雄市文化財調査報告書第15集（下巻）　武雄市教育委員会　1986

註４　原田保則編　『みやこ遺跡』　武雄市文化財調査報告書第15集（上巻）　武雄市教育委員会　1986

註５　原田保則編　『みやこ遺跡Ⅱ』　武雄市教育委員会　1989

1．井手橋遺跡62地区全景（東から）
2．62地区東半部（東から）

24. 吹野遺跡（略号：ＦＫＮ）

遺跡の所在地

鹿島市大字三河内字吹野

調査主体者

鹿島市教育委員会

調査期間

昭和63年６月～８月

調査面積

1,150㎡

図78　吹野遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

吹野遺跡は中川の河口から約７㎞上流の、木庭川と中川が合流する地点で、上流に比して谷幅が急激に広がった地点にある。谷の斜面には河川の浸食による河岸段丘が顕著に見られ、谷底の平坦部には旧河川痕が明瞭に残る。吹野遺跡は木庭川の左岸で旧河川痕にはさまれた微高地上に位置する。

発掘調査は道路予定地部分をはさんで、東側を第１調査区、西側を第２調査区として実施した。遺物包含層は第１調査区の南半を除き全面に確認された。特に第２調査区の北側については、２層の包含層が確認され、遺物も相当量が出土した。遺構については、第１調査区で古墳時代前期の土壙を検出したが、縄文時代の遺構は検出できなかった。

遺物としては、縄文時代晩期中頃の黒川式の深鉢、浅鉢、組織痕土器、石鏃、石匙、打製石斧、擦り石などが出土した。なお、黒川式の土器には波状口縁の浅鉢、突帯文の土器は伴っていない。

今回出土した遺物の中には縄文時代の生活を復元するのに重要な遺物がいくつか出土した。編布痕土器は、縄文時代の織物がほとんど遺存しない現状からすると、その実態を知ることのできる貴重な資料である。また網目痕土器から漁網の存在が確認できるが、これは吹野のムラの人々が漁撈に従事していたことを物語るものであろう。

吹野遺跡が立地するような放射状の谷間には河川の氾濫、流路の変遷などによって土砂が流失し、遺跡が遺存しないといわれていたが、吹野遺跡のように残る場合もあることが明らかになった。今後も同様な立地の場所で遺跡が発見される可能性が出てきた。吹野遺跡は鹿島市に多く存在する放射状谷の歴史的な土地利用の状況を知る上でも重要な遺跡といえよう。

1．吹野遺跡遠景
2．第1調査区全景
3．第2調査区全景
4．C・D－2・3区
　遺物出土状況

25. 湯崎東遺跡（略号：ＹＳＨ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字湯崎字湯崎

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和63年11月～平成元年３月

調査面積

2,100㎡

図80　湯崎東遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

湯崎東遺跡は、杵島山系東部に広がる標高約3.4ｍを測る水田地帯に立地する。この杵島山系には、古墳時代中期の船野山古墳群１号墳（通称かぶと塚古墳）、陪冢を伴う前方後円墳を含む湯崎古墳群の外に、古墳時代後期の野柄古墳群１号墳など多数の古墳が存在する。62年度の調査においては、水田より約60cmの高まりを示す畑地の南半分約3,000㎡を調査し、上層からは中世の掘立柱式建物跡１軒、近世の墓地跡が確認され、下層からは弥生時代終末～奈良・平安時代の土壙、井戸、溝等が多数検出された。

63年度は62年度の調査区域の西側、南北に延びる水路部分を調査した。調査区域の北・中部においては古墳～奈良時代の土壙・溝等が少数検出されたのみで、遺物としては奈良時代の土壙より竪杵が出土した。北部においては特に遺構の数が少なく、下層においても遺物はほとんど検出されなかった。

中部以南では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を検出したが、その数は少ない。

その下層においては、弥生時代後期の柱穴約190基、土壙47基を検出した。調査区南端付近では、２間×１間の高床式倉庫跡２軒をほぼ同一地点で建て替えられたとおもわれる状態で確認した。柱間はいずれも約2.0～2.5ｍを測る。

この倉庫跡を含む大多数の柱穴は、底部に横木を１本ないし数本備え付け、それに柱根をかませる工法をとる。一部には、葦と思われる植物繊維を底面に敷き詰めた例も認められる。

調査区のほぼ中央部においては、特異な工法を示す掘立柱式建物跡１軒が検出された。径約１ｍの柱根底面に植物繊維を敷き詰め、長さ約80cmの横木４本ないし５本を井桁状に組み、その中心に柱を立てている。柱には貫状の横木を通し、建物全体の重量を井桁状の横木に拡散させる工法をとる。この工法は、摩擦杭工法と呼ばれ、軟弱地盤に対する沈下防止策と考えられる。遺物としては、鋤・木戈・舟形木製品等の木製品が多数出土した。

1．湯崎東遺跡全景
　（北から）
2．ＳＢ201 、ＳＢ202
3．木製品出土状況
4．ＳＢ203 柱穴
　（摩擦杭工法）

26. 久治遺跡（略号：ＫＵＪ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字湯崎字久治

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和63年８月～10月

調査面積

4,500㎡

図82　久治遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

久治遺跡は、白石町と有明町の町境付近に位置し、標高約3.1～2.9ｍで、北西から南東に向かってわずかな傾斜を呈している。

久治遺跡北西には弥生時代後期～奈良・平安時代の湯崎東遺跡が存在する。

今回の調査は、東西に延びる水路部分について実施した。古墳時代後期から奈良時代を中心とする遺構を多数検出したが、一部平安時代後期と近世の遺構も確認した。土壙176基、井戸跡４基、溝９本を検出したが、なかでも特異な遺構は、環濠状の形態を示す奈良時代の溝である。調査区の西側で検出した幅約10ｍ、深さ約40～50㎝の溝は土手状の遺構で二分され、東西に約65ｍ延び、東西両端部でそれぞれ更に北側に延長している。ただし狭い範囲での調査のため、この溝が住居に伴う環濠なのかあるいは水路跡なのかは不明である。この溝からは「下」「前」などと墨書された須恵器片や木製鋤など多数の遺物が出土した。

木製品としては古墳時代後期の土壙底部より鉄製の先端部を装着したと考えられる鋤など数量的に多い。また、奈良時代の土壙底部からは「紀」と墨書された須恵器の杯と身が出土した。

溝状遺構からは、滑石製石鍋を転用したと思われる舟形が出土した。この舟形に関しては湯崎東遺跡からも弥生時代後期と古墳時代中期の木製品が出土しており、各時代を通じて白石地方が海と密接な関係を有していたことが窺える。

また、近世の土壙上部から長さ約５㎝程の男根状石製品１点が出土したが、これは他所よりの流れ込みと考えられる。

1．久治遺跡北区全景
　（東から）
2．ＳＫ081
　「紀」墨書土器出土状況
3．ＳＫ090
　木製鋤出土状況

27. 多田遺跡（略号：ＴＡＤ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字今泉字多田

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和63年５月

調査面積

600㎡

図84　多田遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

多田遺跡は杵島山系東方に広がる水田地帯であり、標高約2.0～2.4ｍを測る。多田周辺には平安時代初期の文献に「多駄」と記される荘園が存在していた。この周辺部からは土器片が多数採集されるなど、早くからその存在が知られていた。今回の調査区域は、梅香寺の西側に予定されている水路部分である。

狭い範囲の調査ではあったが、古墳時代後期から奈良時代にかけての土壙・溝・柱穴を検出した。その内調査区南端で検出した溝は、南西から北東に約24ｍ延び、東方向に屈曲している。また、調査区北側において赤く彩色された壷１個が横倒しの状態で検出されたが、何らかの祭祀に使用されたものであろう。

遺物としては、このほかに土師器片、須恵器片が出土した。

1．多田遺跡Ｅ地区全景（北から）
2．ＳＫ086　（西から）
3．ＳＤ016　（南から）

《佐賀上場地区における調査》

28. 唐ノ川遺跡群

○唐ノ川高峰遺跡（略号：ＴＯＴ）…1

○唐ノ川境遺跡　（略号：ＴＯＳ）…2

遺跡の所在地

唐津市唐ノ川字高峰・境

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

昭和63年７月～平成元年２月

調査面積

4,500㎡

図86　唐ノ川境遺跡（A）・唐ノ川高峰遺跡（B）
周辺地形図（１：25,000）

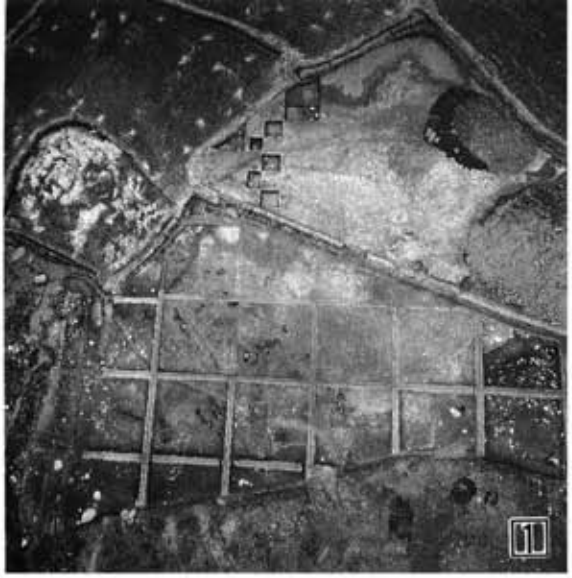
遺跡の概要

唐ノ川遺跡群は、唐津市の西南部に位置する。唐津平野の西部には上場台地と呼ばれる標高150m～200mの準平原状の玄武岩質安山岩の溶岩風化台地があり、本遺跡は、この上場台地の南東端、有浦川、松浦川の分水嶺から南に延びだす標高170mの緩丘陵面に立地する。

確認調査の結果、遺跡の広がりは約36,200㎡にも及ぶ事が判明し、昭和63年度は、そのうち工事によって削平を受ける4,500㎡を調査した。

調査地は唐ノ川境（1,000㎡）と唐ノ川高峰（3,500㎡）の２地点となった。唐ノ川境遺跡では縄文時代の包含層と中・近世の混入撹乱層が検出された。調査地点の中心である丘陵東南側は地山砂岩層の削平面となり、遺構は検出されなかった。なお、この砂岩層中には腹足類の化石が包含されていて、この地域の基盤形成期の好資料となるものである。

唐ノ川高峰遺跡では縄文時代晩期中頃～後半の集落跡が検出された。集落跡は、一部削平のため明瞭ではないが、柱穴、土壙、溝等が認められた。柱穴は住居跡を構成するもので、数棟が予想される。東西の枝状谷に沿った丘陵斜面には、包含層が検出され、多量の遺物（土器：深鉢、浅鉢、壺、石器：石斧、石鏃、石槍、石錐、磨石等）が出土した。土器群の中には、網目や蓆目の圧痕のある組織痕土器が認められる。また、口縁直下に孔が並ぶ、孔列文土器もみられ、菜畑遺跡で最古の水田跡の検出された縄文時代晩期後半直前の上場台地の状況を考える上できわめて重要な資料となろう。



1.唐ノ川高峰遺跡全景
2.唐ノ川高峰遺跡遠景
（南西から）
3.唐ノ川高峰遺跡
包含層遺物出土状況
4Ｅ９～16区
4.唐ノ川境遺跡
Ａ、Ｂ－１区全景（東から）

29. 来島通之陣跡（略号：ＫＭＪ）

遺跡の所在地

東松浦郡呼子町大字殿ノ浦字ワタリ

調査主体者

呼子町教育委員会

調査期間

昭和63年10月

調査面積

1,000㎡

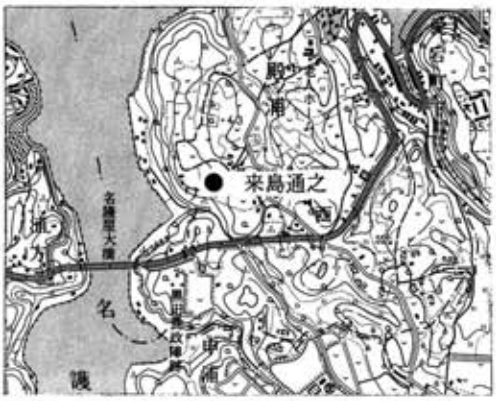


図88　来島通之陣跡周辺地形図（1：25,000）

遺跡の概要

来島通之陣跡は呼子町の西部、殿ノ浦半島の西の付根にあたる標高約49mの微高地の頂上部に立地する。呼子・鎮西・玄海の三町にまたがる広大な地域には、文禄・慶長の役（1592－1598）の際に従軍した諸将が築いた陣跡の遺構が百二十箇所余り分布している。殿ノ浦半島は、豊臣秀吉が本営をおいた名護屋城と名護屋湾をへだてて対岸の位置にあたり、特別史跡の加藤嘉明陣跡、毛利秀頼陣跡、黒田長政陣跡をはじめ十数箇所の陣跡が確認されている。来島通之陣跡周辺にも、近接する地域に藤堂高虎陣跡、伊達政宗陣跡、徳川家康別陣跡が分布する。

調査の結果、陣跡に付随すると思われる集石遺構や集石土壙の他に、縄文時代の土壙等の遺構が検出された。

出土した遺物は、先土器時代から縄文時代にかけての黒曜石やサヌカイト製のナイフ、スクレイパー、ノッチ、ポイント、石匙、扁平打製石斧、石鏃等の石器類と剥片多数の他、縄文時代の土器の小片、近世陶片等である。近世陶片は角石多数が入った土壙の底から出土したが、陣跡との関連を考えさせる。また、平石を片側に立てかけた隅丸方形土壙の縁辺部からは、扁平打製石斧とスクレイパーがセットで出土した。

このように、来島通之陣跡は、文禄・慶長の役の陣屋の遺構だけにとどまらず、先土器時代・縄文時代の上場地方の文化を考えていく上で、貴重な資料を提供することとなった。

註　多々良友博　『辻遺跡－加藤嘉明陣跡－』　呼子町教育委員会　1983

1．来島通之陣跡中央部全景
2．集石遺構
3．近世陶片出土状況
4．扁平打製石斧出土状況

30. 牟形遺跡群

○牧ノ地Ⅰ遺跡（略号：ＭＫＣⅠ）…1

○牧ノ地Ⅱ遺跡（略号：ＭＫＣⅡ）…2

○稗田Ⅰ遺跡　（略号：ＨＩＤⅠ）…3

○稗田Ⅱ遺跡　（略号：ＨＩＤⅡ）…4

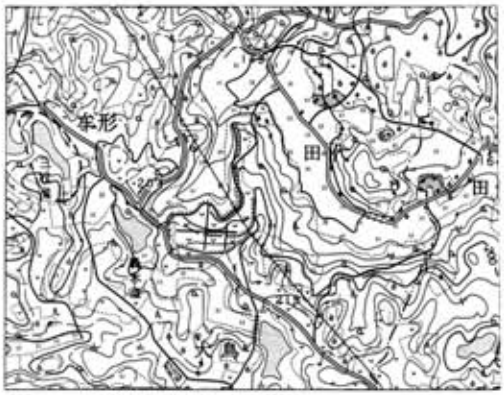


図90　牟形遺跡群周辺地形図（1：25,000）

遺跡の所在地

東松浦郡玄海町大字牟形字稗田・牧ノ地

調査主体者

玄海町教育委員会

調査期間

昭和63年11月～平成元年３月

調査面積

6,100㎡

遺跡の概要

牟形遺跡群は、玄海町南部に位置し、牟田三枚溜周辺標高約200ｍの丘陵部に立地している。

調査は、削平予定の水田及び畑地部分10地区6,100㎡を対象に実施した。

牧ノ地Ⅰ遺跡（６区）は、牟形三枚上溜北東部の、標高約200ｍの水田部分である。

調査は、工事予定地250㎡にトレンチを６箇所設け行った。その結果、遺構は検出されなかったが、石鏃、ナイフ形石器、剥片などの石器類と土器片が出土した。

牧ノ地Ⅱ遺跡（７，８，９，10区）は牟形三枚上溜西南部の、標高200～203ｍの畑地及び山林に位置する。

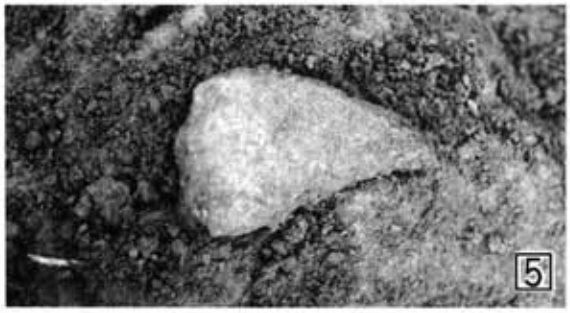
調査は、工事予定地1,750㎡にトレンチを60箇所設け行った。その結果、遺構は検出されなかったが、石鏃、ナイフ形石器等の遺物を検出した。

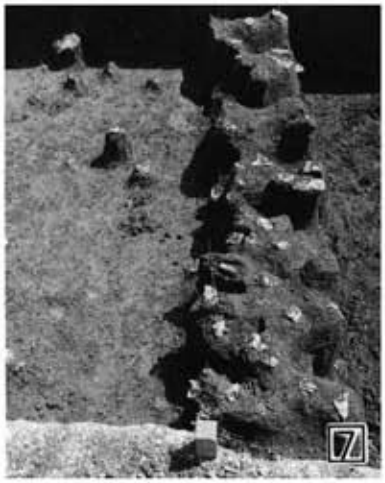
稗田Ⅰ遺跡（３，４区）は、牟形三枚上溜東部の標高約195ｍの畑地部分で、1,400㎡にトレンチを14箇所設け調査した。遺構は検出されなかったが、石鏃、剥片類と土器類が出土した。

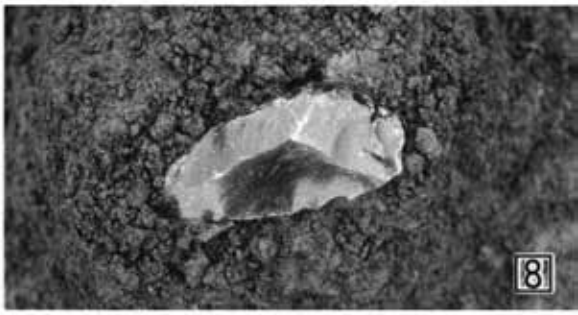
稗田Ⅱ遺跡（１，２，５区）は、牟形三枚上溜南部に位置する、標高約202～203ｍの畑地である。

工事予定地2,700㎡のうち400㎡を全面発掘し、残りの地区についてはトレンチを設けた。その結果、遺構は検出されなかったが、ナイフ形石器、石鏃、細石刃、黒曜石片と黒色磨研土器片多数が出土した。

以上より牟形遺跡群は時期的には、旧石器後期～縄文晩期に位置付けられるだろう。







牟形遺跡群

1．牧ノ地Ⅰ遺跡（遺物出土状況）
2．牧ノ地Ⅱ遺跡（遺物出土状況）
3．牧ノ地Ⅱ遺跡（遺物出土状況）
4．稗田Ⅰ遺跡（遺物出土状況）
5．稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）
6．稗田Ⅱ遺跡５区全景（真上から）
7．稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）
8．稗田Ⅱ遺跡（遺物出土状況）

V. 総　　括

昭和63年度に実施した農業基盤整備事業に係る文化財調査のうち、確認調査については佐賀東部地区で鳥栖市・基山町・中原町・北茂安町・上峰村・三根町・三瀬村・神埼町・千代田町の１市６町２村の計16地区、佐賀西部地区では佐賀市・多久市・川副町の２市１町の計11地区、佐賀南部地区においては武雄市・鹿島市・北方町・白石町・太良町の２市３町の計12地区、佐賀北部地区では伊万里市・西有田町・七山村・厳木町・相知町の１市３町１村の計16地区、佐賀上場地区では唐津市・鎮西町・玄海町・肥前町の１市３町の計10地区において実施した。また筑後川下流用水事業に係る調査については北茂安町、及び神埼町の計２地区について行った。

発掘調査は佐賀東部地区13遺跡、佐賀西部地区８遺跡、佐賀南部地区５遺跡、佐賀上場地区４遺跡について実施した。以下、確認調査については地区毎に、発掘調査については時代毎にまとめる。

◎　文化財確認調査

(1)　佐賀東部地区

鳥栖市；鳥栖北部地区（山浦新町地区）・鳥栖西部地区（立石吉原地区、立石柳ノ元地区）、基山町；園部地区Ｉ工区（鈴町地区）、中原町；中原北部地区、北茂安町；北茂安西部工区、上峰村；上峰（Ａ・Ｂ）地区、神埼町；神埼工区（祇園原地区、姉川地区、茜地区）の11地区で遺跡の存在が確認された。

山浦新町地区では古墳時代及び中世の集落跡、墳墓群の存在が確認され、立石吉原地区では古墳時代の集落跡と16基にも及ぶ古墳群、立石柳ノ元地区においては奈良・平安時代の集落跡がそれぞれ検出された。鈴町地区では弥生時代から中世に至るまでの集落跡が発見され、周知化が図られた（鈴町遺跡）。中原北部地区においては弥生時代から平安時代に至るまでの集落跡の存在が確認されたが、その分布面積は52,000㎡にも達すると推測され、脊振山南麓に展開している同時代の集落跡を考察する上での好資料といえる。北茂安西部工区では奈良・平安時代の集落跡が確認された。また上峰Ａ地区においては弥生時代の集落跡が、上峰Ｂ地区においては弥生時代から奈良時代にかけての集落跡がそれぞれ確認され、周辺の丘陵上に立地している二塚山遺跡、屋形原遺跡、船石遺跡といった弥生時代の集落跡、墳墓群との関連性が想定される。神埼工区・祇園原地区では古墳時代から近世に及ぶ集落跡の存在が確認され、２箇所の遺跡が新たに周知化された（岩田芦ノ元遺跡、岩田横山遺跡）。姉川地区では中世から近世にかけての集落跡が２箇所で発見され、周知化が図られた（姉川十三本松遺跡、姉川十二本松遺跡）。更に茜地区においては古墳時代の集落跡が検出され、新発見の遺跡として登録・周知化された（右原祇園町遺跡）。

(2) 佐賀西部地区

佐賀市；北川副地区・久保泉西部地区（泉工区）・久保泉東部地区（第２・第３換地工区）兵庫南部地区、多久市；四下地区、川副町；川副中部地区の６地区で遺跡が確認された。

北川副地区では弥生時代、及び中世の集落跡が確認され、周知化された（阿高遺跡）。久保泉西部地区（泉工区）では弥生時代から中世に及ぶ住居跡、土壙等を主体とする遺跡が確認されたが、遺物が微高地の全面にわたって散布しているため、大集落跡が発見される可能性もある。久保泉東部地区（第２・第３換地工区）では弥生時代から近世に至るまでの土壙、溝跡等が検出されており、集落跡の存在が考えられる。兵庫南部地区では弥生時代から中世にいたる集落跡及び、弥生時代の貝塚が確認された。四下地区においては弥生時代から中世にかけての遺物包含層を検出したが、地形から判断して集落跡が存在する可能性もあり、その分布範囲を周知化して保護を図った（四下大丹遺跡）。川副中部地区では中世末と思われる溝跡等の遺構を検出しており、中世から近世にかけての集落跡の存在が想定され得るため、その広がりを周知化した（鰐江南遺跡）。

(3) 佐賀南部地区

武雄市；川登地区、鹿島市；鹿島西部地区（筒口地区）、白石町；白石西３－１工区の３地区で遺跡の存在が確認されている。

川登地区では中世の集落跡が確認されており、潮見川の自然堤防上にも遺跡が存在することが確実となった。鹿島西部地区（筒口地区）では中世の集落跡が検出され、この地域における中世史研究に関しての追加資料となった。また白石西３－１工区では近世の遺構（性格に関しては不明）が確認されている。

(4) 佐賀北部地区

伊万里市；立岩地区・川内野地区・平山地区、西有田町；柳谷地区、相知町；大野地区の５地区において遺跡の存在が認められた。

立岩地区においては中世の集落跡、及び縄文時代後期の遺物包含層が確認されており、検出された宋代から明代にかけての陶磁器、及び国内産の陶磁器は中世から近世初期の資料として重要である。川内野地区では中世から近世にかけての集落跡が確認されており、縄文時代から近世に至る遺物包含層も検出されている。文化財に関しては未周知地区であったため、周知化を図った（川内野遺跡）。平山地区では近世の柱穴、石組遺構が検出されており、集落跡の存在が想定されるので、周囲の地形等も勘案して周知化を行った（平山遺跡）。柳谷地区では縄文時代の遺物包含層が確認されている。大野地区では弥生時代、及び中世の遺物包含層が確認されているが、これが集落跡と関連するものかどうかは現段階では不明である。ただし包含層の分布範囲については周知化を行った（大野遺跡）。

(5) 佐賀上場地区

唐津市；唐ノ川工区（境地区）、鎮西町；旱ケ田地区、玄海町；牟形地区、肥前町；新木場地区・入野地区の5地区において遺跡の存在が確認されている。

唐ノ川工区（境地区）においては遺物包含層が良好な状態で検出され、旧石器時代から縄文時代にかけての集落跡の存在が考えられる。なお遺跡の分布範囲については周知化を図った（唐ノ川境遺跡）。旱ケ田地区では縄文時代の遺物包含層が確認され、旧地形の遺存状態も良好であるため、今後の調査で集落跡が発見される可能性もある。牟形地区においては旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層の存在が確認されている。新木場地区ではナイフ形石器、剥片等が出土しており、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層が良好な状態で残存している。遺跡の分布範囲については新発見であるため周知化を行った（新木場東遺跡）。入野地区においても新木場地区と同様の傾向を示しており、良好な残存状態の遺物包含層が検出されたため、周知化を行い、遺跡の保護を図った（殿木場遺跡）。

(6) 筑後川下流用水事業

遺跡は確認されなかった。

◎ 文化財発掘調査

(1) 旧石器時代～縄文時代

この時期については6遺跡が調査されている。船石遺跡（上峰村）は切通川東岸の河岸段丘上（標高14～25m）に立地し、縄文時代後期の集落跡が確認されている。上志波屋七ノ坪遺跡（神埼町）は低位段丘上（標高13～15m）に立地しており、縄文時代早期の集石遺構と押型文土器片、石斧、石鏃等を含む遺物包含層が検出されている。吹野遺跡（鹿島市）は木庭川の旧河川痕に挟まれた微高地上（標高50m）に位置し、黒川式並行期の織布痕土器片、網目痕土器片、石鏃、磨石等この地方における縄文文化を考察する上で貴重な資料が出土している。唐ノ川遺跡群（唐津市）は上場台地の南東端の緩丘陵面（標高170m）に位置し、唐ノ川高峰遺跡、唐ノ川境遺跡が調査された。遺構については柱穴、土壙、溝跡等の存在が確認され、また深鉢、浅鉢、石斧等の包含層も検出されているが、これらは縄文時代晩期中頃から、稲作農耕が開始される縄文時代晩期後半にかけての上場台地の状態を示している。来島通之陣跡（呼子町）は文禄・慶長の役に関連する遺跡であるが、その分布範囲内から陣跡関連の遺構・遺物に加えてナイフ形石器、スクレイパー、ポイント、縄文土器片等の、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が検出されており、上場台地における文化の変遷を研究する上で重要な追加資料となっている。牟形遺跡群（玄海町）は牟形三枚溜周辺の丘陵鞍部（標高200m）に位置し、遺跡群の中で牧ノ地Ⅰ・Ⅱ遺跡、及び稗田Ⅰ・Ⅱ遺跡が今回の調査対象となった。遺構は確認されなかったものの、ナイフ形石器、石鏃、細石刃等豊富な遺物が検出され、旧石器時代後期から縄

文時代晩期にかけての文化層の存在が窺える。

(2) 弥生時代

この時期の遺跡に関する調査例は県東部～中央部の脊振山系南裾部に集中しており、今回8件の報告があるが、集落跡に墳墓群が伴っているケースが多い。原古賀遺跡群（原古賀三本谷遺跡、原古賀四本谷遺跡、原古賀五本谷遺跡）は切通川東岸の微高地上（標高20～22m）に立地し、弥生時代全期を通じて営まれた集落跡である。特に注目すべきは2基確認された環濠状の遺構で東西45m、南北60mに及ぶ二重環濠を持ち、西側に10m×3mの張出し部を備える特殊な形態のものである。また出土遺物も豊富で鐸形土製品、鏡片、製鉄遺構の存在を窺わせるスラッグ、龍の羽口等が検出されており、佐賀東部地区におけるこの時期の集落跡研究に重要な資料を提供している。また隣接する船石遺跡でも集落跡が確認されており、原古賀遺跡群等との関連性が想定される。志波屋一ノ坪遺跡（神埼町）は低位段丘上（標高12～13m）に位置し、弥生時代全期を通じて集落跡が形成されており、壺形土器、甕形土器等土器類のほか鉄鎌も検出されている。また上志波屋七ノ坪遺跡では弥生時代前期の集落跡が検出されている。立野遺跡（佐賀市）は低丘陵上（標高8m）に成立しており、弥生時代中期から後期にかけての集落跡が確認されている。遺構は竪穴住居跡、掘立柱住居跡が中心で、周溝状遺構も3基認められる。本村籠遺跡（大和町）は嘉瀬川の氾濫原である微高地上（標高7m）に形成されており、集落跡に加えて甕棺墓を主体とする墳墓群が検出されている。三重楳ノ木遺跡（諸富町）は低平な水田部に島状に点在する微高地上（標高2.7m）に所在する弥生時代後期の集落跡である。湯崎東遺跡（白石町）は杵島山系東部に展開する低平な水田地帯（標高3.4m）に位置し、調査によって弥生時代後期の集落跡の存在が確認された。集落を形成しているのは"摩擦杭工法"と呼ばれる、建物の自重を拡散させる手法を用いた高床構造の建造物で、地盤沈下を克服する高度な技術がこの時期に既に採用されていたことから、考古学のみならず建築学の分野からも注目を集めている。

(3) 古墳時代

この時期に属する遺跡の調査例は10件報告されている。東福寺遺跡（基山町）は丘陵谷部（標高40m）に所在しており、古墳時代後期の遺構が検出されている。特に底部に円礫を敷き込み、木材を組み合わせた構造物を備える溝は、その用途と共に当時の土木工法の解明にも大いに資するであろう。田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡（三田川町）は田手川右岸の微高地上（標高12～13m）に立地しており、溝跡、土壙、小穴等が確認されている。志波屋一ノ坪遺跡では古墳時代前期の集落跡が確認されており、布留式土器が出土している。於保三本松遺跡（大和町）は微高地上（標高8m）に立地しており、今回の調査によって古墳時代前期の集落跡の存在が明らかとなった。また遺物についても布留式の一括資料が検出されている。三重楳ノ木遺跡では井戸跡の覆土上層から布留0式の甕形土器、小形丸底壺が、そして下層からは庄

内甕を模倣した甕形土器、山陰系の壺形土器、東海系の甕形土器等が一括で出土しており、佐賀平野南部地域における弥生文化の衰微と古墳文化の定着過程を考察する上で不可欠の資料となっている。またこれと並行して調査された石塚古墳群２号墳（諸富町）は低平な水田部（標高３m）に立地しており、62年度に農業基盤整備事業に関連して調査され、馬具杏葉、金銅製蓮華文装飾品、挂甲等が出土して注目された１号墳に近接している。調査の結果、横穴式石室の腰石の一部を残すのみで、破壊が全体に及んでいることが判明した。なお６世紀～７世紀の須恵器、ガラス小玉、馬具、太刀等が検出されている。市場遺跡（武雄市）は六角川の氾濫原（標高８～９m）に立地しており、集落跡が確認されている。久治遺跡（白石町）は僅かに傾斜をもつ低平な水田（標高３m）に位置しており、古墳時代後期の集落跡が確認されている。また同時期の土壙底部より鉄製の刃部を装着したと思われる鋤先等が出土している。多田遺跡（白石町）もまた現況が水田である低地（標高２～2.4m）に立地しており、遺構の性質、及び周囲の環境から古墳時代後期の集落跡の存在が想定され得る。

(4) 古代（奈良時代・平安時代）

この時期の調査例として13遺跡が報告されている。田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡では土壙、小穴等が確認されており、集落跡の存在が想定される。志波屋一ノ坪遺跡においては同一方向に主軸を揃えた掘立柱建物を主体とする集落跡の存在が確認され、「神埼厨」とヘラ書きされた土器をはじめ、碗・杯等が多量に出土していることから、調査地区の東側近接地域に比定されている神埼郡衙との関連性が考えられる。また同じ神埼町内の上志波屋七ノ坪遺跡では奈良時代の集落跡が確認されている。横武城跡（神埼町）は河川の氾濫によって形成された低湿地（標高３～４m）に立地しているが、築城以前に同地に設けられていた条里制に関連する区画溝が検出されている。村徳永遺跡（佐賀市）は脊振山系南麓に広がる微丘陵上に所在しており、平安時代の集落跡の存在が想定される。本村籠遺跡では平安時代末期に形成された集落跡が確認されているが、通常の集落というよりは、むしろ豪族クラスの居館的な色合いが強く、在地の豪族「於保一族」との関連性が想定される。また遺物についても特色の有るものが多く、平安時代の黒色土器、瓦器等に加え、井戸跡から田舟を転用したものと曲物とで作られた井戸枠が検出されている。またこれに近接する於保三本松遺跡においては掘立柱建物跡を主体とする平安時代の集落跡が確認されているが、その掘り方の規模、及び柱間の取り方に差があり、数回にわたって立て替えられた可能性がある。三重本村遺跡（諸富町）は低平な水田部の中に点在する微高地上（標高３m）に所在しており、奈良・平安時代の集落跡の存在が想定される。また同時期の土壙内から出土した「宮邊」と書かれた墨書土器は、官衙関連の遺物の可能性もある。寺浦廃寺（小城町）は天山山系の南麓に展開する扇状地形の扇頂部（標高45m）に立地している。創建は７世紀末で法隆寺式の伽藍配置をとると考えられ、今回の調査においては寺域の区画に関連すると見られる溝跡が確認され、重弧文軒平瓦、土師器の小皿・碗、瓦質土器

等が検出されている。湯崎東遺跡では奈良時代の集落跡の存在が想定され、土壙内から竪杵が出土している。久治遺跡では奈良時代が主体であり、東西65mを測る環濠をはじめ土壙、井戸跡等が確認されており、「下」、「前」、「紀」と墨書された須恵器の杯蓋や身、滑石製石鍋を転用した舟形等が出土している。多田遺跡はその周辺が平安初期には〝多駄〟と呼ばれる荘園であったことから、その時代の集落跡の存在が想定され得る。

(5) 中世（鎌倉時代・室町時代）

この時期については12遺跡の調査例が報告されているが、その分布は東部地区から南部地区にまで広がり、特に有明海の沿岸部や大きな河川の流域に集中して見られる。中野城跡（北茂安町）は筑後川の氾濫原（標高４～５ｍ）に立地している城館跡であり、溝跡、土壙が確認され、輸入陶磁器、国産陶磁器等が検出されている。西島二本杉遺跡（三根町）は寒水川右岸の低平な水田部（標高４ｍ）に所在しており、当時の集落跡の形態を良好に保っている遺跡である。特に木器等木質の保存状態が良く、生活文化の復元に関して貴重な資料となっている。大曲二ノ坪遺跡・大曲鶴ノ森遺跡（東脊振村）は田手川の氾濫原（標高12～13m）に立地している生産遺跡（水田遺構）である。今回の調査では確認できなかったものの、当該地区周辺において古代官道の残存の可能性が指摘されている。横武城跡は周囲に水路を配置するという、この地域の特徴的な形態を有する城館跡である。調査により掘立柱建物跡、土壙、土壙墓、井戸跡等が検出されており、擂鉢、小皿、木製品等が出土している。周辺部の水路も含めた一帯を「クリーク公園」として整備し、文化財の保存・活用を図る計画が具体化しつつある。下西八本松遺跡（千代田町）は中地江川の東方に広がる低平な水田部（標高３ｍ）に所在し、中世の遺物包含層が上下２層に別れて存在することが判っている。村徳永遺跡では室町時代のものと思われる掘立柱建物跡、溝跡等が確認されており、東播系の中世須恵器、常滑焼の甕が出土している。また同じ佐賀市の立野遺跡ではこの時期の土壙が検出されている。本村籠遺跡では鎌倉時代の土壙墓から龍泉窯系の碗、土師器の小皿、小刀一振りが出土しており、同時代の埋葬、及び供献の形態を知る上で貴重な資料となっている。三重本村遺跡では集落跡が確認されており、瓦器、輸入陶磁器等が出土している。三重櫟ノ木遺跡においては掘立柱建物跡と、その地所の広がりを区画する溝跡が確認されており、形態から館跡の存在する可能性が大きい。市場遺跡では井戸跡、土壙、溝跡等が確認されており、糸切り底の杯・小皿が大量に出土している。

(6) 近世（安土・桃山時代以降）

この時期の遺跡については４件の報告例がある。上志波屋七ノ坪遺跡では、溝跡とそれに区画された建物跡が確認されており、近世陶磁器、瓦質の鉢、石塔の一部等が検出されている。この地域は江戸時代に寺が存在したと伝えられており、調査地区が寺域の一部である可能性もある。市場遺跡では掘立柱建物跡を主体とする集落跡が確認されており、国産の陶磁器類が出土している。また井手橋遺跡でも同様に掘立柱建物跡、土壙を主体とする集落跡が確認されて

おり、この時期の武雄地方の生活文化を知る上で貴重な資料となっている。来島通之陣跡（呼子町）は殿ノ浦半島の西の付け根にあたる微高地上（標高49m）に位置しており、文禄・慶長の役（1592～1598）の際に築かれた陣跡である。調査の結果、陣跡に関連すると思われる集石遺構等を確認している。

以上、佐賀県内において昭和63年度に実施された農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の確認調査、及び本調査に関する概略を付記したが、近年、事業の進歩に伴って事業実施予定地区が遺跡の密集地域へ集中する傾向が見られ、文化財保護と開発との調整は、更に困難なものになりつつある。こうした中で文化財を後世に伝えて行くためには、文化財保護行政の推進と開発事業の速やかな遂行にたずさわっている我々の、尚一層の努力が求められるところである。

佐賀県文化財調査報告書第98集

佐賀県農業基盤整備事業に
係る文化財調査報告書８

発行　平成２年３月31日
佐賀県教育委員会
佐賀市城内1-1-59
印刷　鹿島印刷㈱
鹿島市古枝甲249-3
TEL　09546-2-4131